
薔薇のまねごと

るうあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇のまねごと

【Nコード】

N1721U

【作者名】

るつあ

【あらすじ】

吸血鬼の青年ユエルに仕える、元人間の少女で「眷族」のミズカ。ある日ミズカは「眷族」の存在理由を知らされます。それはただ従属するための存在ではなくて…。夏の避暑地、何かが変わってゆくような、そんな予感にとまどいがちなユエルとミズカの物語。

【こちらは当サイトにおいて掲載していた「まねごとみたいな恋でも」の改題・改稿したものです】

1・深緑の森にて

針葉樹の緑が艶やかな、今は葉月。

わたしとわたしのご主人様は、避暑と商売を兼ねて、高原の別荘地に来ている。

お盆前後の夏季は大賑わいを見せる、観光地としても有名な高原の別荘地。

わたしのご主人様は何度か訪れたことがあるようだったけど、わたしは初めて訪れる所だった。

唐松と苔と羊歯の緑が美しい閑静な別荘地で、木々の隙間から寄棟屋根や三角屋根の木造建築が広い距離を置いて建てられているのが窺える。場所によって、ぎゅうぎゅう詰めに並んで建っているところもあるらしい。コンクリート舗装されている道もあれば、土が剥き出しになって轍が続いている道もあって、行き止まりになってしまう道も多かった。

わたしのご主人様を選んだ現在の住処は、賑わった場所から少し離れた、奥まった場所にある。

木造総二階建てで、銅板葺の白い洋館。緑の中であって、白がよく映える。それほど大きくはない建物だけど、もとはどこかの国の貴族だか富豪だかの別荘だったらしく、外装もさることながら、内装も美しい。何度か修復・改装工事はしたらしいから、百年近く前に造られたとのことだけど、古びた感じはしない。半円形に張り出されたベランダが殊に目を惹く。

どういう経緯でこの屋敷を手に入れたのか、ご主人様にはあえて訊かない。どうせ、「あまり大きな声では言えない」手を使ったに違いないから。

その洋館の、正面入り口に看板が立てられている。

『占いの門』

ネーミングセンスを疑う店名だけど、商売の名が記されているのは、わかりやすくいいのかな。

この看板を見るたび、毎度首を傾げてしまう。

こんな胡散臭そうなネーミングの店にも来客はそこそこあって、このひと夏である程度は稼げそうだ。

……愉快なことじゃないけれど。

いかにも重々しいチーク製の建具枠の外側に、石製の太いアーチ状の額縁が廻らされている。

それを何とはなしに眺めやり、ひとつため息をついてから、重い扉を開け、屋敷の中に入った。

朝の散歩から帰宅したわたしを出迎えてくれる人はなく、広い屋敷の中、おそらく一階の書斎か二階の寝室のどちらかにいるだろうご主人様の元へ向かった。

わたしのご主人様は、意外なことに、書斎にいた。

ゆったりとくつろいだ姿勢で寝椅子に腰かけ、本を読んでいる。

熱中している風ではなく、ぱらぱらと流し読みしているようだった。「ただ今戻りました、ユエル様」と報告すると、本に落としていた緑色の目をこちらに向けて、「おかえり、ミズカ」と微笑みかけてくれた。

それはもう目も眩むような美しい微笑みで。

自然と紅潮してしまう頬と胸の動悸をごまかすために、平静な口調でユエル様に尋ねた。

「何を読んでいるのかと思えば……。いったいいつの間にそんなに揃えたんですか、ユエル様？」

サクラ材の丸卓子に山積みになっているのは、少女漫画と小説。

小説は、「ライト」が上につく類のもの。表紙を見ただけでは小説とは分からないような、そんな装丁の本だ。

小説と「ライトノベル」の違いについて、いつだったかユエル様

に説明してもらったことがあるけれど、なんだかよくわからず、結局ちゃんとは理解できなかった。少女向けと少年（青年？）向けでは、文体や内容に差異があったりするそうだけど、

「それもまた、その時の流行次第で変わるから、一概にこうだ、とは言いつれないジャンルで、良くも悪くも、不変のものではないね」とのことらしい。

ユエル様が勧めてくれた何冊かの本は、ノベルの上にライトがつくつかないかの区別はよくわからなかったけど、大抵のものは読んでみて面白いと思った。すらすらと読めてしまって頭に残らないものもあつたけれど。

「久しぶりにミズカも読んでみる？ こっちの少女向けファンタジーならミズカでも楽しめると思うし、なかなか興味深いよ」

「今はけっこうです。そんなことよりユエル様、せめてお召し替えなさってください」

だってユエル様、夜着のままなのだ。シャツのボタンは上四つをはずしているせいで、胸元がはだけてしまっている。女ではないから見えても……まあ、いいのだけど。

それでもやっぱり目のやり場に困るんですってば、ユエル様！ わたしが仕えている「ユエル様」は、貴公子然とした青年。年の頃は、見た目で二十代半ばといったところ。

緑色の瞳が白絹のような肌に映える。白髪と見まごうつややかなプラチナブロンドは長く、肩にかかっている。

ユエル様が手にしている少女漫画に登場してきそうな耽美な容姿で、「白皙の美青年」の見本みたいな美貌の持ち主だ。もちろん、日本人ではない。

わたしは日本の生まれだけど、ユエル様の生まれ故郷は北欧の方らしい。

詳細を聞くとしても、

「国名？ さあ、当時は何と言ったかな？」

ユエル様はそう言って微笑み、はぐらかされてしまった。だから

詮索されたくないのだろうと、それ以上聞くのはやめた。

ただ、ヨーロッパ中を転々としていたとのことで、ユエル様は何ヶ国語かを自在に操れる。日本語も、日本人のわたしより流暢に話せるぐらいにお上手だ。英語にフランス語に、ポルトガル語、それにドイツ語なんかも不自由なく喋れるユエル様だけど、それらを披露する機会はめったにない。

実のところ、不思議だつたりする。

ユエル様はどうして日本に来て、そして居続けているんだろう……？

不思議なことだらけのユエル様は、わたしに着替えをせつつかれてもなかなか腰を上げてはくれない。不思議で、ちょっと困った方なのだ、わたしのご主人様は。

「ユエル様、もういい加減、着替えを済ませて、開店準備をしてください。そろそろ開店時間になりますよ？」

「ミズカ、これを表に下げてきて」

「なんですか？」

手渡されたのは、木材の小さなプレートだった。そこには、『臨時休業』の文字が記されている。

「お休みするなんて聞いてません」

「臨時の休業だからね」

「……ユエル様」

「そうしかめ面をしないで、ミズカ。実は今日……だと思っただが、客が来るんだよ」

「お客様、ですか？ 占いのお客様ではなくて？」

「そう。遠方から遥々とね。連絡があったことを忘れてて、それでミズカに知らせるのが遅くなった。たぶん、二人……だと思っただが」

「ユエル様のご友人ですか？」

「一人はたしかに友人だが」

ユエル様は苦笑して答えた。ちよつと意味ありげで複雑そうな微笑みに見えた。

「わかりました。でも、その漫画は片付けてください」

「何故？ 面白いのに」

「どういう意味の「面白い」かはわからないけど、ユエル様のような美貌の青年が読み耽っていいものじゃない気がします。……なんてことは言えなかつたけれど。」

「吸血鬼を題材に扱った漫画や小説というものは、少女向けに多いのだね。しかも偏っていて興味深い」

「吸血鬼って……ユエル様」

「今度はわたしが複雑な表情をする番だった。」

「吸血鬼とやらは切なく哀れで耽美な存在のようだな。残忍で酷薄、しかし意外に一途、と」

「それが今まで読了した漫画や小説から集積した「吸血鬼」の総イメージらしい。」

「私に男色の趣味はないが、……たしかにそうした趣味の奴もいたな」

くすつと、悪戯っぽく笑う。まさに、艶然と。イメージ通りに。「的を射ていることもあるね。血を吸うのではなく、“生氣”を吸うというのは、確かにその通りだ。不老で長寿なもの、たしかにそうだね」

かつての吸血鬼のイメージといえば、血に飢えた亡者、牙をむいて処女に襲い掛かる怪しい夜の魔物、といったところだろうか。ブルム・ストーカーが書いたような。

「にんにくや十字架、日の光が弱点じゃないことも、よくわかってるね。まあ、作者によってそのあたりは変わってくるようだが。人間の信仰心が弱点と描く者もいるが、これはどうだろうね？」

「こういう場合の信仰心というのは、主にカトリックだろうか？ そうしたことに詳しくないから何とも言えないけれど、実際、現代の日本で、カトリック教の信仰心の篤さに畏怖するような場面には出くわさない。」

「だから、「どうだろうか」と問われても、わたしとしては答えよ

うがなく、困ってしまう。

それよりも……

「……ユエル様、吸血鬼という言い方は嫌ってらっしゃったのに」「他にないからね、日本語では。妖怪という言い方は広義すぎるしね。化け物には違いないが」

「……………」

つまり、「吸血鬼」なのだ。わたし達は。生き物の“生氣”を吸って生きる、不老で長寿の「吸血鬼」。

厳密に言えば、わたしはユエル様とは違う。

ともあれ、人間ではない、人外的な存在であることはたしかで、便宜上「吸血鬼」と言っている。誰に言うでもないのだけど。

占いなんてふざけた商売を、ひと夏限定で始めたのは、容易く人間の生氣を得るため。もちろんお金も要るので、「一石二鳥のいいアイデアだろう？」と、ユエル様は言うけれど。

もっと他に方法はなかったのかしらと思う。

当たるのかどうか微妙な占いなのに、客の入りはいい。それも女性ばかり。占いが目的というよりは、鑑賞に値する美青年を一目見ようとやってくる。しかも料金を払って。

「当然のことだね」

と、ユエル様は囁く。

まったくもって、自意識過剰なユエル様だ。もっとも自惚れてもいいほどの美貌の持ち主には違いないのだけど。

謙遜という言葉を教えてさしあげたい……。

ため息まじりにうつかりこぼしたわたしの独語を、耳ざといユエル様はしっかりと聞きとっていて、不快な顔をするどころか慢気な笑顔を浮かべている。

「謙遜よりも、自己を正しく評価することこそ、美德だと思うが？」

「過大評価に陥りがちなんです、ユエル様は」

「ミスカは私と違い、遜恭としすぎるきらいがある。ミスカこそ自己を正しく評価しても良いと思うが、まあそれが、ミスカの美德で

もあるから、相変わらずでいてほしいとも思うよ」

「ユエル様こそ相変わらざるの驕気っぷり、ある意味、安心します」
本当は、驕り高ぶったような人じゃないって分かってるから、優しさに甘えて、つい軽口をたたいてしまう。

「ただユエル様は怒りもせず、

「それはよかった」

と言つて、艶然と微笑んだ。

「気恥ずかしさをごまかすために、別室から段ボールを持ってきて、そこに漫画本を詰めこむ作業を始めた。

「ミスカ、それらをどうするつもり？」

「売ります。たいした金額にはならないでしょうけど、邪魔になりますから」

吸血鬼のわたし達の食料は、人間の生気だ。

だから食料を調達する費用は必要ないけれど、人間のフリをし、生活をしていくには何かとお金がかかる。そのために働くこともある。

「そうしなくても、ユエル様には豊富な私財…主に貴金屬類…があつて、時々それを現金化して持つてくる。贅沢さえしなければ、それで一、二年は楽に暮らせるくらいのお金をぼんつとわたしに渡してくる。」

「何もせず遊んで（というか、だらけて）暮らすこともあるけれど、何食わぬ顔で学校に通つたこともあつた。」

「わたしは生徒、ユエル様は教師になりすまして。」

「秋になったら、またどこかの学校にもぐりこもつか。生気が楽に得やすい場所だしね」

「ユエル様がそうなさいたいのなら」

「ミスカも、短い間だが、学生生活を楽しめるだろうしね？」

「……………」

かつて……ただの人間だったわたしは、学校などに通える身分ではなかった。だから学校に通えたのがすごく嬉しくて、その時のわたしのしゃぎようをユエル様は思いだしたのだろう。

ユエル様は優しく微笑み、わたしを見つめてくる。穏やかなような、切ないような、深い深い、緑の双眸を。

「ミズカは、たしか十七歳……だったね？」

「たぶんそうだと思います。はつきりとは分かりませんが……」
もう何十年……いや、百何年前の話だ。わたしが「十七歳」くらしいの年齢だったのは。

わたしが、わたしのことで知っている事といえば、「水果」という名前と、孤児だということ、そしてたぶん十七歳くらいだったということ。

親なしだったわたしは孤児の收容所のような施設にいて、読み書きを覚えた頃になってから、とある子爵家のお屋敷に奉公にあがることとなった。そこにどのような経緯があったかすら、知らない。下働きとして雇われたわたしの待遇は、「下の上」といったところだった。残り物の寄せ集めという内容の食事が二度と、蚤の涙ほどの給金。給金が出るだけでもありがたかった。

「みすばらしいという言葉がぴったりだったね、あの頃のミズカは」
あの頃、たしかに、みすばらしいの一言に尽きるわたしだった。身なりもまとともに整えられず、痩せて、這いつくばるようになして働いていた。

今では小綺麗な服を着られて、一般常識や勉強もユエル様に教えてもらい、学校にまで通わせてもらった。

食事の心配は……ユエル様が傍にいる限り、保障されている。

「ユエル様のおかげです、何もかも」

「もうすっかり、みすばらしさは抜けたね、ミズカ」

「……っ」

わたしの手を取り、ユエル様は匂いたつ薔薇のように笑う。

突然手を握られて、胸がドキリと高鳴った。

ユエル様の幻術に、わたしはかからない……はずなんだけど。顔どころか、全身熱くなってきて、慌てて手をひっこめた。

「のっ、喉、渴きませんか、ユエル様！ 何か冷たいものでもお持ちします」

「……………」

「あ、温かいものの方がいいですか？ 目が覚めるように、コーヒーとか」

「……いや」

ユエル様は何かを言いかけ、けれど一度口を噤んだ。

それから、ふっとため息をつき、

「そうだな、冷たいミントティーがいい。淹れてきてくれるかな？」
そう言った。きつと、言いたかった事ではないだろう。なんとなく、そう感じた。

「わかりました。すぐに用意しますね！ それじゃあユエル様、その間にこの本、段ボール箱に詰めておいてください」

「はいはい」

主人に対しての口利きは、かつて奉公に上がっていた家で身につけたはずだった。

ましてや主人に「命令」するなど、言語道断。

だけど、過去の思い出と一緒にそれらは忘れてしまった、現在のわたしだ。

ユエル様は、困ったような、呆れたような、そして安堵したようなため息をついて、笑う。

「ミズカの方も淹れておいで。一緒に、朝のティータイムといこう」
「はい……っ」

応えてから、わたしは大急ぎでキッチンへと向かった。

2・訪問者

窓越しに、臨時休業の看板を見て、残念そうに立ち去っていた女の子達を見送った。

きつと情報源の曖昧な口コミを聞きつけて来たのだろう。再訪問の子達もいたかもしれない。

絶世と称してもあながち言い過ぎともいいきれない美形の占い師を一目見ようとやってきた女の子達に、無駄足を踏ませてしまった。申し訳ないような、ほっとしたような。

ユエル様の食事となる女の子達の大半は、学生のような。あとは主婦かな？

まだお盆前だけど、存外客数は多い。もう夏休みには入ってるから、さすがに観光地なだけあって、ぼちぼち賑わいをみせつつある。「それで？ お客様はいついらっしやるんですか？」

「ミントティーを用意し、テーブルに置いた。」

「さあ。今日中には来ると思うが」

わたしがミントティーを用意している間に、ようやく着替えを済ませてくださったユエル様は、書斎ではなく、居間の方へ移動し、そこで寛いでいる。

臨時休業ということもあって、着替えてはきたものの、夜着よりはきちんとしているという程度の衣服だ。

グレンチェックのパンツをはいた長い足をゆったりと組んで座り、ソファの背もたれに片腕を投げ出すように置いている。長袖のシャツだから、露出は少ない……と言いたるところだけど、淡い浅黄色のシャツのボタンは下半分しかとめてない。

もっつ、ユエル様！ 目のやり場に困るんですけど！

と、苦情を申し立てたいところだけど、恥ずかしくって、とても言えない。

「……あの、ユエル様。一応確認しておきますが、お客様というの

は、その……やっぱり同族の方々でいらつしやるんですか？」

「ん、ああ、そうだよ。……そう、“同族”だ」

ユエル様は冷えたミントティーをとり、口をつけた。氷がカラッと涼やかな音をたてる。

わたし達は、固形物は食べられない。けれど液体ならば、摂取できる。

どつという仕組みなのかは解からないけれど、なんでも液体は体内で蒸発するらしい。だから「飲む」ことはできて、ゆえに味覚もちやんとある。

付け加えると、わたし達は人間の生気を「吸う」わけだけど、それを「飲む」という言葉に置き換えている。誰が聞いても怪しまれないように、ということらしい。

ユエル様はミントティーで喉を潤し、一息ついてから話し出した。

「ミズカに話しておかねばならないね、私達のことを」

「はい？」

私達のこと？

吸血鬼だということ以外に、まだ何か説明が必要なことが？

珍しく真面目な顔つきのユエル様だ。深刻な話なのだろうか。

ユエル様に座るよう促され、差し向かいのソファーに腰かけた。

「もっと早くに話しておくべきだったかもしれないと、今さらに思うが」

「……………」

戸惑っているユエル様を見るのは、ずいぶんと久しい。

「長寿の代償として、子孫を残すことはできないと、これは以前話したね？」

「……………はい」

「だが、私達は不死ではない。どんな形であれ、いずれ死は訪れる」
消滅する、らしい。人間の死とは違う。塵になり、肉塊は残らないと聞いた。

それを怖くないといえば嘘になるけれど、人間だって死んでしま

えば骨が残るだけ。さほどの違いはない。自分に、そう言い聞かせていた頃もあった。

「さて、ミスカ。不思議に思わない？」

「はい？」

「私達は長寿だが、いずれは消える。そして伝説の吸血鬼のように、血を吸う行為で仲間を増やすというとはしない。とすれば、私達は自然全滅してしまってもおかしくないのでは、と思わない？」

「あ…っ！」

その通りだ、言われてみれば。

わたしは目を瞬かせ、ユエル様を見つめた。

* * *

かつて、ただの人間だったわたしは、ユエル様によって、吸血鬼の「眷族」にされた。

血を吸われると吸血鬼になる、という伝説に多少は似ているけど、実際はそんなものではない。

わたしはユエル様によって、生気を分け与えられ、たしかに吸血鬼の仲間になった。

わたしのような存在を「眷族」というのだという。そして、「眷族」は「主」の生気のみを糧に生かされている。

だからわたしはユエル様の生気が受けつけない。人間の生気を直接「飲む」ことができないから、ユエル様がいなくなってしまうたら、わたしは飢えて消えてしまう。……それだけの存在だ。

「ミスカ、誤解をしないで。“眷族”はただ従属するだけの存在ではないのだよ。とても……大切な存在なのだから」

ユエル様が悲しそうに、そう言った。本当に、申し訳なさそうな顔をしたのだ、あの時。

わたしを着族にし、吸血鬼たる自分の素性を明かした、あの時に。

遠い……遠い記憶。

不思議と、いつまでも色あせない思い出もある。

雨の港で行き倒れている銀髪の異人さんを見つけた。

放つてはおけず、行き倒れていた異人さんを、奉公していた屋敷に連れて帰った、あの日。

あの日が、すべての始まりだった。

わたしの雇い主は当然いい顔をしなかった。

わたしがとるに足らない下賤の奉公人だということもあつたらうし、そのわたしが引きずるようにして連れ帰った異人さんの正体も不明で、厄介事に関わりたくないと思つたのだらう。

部屋も貸してはくれず、風雨をどうにかしのげる程度の、狭い使用人の宿舎で、わたし一人、意識の混濁している異人さんを介抱するしかなかった。

意識もなく、苦しげに息をつく異人さんを薄っぺらな布団に寝かせ、その上にわたしの持ち合わせのぼろ服をかけて、温めた。そして一晩中、手を握っていた。そのくらいしかできなかつた。ただ傍についてあげるだけしか。

ぼろ布を被せているのが申し訳ないほど、異人さんは美しかった。

介抱の甲斐があつたのかどうなのか、翌朝目を覚まし、意識を取り戻した異人さんは、わたしと、そして一応はわたしの雇い主に礼を述べ、屋敷を出て行った。

それから数日後、異人さんが現れた。

身なりを整え、豪華な格好し、最新式の車に乗って。

外国の貴族の子息で、相当な財産家だと知り、わたしの雇い主は

あからさまに態度を変えた。

米搗きバツタもそのけにぺこぺこし、両手をこすり合わせて言い訳と世辞とを繰り返した。けれど、異人さんは表情一つ変えず、淡々とした口調で用件のみを述べた。

「その娘を買い受けたのだが、幾らならば手放してくれようか」
その娘……つまり、わたしのことだった。

来訪の理由に、わたしは仰天した。

結局。

わたしはあっけなく売られてしまった。

わたしは、ただの一面識しかない異人さんのお屋敷に上がることになった。

わたしが働いていた子爵家の屋敷の何倍もある立派な邸宅を唾然と眺め、……………絶望した。

手のあかぎれが消えないほどの掃除が、わたしを待っている。朝から晩までこき使われるに違いない。

そう思っていたのに。

わたしを買い取った新しいご主人様：ユエル様は、わたしの手をとって、「すまない」と謝ったのだ。買い取る、という行為に対して、ユエル様自身、気分を悪くしていたらしい。

「人身売買など、恥すべきことだ」と。

ユエル様はわたしにキレイな服を着せてくれ、女学校で習うような勉強は一通り教えてくれた。

仕事も、させてもらった。これは、わたしの方から頼み込んで、ただ飯食いなんてイヤだったから。

でも使用人は他にも沢山いたから、残っている仕事は僅かしかなかった。せいぜい、ユエル様の私室を掃除させてもらうくらいで、いつの間にか、わたしの手からはあかぎれが消えていた。

どんな目的でこんなに優しくしてくれるのかと、最初は気味が悪かった。

でも、いつしか、わたしは現状に慣らされた。不安感と疑問は僅

かに残ったものの、暗い疑惑は薄れていった。
ユエル様の元に召されて、二年が経った。瞬く間に。
……そして、その二年の後。
わたしはユエル様の「眷族」になった。

* * *

わたしは話の続きを急かすようにユエル様を見つめた。
ユエル様はふうつと長い息をつき、わたしから視線を逸らした。
「眷族の意味についても、ちゃんと話しておかねばならなかったんだが」

「え？」

話が逸れた？ 吸血鬼の絶滅危機についての話じゃなかった？
わたしが首を傾げ、ユエル様が再びわたしのほうに向き直った、
その時。

ビーツという、味気ない電子音が鳴った。

玄関のドアの横に設置された呼び出しブザーの音だ。

わたしは腰を浮かせた。中座することに多少戸惑ったけど、行っておいでとユエル様の目に促され、急いで玄関へ向かった。その間にもブザーは三度ほど鳴った。

せつかちな人だな。

施錠していなければ、勝手にドアを開けて入ってきそう。

ドアを開けると、そこにユエル様目的の訪問客がいた。

「あら、あなた」

反射的に、わたしは軽く会釈をした。

茶系のサマーニットと麻素材らしいドレープのきいた膝丈のスカートを召している、権高な態度の若い女性客。

日よけのためにはなく被っているつばの狭い帽子の下から、突

き上げるようにしてわたしを見る。美人といえなくもないけど、赤く塗りたくった口紅と、キツイ香水の匂いが、美しさを損なわせている。

「ユエル様はいらっしゃる？」

客には違いないけれど、ユエル様が待っているというお客様ではない。

この方は常連客だ。ここ一週間、ずっと通い詰めている。

「あの、今日は臨時休業なのですが」

「でもユエル様はいらっしゃるのでしょうか？」

言葉遣いは丁寧だ。だけどそれは礼儀正しいと同義語ではない、この方に限っては。

「あなたに用はないの。ユエル様を呼んで」

「……………」

一步、彼女は前に進んだ。わたしを押しつけて屋敷に入ろうとする。

「ちょっとあなた、邪魔。ユエル様にお会いしたいのよ。どいてくれないかしら」

「あの、ですね」

あまりに不躰ではないかと、非難しようとした。

どこかの財閥の令嬢だとかいうけど、あまりに礼儀を失っている。

「お待ちください、今、わたしが」

「どいてつたら。……あらっ」

屋敷内に侵入しようとする彼女の足を踏みとどまらせるのに成功したのは、結局、ユエル様だった。

「ユエル様」

声も顔も、さっきのそれとはまったくの別人に成り変わり、彼女のわたしを押しつける手にさらに力が加わった。

ほんの少しわたしがふらついたのをユエル様は見過ごさず、とっさに手を差し伸べて、わたしを寄せた。というか、わたしを盾にしている。背後からわたしの肩に手をおいて、そして押しかけてきた

来客と対面した。

「やあ、いらつしやい。……亜矢子さん」

名前を呼ぶ一瞬間の「……」は、名前の記憶をたどるための「……」だ。思いだせたのは良かったけれど、その短い間と、わたしの肩に置かれている手が、「亜矢子さん」はお気に召さなかったようだ。

紅く濡れたような唇が、歪む。そして鋭くわたしを睨みつけてきた。

「今日は、店は休みなのですが」

「看板を見ましたから、それは存じておりますわ」

それなら何用ですか。そうユエル様が問う前に、亜矢さんは片手に持っていた瓶を差し出した。

「こちらをお持ちいたしましたの。シュペートレーゼの白ワインですわ。それから」

ユエル様は瓶を受け取った。紙に包まれているから、ラベルは見えない。ドイツのワインらしい。

「こちら、招待状ですの」

つまり、こちらが本命ということだ。

ユエル様は、亜矢子さんが差し出した封筒を、ワインの時とは違ってすぐには受け取らなかった。

「三日後、わたしのホテルでパーティーがありますの。ぜひ、ユエル様もいらしてくださいな」

「……………それは、ありがたいお申し出ですね」

ユエル様は返答を避けた。けれど亜矢子さんは諾と取ったみたいだ。満足げな笑みを浮かべている。

亜矢子さんはたぶん、脳内でユエル様の了承を聞いたのかもしれない。あるいは、断られるはずがないと高をくくっているのか。

それにしても「わたしのホテル」とはまた、ずいぶんと簡略したものだ。「わたしの泊まっている(だけの)ホテル」という意味ではないことくらいは、わたしにも分かるけれど。

とりあえず招待状は受け取った。わたしが、代行で。

「それでユエル様。今日はこれから、お時間をとれまして？」

せつかく訪ねてきたのだ。何の収穫もなく帰るつもりはないらしい。

「もしお時間がおありでしたら、わたしのホテルへ遊びにいらっしやいませんか？ ちょうど昨日……」

「亜矢子さん」

ユエル様は優しげな、それでいてきつぱりとした声と態度で、亜矢子さんのお誘いを断った。

「残念ですが、実は今、来客中なんです。とても大切な客なのですが、亜矢子さんがいらしたようなので中座してきたのですよ。が、そろそろ戻らなくては。ミズカ」

ユエル様の手が、わたしの肩から離れた。

「ミズカ、そこまで亜矢子さんを送ってさしあげなさい」

「あ、はい」

「いいえっ、結構ですわ」

この時の亜矢子さんの表情は、とても複雑なものだった。

亜矢子さんが来たから、わざわざ顔をだしたのだと言ってくれたそのことは特別扱いされているようで嬉しかったみたいだけど、反面、追い出されている気分にもなったらしく……実際、追い返そうとしているのだけど……ユエル様の申し出は即座に「遠慮」した。

もちろん、ユエル様は断るとわかっていて、わざとそう言ったのだろう。それまでは気付かなかったようだ。

「それではまた、ユエル様。ごきげんよう」

挨拶だけ聞いていると、育ちも品も良いお嬢様そのものなんだけどな、亜矢子さんって。

小走りになつて屋敷から遠ざかる亜矢子さんの姿をユエル様は一瞥もせず、そのまますぐに踵を返した。

ようやく帰ったかと、ほっと胸を撫で下ろしている。

「ユエル様、そのワイン、ワインセラーにしまっておきます」

「ああ、頼むよ」

「それにしても、とっさの機転でしたね、来客だなんて」

「いや」

「え？」

居間に戻ると、さっきまでユエル様が座っていたソファーに見知らぬ美女が座って、微笑んでいる。

「ええっ？」

わたしは思わず、素っ頓狂な声をあげてしまった。

3・佳風

ゆるやかに波うつ豊かな長い金の髪、シミ一つない白珠の肌、瞳は海面を映したかのような青色。

黒づくめの衣装なのに、全身から煌めくような輝きが溢れだしている。

黒地のノースリーブカットソーには、有名な国外ブランドのロゴが左胸に小さく入ってて、ブランドに疎いわたしでも、そのブランド品がいかに高級か知っているほどに有名なデザイナーズブランドだ。きつとスカートも同じブランドのものだろう。黒地のスカートは、膝上何センチなのか、ついばかりたくなってしまうほど短い。マネキンも尻ごみするくらいの美脚を惜しげもなく見せてくれている。

露出の多い格好なのに、下卑た感はない。高級な衣服につりあう雰囲気があって、シンプルなデザインがよりいっそう美しさを際立たせていた。

目を奪われるような美女っぷりに、わたしは、それはもう間の抜けたようにぼかんとして、突如現れた美女に魅入っていた。

豪華絢爛という言葉がぴったりの美女ぶり、映画女優か一流のモデルのようなスタイルのよさは、なるほど、吸血鬼のイメージを損なわないと思う。

「ああ、あなたがユエルの眷族になった子ね！ 嬉しいわ、会いたかったのよお！」

したつたらずな口調だけど、妙な訛りのないきれいな日本語だ。

金髪碧眼の美女はやにわに立ち上がり、わたしに近寄ってきたかと思うと、

「っ！」

いきなりわたしに抱きついてきたのだ。

わたしは声も発せず、そのまま硬直してしまった。

もちろんイヤじゃないんだけど、なにしろ突然でっ！

「話で聞いていたよりもずっと可愛いわ！」

と言つて、わたしの髪を撫でたり、頬擦りをしてきたりした。

「ちっちゃくてふわふわしてて、ほんとになんて可愛いのに！」

「……っ」

もしわたしが男だったら、きつと鼻血を出して卒倒したに違いない。だって、……頬にあたる豊満な胸の感触や、甘くて爽やかな香水の匂いが心地好くて。

「アリア、そろそろ離れたらどうだ。ミズカが固まってる」

「あんっ」

ユエル様は金髪美女の肩を掴んで、半ば強引にわたしから引き離した。

「んもう、ちよつとくらいいいじゃない」

「せめて自己紹介を済ませてからにしたらどうだ？」

「あら、そうね」

ここは神々のおわす天空の国か、はたまた極楽の園かと思うくらい、目も眩むような美しい情景が、今、わたしの前にある。

白銀の髪的美男と黄金の髪的美女が並んで立っているのだ。

目がチカチカしてしまう！

美男の方は不機嫌そうに眉をしかめているけれど、美女の方は大輪の花のように微笑っている。

「あらあら。呆けちゃってるわね、大丈夫かしら？」

だっ、大丈夫なんかじゃないません！

ユエル様の美貌にすらまだ慣れず、ドキドキしてしまうというのに。

眼前に、衝撃的とも言える美女と美男が並び立っていて、平静でなんかいられません！

「ミズカ」

「はいっ」

ユエル様の冷たい手が、わたしの頬に触れた。

「ミズカ、落ち着きなさい」

「はっ、はいつ、すみません」

我ながら、持っていたワインを落とさなかったのは上出来だった。紹介しよう。彼女は古くからの友人の

「アリアレーリ・ロズモントよ。アリアって呼んでちょうだい。みんなそう呼ぶわ。よろしくね」

「……っ！」

言うのと同時に、アリアさんはまたわたしに抱きついた。

「アリア」

そしてまた、ユエル様に強引に引っぺがされた。

「はっ、初めまして。ミズカと言います、わたし、あの……っ」

「あなたのことは聞いていたわ、ユエルからね。会えるのを楽しみにしていたのよ」

「は、はあ……」

「聞いていた通りね。ユエルがようやく着族を持ってきて、それがあなたみたいな子で、本当によかったわ」

「え？」

「あたしの人を見る目は確かよ。ねえ、ユエル？」

「……」

アリアさんは暁の女神のように笑み、その笑みを受けてユエル様は苦虫を口に入れられたような渋面になっている。気恥ずかしげにも見えたのは、きつとわたしの目の錯覚なのだろうけど。

そういえば……

わたしは首を傾げた。

着族といえば、その説明をしてもええところだったんだ。

そう思ってユエル様を見ると、また、ユエル様はわたしから目を逸らした。

「アリア、一人なのか？」

「ええ。でも、あいつもすぐに来ると思うわよ」

「来るのか、結局」

「そりゃあ、来るでしょう。先輩風吹かしにね」

「……………」

ユエル様は小さく舌打ちして、黙ってしまった。

「あっ、あの、ユエル様。わたし、お茶を淹れてきます」

気まずい沈黙が流れているようなことはないのだけど、ユエル様が困っているような気がして、なんとなく、話題を転じる必要を感じた。

「ああ、そうしてくれ。アリア、まずは座って。話したいことがある」

わたしは「はい」と応え、アリアさんは「はいはい」と応えた。

声が重なって、ユエル様が呆れたようにため息をついた。

ユエル様のリクエストで、アリアさんに、とっておきのアールグレイティーを用意した。

「ミズカは茶を淹れるのが上手い」

そう言ってくれたことがあった。

食事をしなくていいわけだから、料理の腕はあげようがなかったけど、その分お茶を淹れるのは上手くなるかと頑張った。その努力を認めてくれて、すごく嬉しかった。

その自慢の腕をふるうべく、骨董品的価値のある（らしい）磁器のカップに、紅茶を注ぐ。

わたしがお茶を用意している間、ユエル様とアリアさんは居間で何やら話を続けていた。

わたしが居間に戻ると話は中断してしまい、何を話しているのかわからなかった。けれど、どうやら眷族のことを話していたらしい。

アリアさんがわたしに訊いてきた。

「眷族のことについて、詳しい説明はされてなかったのね？」

わたしはユエル様を見ることで、その問いに答えた。
そしてまたユエル様は、今度は臉を伏せるようにして、わたしから目を逸らしたのだ。

……いやだ。どうしてそんな顔をするの、ユエル様？

まるで悪いことをしたみたいに。それも、わたしに対して。

「話そうとしていたところに邪魔が入ったんだよ」

「それ、あたしのことを言っているのかしら？」

「……否定はしないが」

わたしは運んできたお茶をテーブルに置いた。

反論しかけたアリアさんの注意が、甘い香りのたちのぼるアールグレイティーに移ってくれるように。

「あら、よい香り」

うまくいったみたいで、ほっとした。

一口飲んで「美味しい」とも言ってくれて、その一言にも安堵した。

「ミズカの淹れる茶がまずいはずがない」

とユエル様が付け足してくれて、もっと嬉しかった。

「あらあら」

アリアさんはからかうように笑って、わたしとユエル様とを見比べる。何か言いかけたようだったけれど、ユエル様に睨まれて、肩をすぼめるにとどめた。

「そういえば、アリアさん」

「なあに？」

「アリアさん、どこから屋敷の中に入っただけですか？」

「二階からよ。二階のベランダの窓が開いていたから。人が来るのが見えたから、玄関は避けたの」

ということとは、亜矢子さんが来た時とほぼ同時にやって来たということなのかな？

それにしても、二階のベランダなんて……。よじ登ったとも思えないし、どうやってベランダに上がったのかな。

それに、泥棒じゃあるまいし、どうしてそんなところから屋敷内に入ってきたんだろう。

こそこそしなくちゃならない理由なんてないはずなのに、どうして人目を避けるのか、まずはそれを訊いてみた。

「そうねえ、つい、身を隠す癖がついちゃってるのよ」

アリアさんは述懐し、苦笑した。

人間に、「人間ではない」と知られるのが怖い……というより面倒なのだ。同じことを、ユエル様も言っていた。

「余計な手間を増やしたくないってこともあるわね。面倒事は、極力起こしたくないの」

アリアさんは穏やかに微笑んでいるけれど、ちょっと寂しげにも見えた。

「それにしても占いとは、いい商売を思いついたのね、ユエル。容易く人間の生気を得られそう」

「ああ」

ユエル様は素っ気なく応えた。そんなユエル様を、アリアさんはなんだか可笑しげな様子で眺め、真意を窺測きょくしているようだった。

「このためにわざわざ手相を研究したりはしてないんでしょう、ユエルのことだから。というより、そもそも占い自体まともによつてあげてないんじゃない？」

「たしかに手相に関しては詳しくないが、占いらしいことは言うてるさ」

「ユエルらしいこと」

アリアさんはころころと笑い、ユエル様は眉をしかめてため息をつく。

わたしの知らないユエル様の一面が、その美麗な容貌に表れていた。……新鮮で、少しドキドキする。

ドキドキするといえば、生気の飲み方もそうだ。

首に牙をたてる必要はないわけだけど、生気の得やすい場所というのはあって、首もその一つ。こめかみもそうだし、あとは手首も

そう。軽く指先を当てれば、生氣はそこから流れ込んでくる。

今回、この避暑地でユエル様が思いついた商売は、容易く生氣を得るのが第一の目的だった。

占いにかこつけて、お客様の……女性客の手を取り、そこから生氣を吸い取る。

拒む人なんているわけもなく、生氣は飲み放題だ。

「あたしも何か考えなくっちゃねえ。人通りの多い所に出向いて手当たり次第……っていうのは面倒そうだし。ここまできて飢えて消えちゃうなんて嫌なもの」

ワイン色のマニキュアが似合う細い指を唇にあて、アリアさんは小首を傾げる。

見た目判断なら二十代後半くらいに見えるアリアさんだけど、仕種は少し子供っぽい。

ユエル様が「抱きつく癖をなんとかしろ」と言っていたみたいに、すぐにスキンシップを取りたがるのも、子供っぽい一面を表わしているともいえる。

「それなら、乗馬クラブにでももぐりこんだらどうだ？ 以前、観光相手の講師を募集していた。ここから少し離れているが、車で十分ほどだろう。周辺にはペンションもある」

「あら、それ、いいわね！ 若い男の子や女の子が沢山いそうだし」「もう募集は締めきっているかもしれないが、まあ、そのあたりはなんとでもなるだろう」

「ええ、そうね」

ユエル様の提案にアリアさんは即座に乗った。

ちなみに、吸血鬼たるこの方達は、一種の魔法みたいなものを使える。“幻惑術”と言っているけれど、つまり洗脳みたいなものかな。人の思考や記憶を操作できる。

「人聞きの悪いことを言うね、ミズカは」

せめて催眠術と言いなさいとユエル様は言うけれど、大差ないと思う。

この屋敷だつて、たぶん不動産屋を幻惑の術でだまからかして手に入れたのに違いないもの。

学校にもぐりこむ時だつて、そう。

ユエル様は教員免許なんて当然持っていない。というより、もっと重要な戸籍すら持っていないのだから、人外的な手段をとらなくちゃ、教師になんてなれるわけがない。それは、わたしにしたつてそうだけど。

「アリアさん、こちらでのお住まいはどちらなんですか？」

「まだ決めてないのよ。あまり人目につきたくはないけど、一人じや寂しいし」

「それじゃあ」

主人の許しも得ず、つい口を出してしまった。

この屋敷に滞在すればいいではないか、と。

4・風入へかざいれ

二階の廊下の突き当たり、窓を開け放しておいたベランダに、紺色に白の水玉模様のトランクケースが横倒しになって放置されていた。そのトランクケースを起こして、その他に荷物がなにか、確認した。

どうやら荷物はこのトランクだけみたい。

ずいぶん大きいトランクだけど、これも持ってここまで登ってきたのかしら、アリアさん。ちょっと考えつかないけれど。

「ふう……」

ため息をついたのは、トランクが存外重たかったからだけじゃない。それに、キャスターがついていたから、移動させるのにさしたる労力もかからなかった。

ため息は、わたし自身の先走った発言のせい。

差し出がましいことを言ってしまった。

ユエル様のご友人だから、別段構わないだろうと思ったのだけど、もちろん、迷惑といった風ではなかった。でも、ユエル様は一瞬躊躇したみたいだった。

「……そうだな。そうしたらいい。部屋は余っているから、……ミズカが良いように整えてくれるだろう。寝具等も一通り揃えよう」とは言ってくれたものの、何か言いたげにわたしを見、嘆息した。

立場を弁えなくちゃ。

わたしはユエル様に従属している眷族で、“仲間”というわけではないのも。

「気をつけなくちゃね、わたし！」

ひとりごちて、片手で頬を叩いた。

トランクのキャスターは軽やかに回ってくれたのだけど、わたしの足取りはちよっと重い。

ともあれ、ユエル様の寝室と同じ並びにある一室に入った。

二階には、客用の個室がいくつかある。どの部屋も一応は毎日掃除を欠かしていないから、汚れや埃はない。生活感がないだけ。

あとで、予備のお布団をベッドにセットしておこう。他に何か入用のものがあれば聞いて、用意しておこう。

そんなことを考えつつ、ウォークインクローゼットの脇にスーツケースを置いてから、閉め切った部屋の空気を入れ替えるために、フランス窓を開け放った。

緑色の芳香が部屋に入り込んでくる。

高原の風は、心地がいい。

苔や羊歯が多いに繁殖するほど、この高原地は湿度が高くて、吹きつける風にもしっとりとした湿気がある。緑色の粒子でできてるんじゃないかな思う程。きつと、ユエル様の瞳のような緑だ。優しくて、捉えどころがない。

白いレースのカーテンが風にはためいた。

襟元に髪の毛先が擦れて、こそばゆい。風に乱れた髪を撫でつけながら、踵を返した。

窓から離れようと背を向けたわたしの肩に、レースのカーテンが触れ、それを払おうとしたその時だった。

「かわい子ちゃん、みーつけたっ！」

いきなり、そう、まったくもって突然っ！ 何の気配もなかったはずなのに、背後から何者かに抱きつかれた。いえ、肩を掴まれたというのが正解かもしれないけれど。

とにもかくにも突然で！

だから、絶叫したって無理はないと思うのっ！

「きつ、きゃあああっ！！」

わたしの叫び声は、吸血鬼に襲われたヒロインのごとく響き渡った。

真昼の陽射し満ちる、夏の森に。

次の瞬間、わたしはその何者かに押し倒された。

うしろで、「わっ」と戸惑ったような声がして、その途端、足元がふらついた。

だから、単にバランスを崩して、後ろに倒れてしまっただけかもしれないけれど、ともかく、不可抗力的に、窓の側にあったソファに倒れこんでしまった。

何者かの体の上のしかかるような体勢になったみたいで、その時に、首筋に何か……ちょっと冷たくて濡れてるものが、ぴとつとくつついた。

「……っ!？」

それが唇だつて分かるまでには、三秒ほどの時間がいった。

頭の中はもう真っ白で、ほとんど反射的に、わたしはぎゅうつと目を閉じて、思いきり「それ」を払いのけた。

手のひらに痛みが走ると同時に、バチンツと高い音が鳴った。

直後、

「ミズカ!？」

わたしの絶叫を聞きつけて、ユエル様が駆けつけ、部屋に飛び込んできた。

「ミズカ!」

血相を変えたユエル様がこちらに向けて手をかざした。わたしの背後に入る人物を目にした途端、ユエル様の険相に凄味が増す。眉間を寄せ、手のひらに力をこめている。

「だっ、大丈夫ですっ」

はっとして、慌ててユエル様を止めた。

「大丈夫ですからっ」

膝の上まで捲くれ上がっていたスカート裾を慌てて直し、大急ぎで立ち上がった。けど、足に力が入らなくて、膝ががくと折れ、よろけた。傾いだわたしの体をさっと手を伸ばして後ろから支え立たせてくれたのは、わたしに絶叫をあげさせた不法侵入者だった。

「おっと、危なかった。セーフセーフ」

背後から声がある。妙に明るく、馴れ馴れしげな声だった。

「この通り大丈夫だから、そういきりたたんでくれよ、ユエル」

「えっ、えと？」

わたしはユエル様と侵入者の顔を繰り返し見やった。

侵入者は若い長身の男性で、にこにここと笑っている。そして相変わらずわたしの腕を掴んだまま離さない。

「えと、お知り合い……なんですか、ユエル様？」

わたしが問うと、ユエル様はあからさまに不機嫌な顔になった。けど、どうやら肯定しているらしい。

「ミズカから手をどける、イスラ。さもなくば」

「あーはいはい。しかしさすがにユエルの眷族だけあるね。手の早いこと、早いこと」

「……っ」

改めて侵入者の彼の顔を見ると、左の頬が赤くなっていた。さっき思いきり平手打ちをしてしまった、その痕だ。

「すっ、すみませんっ、わたしったら！ 思いつきりひっぱたいてしまっつてっ！ あ、それに体の上に倒れ込んで……、お、重かったですよね」

「平気平気。それに驚かせちゃった俺が悪いんだしさ」

「でも、痛かったですよね……。あの、本当にごめんなさい」

平謝りするわたしに、侵入者の彼はにこやかに応対してくれている。

その一方で、ユエル様はますます不機嫌顔になっていった。

「謝る必要などない、ミズカ。こちらに来なさい」

「え、でも……」

「いいから、ミズカ」

「……」

侵入者の彼に軽く頭を下げてから、ユエル様の言葉に従った。

「久しぶりに会っつてーのに、つれないなあ、ユエル」

「招いた憶えはない。ミズカ、やつは放っておいて構わない。行く」

「ユ、ユエル様、でもっ」

「そーかあ。ミズカちゃんって言うのかあ。その娘が栄えあるユエルの眷族で……」

「イスラ」

冷たく、ユエル様は彼の言葉を遮った。

「煩い、イスラ。私を怒らせるな」

「俺に対して怒ってないおまえさんなんて見たことないね」

「その通りだな」

「アリア、来てんだろ？ 途中まで一緒だったんだけどなあ。それとおまえさんに会いたいってやつがいて、一緒に来たんだが」

「彼でしょ？ 玄関から入ってきたわよ、ちゃんと」

いつの間にか現れたアリアさんが、口を挟んだ。隣に、十歳前後と思われる男の子を伴って。

「初めまして」

ぺこりとお辞儀をしたその男の子は、続けて謝罪した。

「父が失礼をしたようで、ごめんなさい。よく叱っておきますから」

ちっ、父っ!?

亜然愕然の単語が頭を叩く。

わたしは呆然と立ち尽くし、申し訳なさげな顔をしている男の子を凝視した。

ともあれ、わたし達はリビングに戻った。

「こんなところで立ち話もなんでしょ？ いいからまず」

と、アリアさんがその場を取り仕切り、みなをリビングへと急ぎたてた。

ユエル様は不機嫌顔で黙りこみ、一人掛けのソファに腰を据え、

不服げな様子で腕を組んでいる。

イスラと名乗った侵入者の彼は、窓の縁に手をつき、壁にもたれかかって立っていた。額にかかる茶褐色の髪をかきあげ、それからユエル様と同じように両腕を組んでいる。ユエル様の不機嫌顔を面白がっているような……気がする。

そのイスラさんのいる場所に程近いソファアに行儀よく座っているのは、よくよく見ればなんとなく面差しがイスラさんにていないくもない、男の子。

「お初にお目にかかります。イレク・オーベリと申します」

イスラさんの一人息子だという男の子は、会釈をした後にそう名乗った。

わたしはというと、アリアさんに促されてイレクくんの、テーブルを挟んだ向かい側のソファアに腰をおろしている。へたり込んでる場合じゃないとも思ったのだけど、この唐突な事態に少なからず疲れてしまった。

「ミズカちゃん、少しは落ち着いたかしら？」

「……はい、……なんとか」

「イスラも、いったいどういふつもりでこの子を襲ったりしたの？ 怖い思いをさせて！」

厳しい口調で、アリアさんはイスラさんを窘めた。

「いやあ、別に襲ったつもりはないんだけどなあ。でもあんまり可愛くて、つい」

「言い訳になつてませんよ、父さん。その前に、きちんとミズカさんに謝罪なさるべきです」

「父さんって言うなって言ってたんだろ？ こんな若い男におまえみたいなお子さんがいるなんて、どう考えたって不自然だろ？」

「……」

その通りだ、とは思つ。

兄弟というのならまだしも分かるけれど、親子と言つには見た目年齢にそぐわない。

イスラさんは見た目、二十代前半か、半ばぐらいの年齢に見える。いかにも遊び人といった風体で、気安さと軽率さが絶妙に混じりあった人懐こい笑顔に、吸血鬼らしさはかけらも感じない。洗いざらしのＴシャツに、着古した感のあるジーンズがよく似合っている。爽やかな好青年といった外見だ。

一方で、息子さんのイレクくんは、いかにもお坊ちゃん然としていて、綿シャツもきっちりボタンをしめている。年の頃は……十二、三歳といったところだろうか。けれど言動はとても落ち着いてて、おっとりとした雰囲気だ。茶褐色の髪は父親と同じだけど、瞳の色はややイレクくんの方が薄い茶色だ。イスラさんの方が濃くて、コ―ヒー色をしている。

「こいつ、また面倒な年頃で成長止めやがってさ」

「いつも一緒に行動しているわけではないのだから、父さんが面倒がる必要はないでしょう？」

「あら、そうなの？ まあ、そうねえ。始終一緒にいて、イスラの面倒なんか見ていられないわよね」

「おい、アリア、それ逆だろ」

「どうせ親らしいことなんてしてないんでしょ、イスラ？」

「それでも一応は父親ですから。面倒事を起こさないよう、たまには見張ってなくてはいけませんし」

「まあ、イレクは父親に似ない、真面目ないい子なのねえ」

「おいおい、おまえら、勝手なことばっか言いやがって」

この会話に、ユエル様はまったく参加してこない。押し黙ったまま、じっとして動かない。

アリアさん、イスラさん、イレクくん、それぞれに訊きたいことはあったのだけど、それよりもユエル様の事が気にかかって、わたしはおそろおそろ、声をかけた。

「ユエル様、あの」

とはいえ、何を言っているのかわからず、

「お茶、新しいものをお持ちしましょうか」

なんて、バカの一つ覚えみたいなお話を言ってしまった。

「……………」
ユエル様は嘆息した。深く。そして、何かを諦めたか、あるいは覚悟を決めたみたいに。

「そうしてくれ、ミズカ。……皆の分も、頼む」

「はいっ」

応え、わたしは勢いよく立ち上がった。

「ミズカ、続きを話すから」

「はい？」

「こいつらを交えて話すが、それでも、良いね？」

「え、はい、それは。ユエル様がいいのなら、わたしは構いません」

「……そうか」

ユエル様はまたため息をついた。

わたしは首を傾げた。

なんだろう、ユエル様？ 表情が、暗い。

気になったけれど、今はとにかく、新しくお茶を淹れてこなくちゃ。

わたしは大急ぎでリビングを出て行った。

背後に、三人の視線を感じながら。

話の続きというのは、“眷族”のことだった。そして、吸血鬼の子孫については、それに付随してくるもののようなのだ。

即座に口を挟んだのは、イスラさんだった。

「なんだおまえ、ミズカちゃんにまだ説明してなかったのかよ？」

ありえねー。ってことは、なんだおまえ、まだ」

「父さん、少し黙って」

「へーへー」

ふと気がついて、わたしは改めてイスラさんとイレクくん父子を

見やった。

「そうだ、この二人は“親子”なんだ。」

え、でも、吸血鬼は子孫を残せないって聞いていたのに？

「何事にも、例外というものはあるものだよ、ミズカ」

「そう言ったユエル様の後に、アリアさんが続けた。」

「例外というか、種族的な特徴なのよ」

「種族的特徴、ですか？」

「そう。ユエル？ あたしから話しても構わないのかしら？」

ユエル様は黙したまま、けれど諾と目で頷いた。

アリアさんは言葉を継ぐ。

「あたし達の種族の中には、期間限定の“生殖者”がいるの。つまり子を成せる“力”を持った者が、時々現れるのよ。出現の法則はとくにないみたいで、つまりランダムね。あたし達は基本、群れない種族だから、どれくらいの生殖者が同時期に現れるかは把握できないのだけど」

「……はあ」

「その上、生殖能力は期間限定なの。その期間は個体差があるから一概には言えないけれど、大体百年から二百年くらいじゃないかしら」

「個体差というのは、そいつの力具合とも言えるな。強ければ、期間は長い。……たぶんね」

いつまでも口を噤んではいられず、イスラさんが再び口をはさんできた。

「俺は二百年近く期間があったぜ？ ギリギリのところであつたから良かったぜ」

「どうせ、その猶予期間中、遊んでばかりいたんでしょ、父さんの場合は」

「必要な品定め期間だったと言ってほしいね」

「ふうん？」

イレクくんは何か言いたそうに、わざとらしく鼻を鳴らした。

アリアさんは話を元に戻した。

「ある年齢に達すると生殖者は生殖能力が発現するの。自覚症状はあるわ。これはどう説明していいかわからないけれど、ああいうものは不思議と、ふつと気がつくのね。それに体内に余分な生命が溜まっていくのがわかるのよ。そしてもう一つ、生殖者は他の者とは違う“力”を与えられる。これは、とても重要な“力”よ」

はあ、と相槌をうった。

あまりに不思議な話にわたしは目を瞬かせる。

分かったような、分からないような。

分かったことといえば、“生殖者”という特別な存在が吸血鬼達の中にいるということ。そしてその“生殖者”だけが唯一、子孫を残せるのだということ。

「生殖者の相手は、大抵の場合、人間から選ばれるの。実際イスラの相手も人間の女性だったし、あたしもそうだったわ」

「人間から選べという決まりはないけど、同族の……つまり“生殖者”と出逢うのはまずないな。良くも悪くも、俺達は個人主義だからね、生殖者同士が一堂に会するなんてことはめったにない……どころか、無いに等しい」

イスラさんの言葉を受けて、アリアさんが小さく笑った。

「こうして、生殖期間が終わった後でなら会えるのよね。神様とやらがいるんだとしたら、きつとんでもない気紛れ屋さんなんだと思うわ。大体、あたし達みたいなモノが存在すること自体、神様とやらの悪戯みたいなものですよものね」

「言えるな」

アリアさんとイスラさんの会話にユエル様はまったく参加しない。黙して、表情を消している。淹れなおしたお茶にも手をつけていない。

わたしはそんなユエル様の様子になって、そわそわと、アリアさんとユエル様とを何度か見やった。

「ユエル？ 眷族の説明くらいはあなたからしたら？」

落ちつかないわたしに気づいてくれ、アリアさんはユエル様と話をつってくれたのだけど。

「……………」
ユエル様は僅かに眉をひそめただけで、端正な唇を動かしてはくれなかった。

「まあ、いいけど。そうそう、それで、“眷族”ね？」

アリアさんはわたしの方に向き直った。

「ほとんど説明がなされていなかったみたいね？ 眷族という、とても重要な存在のことについて」

「重要って、眷族が、ですか？」

「そうよ。とても、大切な存在なの」

そういえば、ユエル様も言っていた。「とても大切な存在なのだ」と。

もう一度ユエル様に目を向けると、ユエル様は、今度はわたしから目を逸らさなかった。

けれど、深い湖水のような緑の瞳は、何も語ってはくれない。

沈黙を保ったまま、わたしの一挙一動を見つめている。

……… 思いだす、あの時もこうしてわたしを見つめてた。

わたしを眷族にしようとした直前。じっと見つめて、わたしに何かを見出そうとしているような……………

「あ、あの、それでっ」

話を進める前に、わたしは確認のため、訊いてみた。

アリアさん、イスラさんの両人は、生殖者なんですね、と。

答は、是だった。ただし、「だったのよ」と付け足して。

そして、さらに付け加えたのだ。

「ユエルもよ、と。」

5・生殖者

わたしの脳内は「一足す一は？」と訊かれたら、「三ですか」と答えそうなくらいのパニックに陥っていた。

だって！ 生殖者についての説明もいまひとつ呑み込めていない体たらくなのに、ユエル様がその“生殖者”だなんて！

そりゃあ、今までの説明を聞くからにして、たしかにユエル様はわたしという“眷族”を持っていて、それはつまり“生殖者”ってことなんだろうけど……！

イスラさんは呆れたようにユエル様を見やった。

「なんだよ、おまえ、それすら話してなかったのか？」

「……………」

「なんだ、じゃあ、ミズカちゃんは違うのか？ 眷族にしておきながら？」

「…………… 煩い、イスラ」

凍りつくほどの冷ややかな声が、ユエル様の口から発せられた。

けれどイスラさんはまったく動じない。

「酔狂でか？ だとしたら、ずいぶんと悪辣な」

「煩い、黙れ」

「イスラ、言葉が過ぎるわよ。だいたいユエルが　　って、ユエル？」

ユエル様は堪りかねたように立ち上がると、そのまま何も言わず、リビングから出て行ってしまった。リビングのドアは開け放たれたまま、そこから生ぬるいのか冷たいのか、どちらともつかない風が忍び込んでくる。

「ユツ、ユエル様っ！？」

わたしは慌てて立ち上がったものの、足がすぐに動かず、もたついてしまった。。

「あーらら。怒らせちゃった。ああなると怖いっていか面倒よう、

、ユエルは」

アリアさんは肩を竦め、大きなため息をついた。けれど言葉以上には困ったよう様子でもなくて、揶揄めいた微笑が口元を緩ませていた。

「知るか。自分が悪いんだろ？ あいつの我儘は今に始まったことじゃないし」

イスラさんは吐き捨てるようにそう言ったけれど、アリアさんと同じように、別段気にするでもなく、「いつものこと」「くらいに思っているみたいだ。

「父さんも悪いよ。神経を逆なでするようなことを言うから」

自分の父親が原因で、初対面のユエル様が機嫌を損ねてしまったことに、イレクくんは少々困っているようだ。

そしてわたしはというと

「あのわたしっ、ちよっと様子、見てきますっ！」

やっぱりユエル様を放つてなどおけなくて、急いで後を追ったのだ。

二階へ上がっていく階段のその途中で、ユエル様をつかまえた。

「ユエル様！」と声をかけたのに、ユエル様は足を止めてはくれなかった。

階段を駆け上り、腕を伸ばした。

とっさに上着の裾をつかんで、その拍子にユエル様の上体がぐらつき傾いだ。ユエル様はようやく足を止め、こちらに振り返ってくれた。

「すっ、すみませんっ」

怒られるかと思った。「まったく乱暴な。私を突き落とすつもりか？」って。

でもユエル様は一瞬険しい顔をしたものの、わたしを叱ったりは

しなかった。それどころか
「ミスカ」

ふと緑の双眸を細めて、わたしを見つめ、そしてわたしの首筋に手を当てた。

突然のことで驚いたのと、ユエル様の手が冷たかったのとで、思わず肩を竦ませた。

「さつきは、大丈夫だったか？」

「え？」

わたしを見つめるユエル様の瞳の緑が、いつもより濃く、深い。

「怪我はない？ イスラに、生気を飲まれてはいまいね？」

「は、はい。大丈夫です。すみません、お騒がせしてしまつて……」

「騒ぎを起こしたのはイスラだ。ミスカが謝ることではないよ」

「……あの、ユエル様」

手が、離れた。ユエル様の冷たい手の感触だけが、触れられていたそこに残った。

「大丈夫ならいい。……私は少し休む。しばらく一人に」

「ユエル様」

わたしはユエル様の上着を掴んだまま離さず、必死になって取り続けた。

「ユエル様、眷族つていつたい何なんですか？ 教えてください」

「……………」

眉を曇らせ、ユエル様はわたしから視線を逸らす。

「……アリアにでも、聞けばいい」

「嫌です。ユエル様の口から聞きたいんです」

「ミスカ」

「だって、わたしはユエル様の眷族なのでしょう？ それなら、ユエル様の口から教えてもらいたいです」

わがままを言ってるって、自分でもわかつてる。

でも、どうしてもユエル様の口から聞きたい。だって、とても重要な事だと思うから。

「たぶん……ですけど、ユエル様から聞かなかっただら、きっと……後悔すると思うんです」

「ミスカ……」

「ユエル様だって、さっきはご自分から話そうとしてらしたじゃないですか。だからきっとユエル様も後悔します。自分が話すべきだったって」

ユエル様はわたしの手を取った。その手は、やっぱりまだ冷たい。「……………」

そして、無言のまま苦笑した。

「ユエル様」

「わかった、話そう」

もう一度、今度は深くため息をつき、ユエル様は観念したかのように微笑した。

ユエル様の秀麗な顔にもう険しさはない。ただ、少し硬い。

「眷族というのはね、ミスカ」

わたしの手を離して踵を返し、ユエル様は再び階段を登り始めた。わたしはその後を追う。

ユエル様は歩きながら語った。いつになく淡々とした口調で、こちらを見もせず。

「端的に言っと、生殖者の子を宿すための存在なんだよ」

「え……？」

「人間は、そのままの状態では我々の子は成せない。姿形は似ていても、やはり私達は人間ではないからね。異種間の婚姻というものは、それなりのリスクを負うものだよ。最悪の場合、死んでしまう」

「……………」

「しかし、私達が子孫を残すためにはやはりどうしても人間が必要になってくる。いや、こうして生存していくだけでも人間は必要なのだが、ともかく、それとは別に人間が必要になってくるんだよ。むしろ同族間で生殖者が見つければそれにこしたことはないが、そ

の可能性は低い。イスラが言ったように」

ふ、と息をついたユエル様の表情は、ここからは窺えない。わたしはただひたすらにユエル様の背中を見つめ、追い続けている。

階段を登りきってもユエル様はこちらを振り返り見てはくれない。「結局、“生殖”には人間の力を借りる方が手っ取り早い。だからそうするために、人間にこちらの生気を与えて、私達により近い存在にする。私達“吸血鬼”の子を成すための存在、……それが、“眷族”だ」

子を成すための存在……それが“眷族”？

それじゃあ、ユエル様の眷族のわたしは、……

ユエル様が私室の前で立ち止まるより前に、わたしは歩みを止めていた。思考も停止した。

ユエル様は振り返ってわたしを見、

「必ずしも、そうしななければならない、というわけではないんだよ、ミズカ」

宥めるような口調でそう言った。

「眷族は、子を成すためだけ《・・》の存在ではない」

「……」

何かを訊き返そうとして、けれどその「何か」が喉の奥に引っかかって声にならない。

わたしとユエル様の間には、わたしの歩数で計るなら三歩分くらいの距離がある。狭いような、それでいて、ひどく遠く感じるその距離。

たった一步を踏み出せずにいて、ゆえに、距離は縮まらない。

ユエル様は微笑んでいる。けれど、無理に作ったみたいで、不自然な笑みだった。

「眷族は我々の“道具”ではない。自分の意思があるだろう？」

「でも、あの、ユエル様……」

「あまり深く考えなくてもいい」

「でっ、でもっ」

思わず声の上擦ってしまう。

周章し、心臓がどきどきと高鳴っている。

「……そういうことだ。わかったね？」

ユエル様はわたしから目を逸らし、疲れたように言った。

「すまないが、ミズカ。しばらく、ひとりに」

「ユエル様！」

わたしが止めるのもきかず、ユエル様は断ちきるようにそう言っ
て、寝室に入ってしまった。

「ユエル様……」

鍵などないから入ろうと思えばたやすく扉は開けられる。

けど、できなかった。

ユエル様の無言の拒絶は、わたしにはあまりに重い枷だった。

* * *

あの日。

季節は憶えていない。少し寒かった。満月が中天にあって、月明
かりの美しい夜だった。

バルコニーにひとり佇んで、夜空を眺めている人を見つけた。

呼ばれたのか、探していたのか、その記憶も曖昧だった。

ただ、その人を見つけてホツとしたのと同時に、寂しげなその佇
まいに胸が痛くなった。

銀の髪が夜風に揺れていた。月光を受けて光るそれは、まるで天
使の羽根のようだと思った。

息を呑んで見惚れてしまうほど、鮮麗な、その人。わたしの雇い
主の、ユエル様

わたしに気がついて、ユエル様は髪を梳きあげながら、ゆっくり

と振り返った。

ユエル様は微笑んでわたしの名を呼び、白い手をわたしに向けて伸ばした。

「ミスカ」

切なげな甘い声がわたしを促す。もつと近くにと緑色の目で請われ、わたしはおそろおそろ近づいた。差し伸べられた手を、どうしてか、取ってしまった。

わたしのような者が触れていいはずなのに。

こうして近づくことすらおこがましいというのに。

ユエル様はまじろぎもせず、わたしの手を握ったまま、緑色の双眸のわたしを映している。

「ミスカ、聞いてほしい」

「……はい」

ユエル様の指先の冷たさが、皮膚を破って浸透してくるようだった。

怖い……のではない。でも何か……異質な何かをユエル様に感じた。

目を逸らせない。鼓動が早まる。

「なんでしよう、ユエル様？」

なんとか平静を装って、尋ねた。

ユエル様はわずかに眉をひそめ、一瞬ためらった後に、告げた。

「これからも、ずっと、傍にいてもらいたい。……遥かな道程を、私と共に」

漠然とした、その言葉。

「ミスカに……… ついて来てもらいたい」

「………」

ユエル様の真摯なまなざしを受け止めるのが苦しかった。喉の奥が痛んで、胸が張り裂けそうだった。

鼓動の高鳴りがユエル様に聞こえてしまっているのではないかしらと思う程、辺りは静かで、風の音すらしない。

それは、どういう意味なんですか、ユエル様……？

“傍にいてもらいたい” だなんて……

「……………」

うつかり抱いた愚かな期待をユエル様に否定されるのが怖くて、
訊き返せなかった。

僅かに残っていた冷静さを取り出して、胸に咲いた期待をさつさと打ち消したわたしは、言葉の上っ面だけをそのままなぞり、「出かけるので、随従せよ」と言っているのだと勝手に解釈して、自分を納得させた。

「はい、お供いたします」

わたしは答えた。それ以外の言葉なんて浮かばなかった。

そう答えるのが最良なのは分からなかったけれど、「お供します」という気持ちに偽りはなかった。だけど……

わたしの返答を受け、ユエル様は少し困ったような諦めたかのような……安堵したような、複雑な微笑を浮かべた。

ユエル様の、わたしの手を握る手に力がこもった。そしてもう片方の手がすつと伸び、距離を詰めてきた。

わたしはユエル様のまなざしに釘づけになり、立ち尽くしている。いったい何が起こっているのか、何が起こるのか、さっぱり分からずに途惑うばかりだった。瞬きすらできない。

「目醒め” たら話そう。私のことも”

「え？」

「……………ミズカ」

「……………っ！」

ユエル様の冷たい指先が、顎に触れた。

わたしの顔を仰向けさせ、ユエル様は囁いた。

「目を閉じて」

けれど、すぐにはその言に従えず、瞠目していた。近づいてくるユエル様の顔を……緑の双眸と紅い唇を愕然と見つめていた。

ユエル様の、この時異様に紅く色づいていた端正な唇が、わたし

の首に触れた。噛みつかれたかのような痛みと熱が走り、小さな悲鳴を漏らして目を閉じた。

「……ユエ……さ……」

頭の芯がぼうつとし、次第に意識が遠のいていくのが自分でもわかった。意識を奪われているのだと、わかった。

意識が途絶えそうになる、その刹那。

「……すまない、ミスカ……」

ユエル様の声が聞こえた気がした。首に走った痛みが、僅かの間、途切れた。

意識を手放す間際、わたしはうつすらと目を開けた。ぼやけた視界はすぐに暗闇に閉ざされた。

「……」

淋しげな影を落とす緑の双眸が、人間だったわたしが最後に視た色だった。

6・気紛れな空模様

うやむやのうちに、アリアさん同様イスラさんイレクくん親子もこの屋敷に滞在することになり、わたしはその準備に追われた。

アリアさんとイスラさんが協力して、寝具やリネン、その他の生活用品を揃えてくださった。その手際の良さというか、行動力の早さには驚かされた。ここに到着してまだ僅かの時間しか経っていないのに、もういろんなお店を網羅しているみたいだった。「ここに来る前に、ちゃんとガイドブックをチェックしてきたもの」とアリアさんは朗らかに笑った。「とくにアウトレットなんかのお店はね」

そういえば、普段おつとりと構えている鷹揚なユエル様も、こういった手配は実に素早い。“幻惑術”を駆使して、生活空間をあつという間に整えてしまう。適応能力が高いということなんだろうか。「人間社会にうまく融け込むために、必然的に身についた能力といえようね」

そんな風にユエル様は述懐していたっけ。

「なし崩しに、僕達までお世話になることになってしまつて、すみません」

生真面目で律儀な性格であるらしいイレクくんは改めて謝辞を述べて、それから各人が寝泊まりする部屋を一緒に整えてくれた。

父親のイスラさんとは「できれば別室がいいです」とのこと、イレクくんにも個室を宛がった。イスラさんも「その方がありがたいね」と皮肉げに返していた。

すげない会話をしているイスラさんとイレクくんだけ、仲違してるようではなく、アリアさんなどは「何のかんのといつても仲良い親子よねえ」とクスクス忍び笑っていた。

俄かに忙しく賑やかになり、おかげで多少は気が紛れた。

けれど、やっぱりどうしても部屋に閉じこもってしまったユエル

様のことが気がかりだった。

昼を過ぎてても、日が沈んでも、ユエル様は出てきてくれなかった。一度だけ、お茶を用意しましたとドアの前で声をかけたけど、返事はなかった。暗くなっても明かりがつく様子はなく、おそらくは眠っているのだろうと推察できた。……けれど。

けれど、不安でたまらなかった。

ユエル様……

わたしはどうしたらいいんですか？　ここにこのまま、こうして居ていいんですか？

成す術もないままで……。

* * *

雨が降りそうなほどの空模様ではないけど、昨日とうってかわつての曇天は、わたしの心を反映しているようで、ちょっと残念なような腹立たしいような奇妙な具合だ。

さらには、昨日とうってかわつた態度のユエル様にも、少しばかり腹を立てている。

「君が朝寝坊なんて珍しいね、ミズカ？」

「……………」

にこりと微笑んで、ユエル様はわたしの顔を覗き込んでくる。

昨日の、あの重々しく冷たい態度はいったい何？　と思わせるほどの笑顔っぷりだ。

もうっ！　だいたい誰のせいで寝過ぎたかと思っっているんですか。「イレクがコーヒーを淹れてくれたから、飲んでおいで。今日はちゃんと開店するから、それまでに支度も済ませておかなくてはね」「ユエル様のことが気にかかってなかなか寝つけなかったというのに」といっても、さすがに動き回って疲れたのか、寝つきは悪かっ

たけど気づいたら眠ってて、そして今に至っているわけだけど)、まるで何事もなかったかのような暢気顔は、どういうこと？

「ユエル様、起こしてくださいさっさとありがとうございます。……けど」「けど、なんだい？」

「寝室に忍び込んでくるのは心臓に悪いからできればやめてほしいと、以前から申し上げていたと思うのですけど」

「ああ、そうだったかな？　しかしそうすると、ミス力はきつと昼過ぎまで寝こけてしまうに違いないだろう？」

「ユエル様じゃあるまいし、そんなことはありません。寝起きはユエル様よりはいいつもりです」

わたしはまだ寝台から出られずにいる。夜着のままということもあるし、ユエル様が寝台に腰をおろしているからだ。

どうやらわたしが起きるまで、そうしていたらしい。

もう、恥ずかしいったらないんですけど、ユエル様！

きつと間の抜けた寝顔をしていたに違いないもの！　癖のある髪は寝乱れてさらにくしゃくしゃになってたろうし、寝相は……そんなに悪くないはずだけど、もぞもぞ動いてただろうし、……変な寝言とか呟いてなければいいけれど。

ユエル様が以前、

「ミス力は仔猫のような寝方をするね」

と笑ったことがあった。

それって、どんな寝方なんだろう……？

落ち着きがないってことなのかな。

ユエル様はからかうように笑って、「見ていて、くすぐりたい」と答えた。

どういう意味なのかますます分からず、わたしは首を捻ったものだ。

本当にユエル様は謎めいた言動の多い方だ。気紛れで、不可解で、意味深なところがあって、わたしはいつもそんなユエル様に振り回されてばかりいる。それが嫌だというのではなく、ただ少しばかり

困ってしまうのだ。

今朝もまた、わたしを困らせて嬉しげに微笑んでいるユエル様は、とうに着替えを済ませている。ユエル様の本日のお召し物は、内衿に黒サテンがちらりと見えるボタンダウンの白シャツに、ヴィンテージのジーンズ。グリフィン模様の銀のバックルがアクセントになつて、全体的にカジユアルなスタイルだ。ちなみに嵌めている指輪やネックレスといったアクセサリーも、すべて銀。

吸血鬼つて、狼男がそうなように、銀が苦手だという設定なはずなんだけど、ユエル様は金より銀を好む。

以前、苦手なのではないですかと確認したことがある。

「銀の弾丸なら、たしかに苦手だね」

ユエル様は悪戯っぽく笑って答えたっけ。

そりゃあ、弾丸は苦手でしょうとも。

撃たれて当たった経験はないとユエル様はくすくす笑いながら言つて、わたしを青ざめたり赤らめたりさせた。

わたしがそんな他愛もないことを思い出したのを察したのかどうなのか、ユエル様は悪戯っぽく微笑んでいる。何か訊きたげにわたしの顔を覗きこみ、肩に流れた銀の髪を軽く後ろへ払った。その何気ない仕草ですら、典雅で美しい。

ユエル様は痩身で上背もあるから、どんなスタイルもとてもよくお似合いで、シンプルにまとめている時でも、安っぽさは全然感じられない。ユエル様自身に高級感が溢れているからなんだろう。

それにしても今日のスタイルは、「占い師」としては、ちよつと神秘性に欠けやしないかしら？

全身黒ずくめにして、仮面をつけたり妙な形の帽子を被ったりするよりはいいのかもしれないけど。

ううん、そんなことよりっ！

目覚めて、わたしがどれほど驚いたか！

容姿端麗な銀髪的美青年が、間近でじっと覗き込んでたんだもの！目を開けて、緑の瞳とぶつかった途端、悲鳴こそ上げなかつたけ

ど、心臓が口から出そうになって、一気に心拍数があがって息が止まりそうになった。

優しい声音で「おはよう、ミスカ」と囁かれては、硬直したって仕方ないと思うの！

心臓に悪い起こし方はしないでくださって、何度もお願ひ申し上げているのに！

「親切に起こしにきたというのに文句を言われてしまうとは、やるせないね」

「いかにも嘘つぽくしょんぼりしないでください。もう、いいです、ユエル様、わたし、着替えますから」

語尾に、寝室の扉を叩く音が重なった。わたしに代わってユエル様が応えた。

「お邪魔します」

入ってきたのは、イレクくんだった。

「お早うございます、ミスカさん。なかなか降りてこられないので、こちらにコーヒーをお持ちしました」

昨日はよそゆきの格好をしていたイレクくんだったけれど、今日はもう少しラフな格好だ。水色の半袖パーカーと半ズボン、そして白いスニーカー。子供らしく、似合っている。けど、「子供」ではないのよね。

「ありがとうございます……ございます、え、と、イレクく……じゃなくて、イレクさ……」

イレクくんはわたしよりもうんと年上なのだ知って、呼び方を改めようとした。けれどイレクくんは、

「くん”でいいと、昨日も言ったでしょう？ 敬語も必要ないって。見た目十歳前後の僕に“さん”付けは不釣合いですよ」

そう言って、やんわりと“さん”付けを断った。

「え……と、それじゃ、イレクくん。お早う。コーヒー、ありがとう」

イレクくんは懐こく笑って、「どういたしまして」と応えた。

わたしは上半身だけをようやく起こし、差し出されたカップをトレイごと受け取った。それをサイドテーブルに置き、それからこぼさないようゆっくりと慎重に、カップを手に取った。コーヒーの甘くて苦い芳香が、心地よく鼻先をくすぐる。

「私の時とずいぶん態度が違うね、ミズカ？ ……なるほどイレク、子供の姿というのは、女性相手に使えるね」

ようやく寝台から離れてくれたユエル様だったけれど、部屋から出て行く気配はない。

ユエル様は眉を僅かにしかめて両腕を組み、如才のないイレクくんを見やる。

「否定はしませんが、ユエル様ほどではないと思いますよ？」

「私ほどの美貌の持ち主はそうはいないだろうからね。意図して“使つて”いるわけではないが」

「ユエル様は、父……イスラから聞いていた通りの方ですね。イスラとよく似ています。類は友を呼ぶということでしょうか」

「心外だね、イスラと似ているなど。侮辱以外の何ものでもないな」

「そうですね？ でも同じようなことを言っていましたよ。俺はアレほど酷くない、と」

イレクくんは愛想良く笑いながら、しれつと言い放つ。ユエル様は鼻白み、苦虫を奥歯で噛み潰したような顔になっていた。

イレクくんって、なんだかすごい。

それにイレクくんの話を通して、ユエル様とイスラさんの関係がどんなものかも、なんとなく分かってきた。

やっぱりお友達なのかなって。二人して断固否定するだろうけど。「それはそうと、ユエル様。実はお願いがあるのですが。ミズカさんにも」

「何？」と、わたしの方が先に聞き返した。

イレクくんは、店の手伝いをしたいと申し出た。店……つまり「占いの門」の。「占い」はできないから、せめて受付や客の接待などを手伝わせてくれ、と。

断る理由もなかったし、わたしもユエル様も快く承諾した。

イレクくんも生気を吸わなくてはならない、その理由もあつてのことだ。

父親であるイスラさんはどうしたのかと訊くと、とうに出かけたと返ってきた。避暑地はかつこうのナンパ場所だから、生気を得るには困らないでしょうねと呆れたようにイレクくんは言う。

アリアさんもとつぐに出かけた、ユエル様が付け加えた。さっそく乗馬クラブにもぐりこむべく、行動を開始したらしい。

人間の生気は、体内に溜めておけるから毎日飲む必要はないのだが、できれば「飲めるときには飲んでおきたい」のだという。

「とくにユエル様は、今は渴きやすいのでしょうか？ 期間中はとくに渴きやすいのだと聞きました」

イレクくんは意味ありげに笑って、ユエル様に問いかけた。けれどユエル様は黙して答えない。

ユエル様の表情が僅かに硬くなった気がしたけど、昨日のように剣呑な雰囲気にはならなくて、ほっとした。相手にもよるのかも知れない。

「長距離の移動で、さすがに僕も渴き気味なので、お店を手伝わせていただければ助かります。ユエル様、ミズカさん、宜しくお願ひします」

イレクくんは軽くお辞儀をする。

わたしは「こちらこそ」と応えてから、

「そろそろ着替えたいのですけど。……お二人とも、出て行ってもらえませんか？」

ようやくその一言を、口にした。

7・光陰

オープンしてようやく十日が経ったばかりの『占いの門』は、店主の美貌が幸いして、客の入りはいい。

お客様の九十パーセントは女性。男性の姿は見ないでもないけれど、付き添いであることがほとんどだから、百パーセント女性客といてもいいかな。

女の子達の、こつした情報の早さには同性ながら感心してしまう。とはいえ、ユエル様が何らかの情報工作を行ったのは確かだ。そうでなければ、こんな奥まった所まで観光客は流れてこないと思う。「ネットを利用した口コミの伝播の速さは驚嘆に値するね。廃れるのも早かるうが、それはそれで都合がいい」

ユエル様は、どうやら不動産会社の社員に、インターネットを利用した宣伝を依頼したらしい。依頼というか、たぶん幻術を使って情報操作を“させた”のdarう。

こつした行為に及ぶユエル様を、咎めようなどとは思わない。

とまどつてしまう気持ちはあるけれど、こつして生きていくためには必要なことなのだから。

わたし達が仮住まいにしている屋敷は、とある不動産会社を仲介に購入したものだ。きちんと購入したのかどうかもあやしい所だけど、そのあたりは敢えて訊かないことにしている。心配げな顔をしてたらしいわたしに、ユエル様は「支払うべき代金は支払ってあるよ」と知らせてくれたから、それは信じている。

きつと、ごく普通に購入するとなつたらとんでもない高額の値がつくだらうこの屋敷は何度か転売され、所有者がころころ変わり、そうして数年前に売却されたものらしい。

古くて美しい建物だけど、歴史的価値が低いからなのか、文化財

に指定されるでもなく、当然観光案内にも載っていない。不動産会社の一押し物件（ユエル様曰く、わけあり物件）だったようだけど、大々的に宣伝されていたわけでもなく、観光のメインスポットからも若干離れている。だから生活用品などを買いに出かける時はちょっと不便だ。

「わざわざ買いに出かける必要はないのに。電話線は繋げてあるから、要る物はここまで運ばせたらいい」

出不精のユエル様はそう言うけれど、そもそも要る物が売っている店の電話番号が分からないじゃないですか。それに一度出向いて品質を確かめないと迂闊に購入できません。わたしがそう口答えをすると、ユエル様は「それもそうか」と笑い、「では、出掛ける時はタクシーを呼ぶといい。タクシー会社の電話番号は分かっているから」と言い添えた。

タクシーなんて勿体ない。歩いていけなくもない距離ですから、ちよつと買い物くらいは徒歩で行きますと、またしても反駁してしまつたら、ユエル様はため息まじりに、「ミズカの好きにしたらいい」とこぼした。

ユエル様の好意を無下に断つてしまったことに気がついて、わたしは慌てて謝罪した。けれどユエル様は別段機嫌を損ねた風ではなく、「無理をしない程度にね」と微笑みを返してくれた。そして、気をつけなさい、とも。

人間とは別の存在であるわたし達は、それを気取られないよう、常に人目を気にしていなければならぬ。

「そう神経質になることもないが、気をつけるにこしたことはない。後始末が面倒だからね」

現代社会では留意しておかねばならないことが多いと、ユエル様は何度かわたしに注意を促した。「七面倒な世の中になったものだと苦笑しつつ。

わたし達が気をつけねばならない事柄の一つに、「写真」がある。ビデオカメラなども、そう。

わたし達は鏡には映るのに、何故か写真に写らない時がある。どうしてかわからないけど、写ったり写らなかったりする。服だけは映っているのに“本体”の部分だけが消えていたり半透明になっていたり。

ユエル様は「波長の問題だろうね」と言っていた。カメラやビデオの性能の問題ではないみたい。

詳しい説明を求めたとして、きっとユエル様の説明には、わたしでは理解できない語彙が並ぶに違いない。なので、あえて深く追求しないことにした。ものぐさなんて単語は、この際、消去！

わたしがユエル様に言われて了解したのは、「客に、写真を撮るなどあらかじめ断っておくように」ということ。

ということで、来店時、カメラ撮影はお断りしている。

昨今は「携帯電話」なる代物にカメラの機能は当たり前のように付加されているから、そちらでの撮影はお断りしている。デジタルカメラでも、もちろん。

なので、携帯電話の電源も極力切ってもらうようにお願いしている。

「ユエル様のお気を乱さないためにです」と説明したら、大抵の女の子達は素直に納得してくれた。

さすがユエル様。美青年効果、ばっちりだ。

他に何か使えることがあればいいのになあ、「美青年効果」。

女の子達を騒がせたりおとなしくさせたりするだけじゃなくて。

有効活用できたらいいのに、「美青年効果」。……他の、良い活用方法はちっとも思いつかないけれど。

わたしの独り言を傍で聞いていたイレクくんは、今にもふき出しそつな顔をして肩を震わせていた。

そつといえば、受付帳のストックがなくなってしまったんだっけ。明日にでも買いに行かなくちゃ。

受付帳なんて必要ないんじゃないかなとは思っけど、「店」としての体裁を整えるためには必要だとユエル様が言っていたから、一応お客様には記入をお願いしてる。名前と生年月日とお住まいの県名、観光客なら現在の宿泊先のホテル名等も書いてもらってる。

来店時に記帳してもらおう受付帳は、ページ数が少ないとはいえ、もう五冊目。リピーター率が高いから、客の総数はさほど多くない。それでも、多い日は一日に二、三十人の来客があつて、朝も早くから、好奇に目を輝かせた女の子達が浮かれ足でやって来る。

「大変な人気ですね、ユエル様は」

受付や接客を手伝ってくれるイレクくんは、くすつと意味ありげに笑い、わたしの顔を覗き込んできた。

「物見高い女性客のお相手は大変でしょうに。ユエル様は慣れているようですけど、ミズカさんは気疲れしてしまうでしょう?」

「……少しだけ。でも、そろそろ慣れてきたから」

そういえば、イレクくんはわたしの言い方に倣って「ユエル様」と呼んでいる。

なんとなく「様」付けにしてしまう雰囲気はユエル様にはある。

これももしかしたら「美青年効果」だったりするのかな?

イレクくんは「そうかもしれないですね」と可笑しげに笑って曖昧な相槌を打った。

「さきほど陰からそつと拝見させてもらったのですが、ユエル様はタロットカードを使ってらっしゃるんですね」

「占星術はホロスコープを描くのが面倒だつて言ってたから」「なるほど」

カードを繰る仕種も優美なユエル様だ。それを意識しての占いで具の選択だつたに違いない。

タロットカードを占いで道具のメインにはしているけど、手相も見る。これはもちろん、生気を飲むため。

ここでも「美青年効果」は発揮され、拒む女の子なんていやしない。

客数が多い日などは、ユエル様もえり好みをしだして、手相を割愛しちゃうこともままある。

「なるべく良質のモノを飲みたいからね」

抜け目がないユエル様は、しゃあしゃあとそんなことを言う。

質の良い、美味しそうな生気の持ち主というのは、外見でなんとなく判別できるらしい。

わたしはユエル様の生気しか知らないから、「味」の違いはわからない。

でも、人間の生気を感じることはできるから、そこになんとなく「色」のようなものを見ることはある。それがキレイだったり、ちよつとくすんでいたりして、それが「味」の違いに関わってくるのだろつてことは、なんとなく分かって、分かる。

できれば美味しい生気を飲みたいって思うユエル様の気持ちは、分からないでもない。……だけど。

だけど、女の子達をえり好みしているユエル様を見るのは、少しだけ、……辛かった。

十時に開店して、現在正午を十分ばかり回ったところ。客足がよつやく途絶えて、わたしとイレクくんは、エントランスに設けた受付所から待合室になっているリビングに移動して、休憩をとることにした。

「お疲れ様、イレクくん。一息入れましょうか」

「はい。あ、ユエル様は？ ご一緒しなくても？」

「うん、お一人で一息ついてるから」

ユエル様は、占いの部屋用に少々改装した個室で、一眠りしている。

さつき覗いてみたら、椅子に座ったまま腕を組み、目を閉じ、じつとしていた。

こういう時は、声をかけずにそつとしておくのが最良だと、長年

仕えているうちに学んだ。

ユエル様にも何か冷たいものをもったけれど、それは後で改めてお出しすることにして、今はとりあえず自分とイレクくんのために麦茶を用意した。

冷蔵庫の中に食材は入っていない。あるのは飲み物だけ。麦茶と牛乳とアルコール飲料が数本。キッチンの隣室にあるワインセラーには、数本頂き物のワインがある。昨日、亜矢子さんから頂いたドイツワインもあるけど、まだ栓は開けてない。

「どうぞ、イレクくん。あ、もしかして麦茶は、初めて？」

「いえ。日本に滞在していたこともありますから。短期間ですけど」「そっか、それなのに日本語上手で、すごいね」

「間隔を置いて短期滞在を繰り返していたから、合計すればけっこうな滞在日数ですよ。日本語を学ぶ目的で名が逗留していたこともありましたし」

「そうなんだ。納得」

「最長で三年、同じ所にいましたよ。居続けたいと思った所だったから、離れるのが惜しかったです」

「そっか……」

イスラさんが言っていた「面倒な年齢」とは、このことだ。見た目十歳児のまま、イレクくんは年をとらない。何年経ってもだから同じ所に長く逗留はできない。

いつまでも成長しないから、人外異質の生き物だとすぐにわかってしまう。

吸血鬼（という言い方は本意なんだけど、とりあえず他に相應しい呼び名が浮かばないので「吸血鬼」って言うことにする）であるユエル様達は、成長を止めることができる。

そして、わたしのような「眷族」はというと、自らの意思では成長を止めることはできない。「眷族」になったその時の年齢で、時間が止まる。

わたしは見た目十六、七歳の年齢のまま、年をとらない。

我ながら、微妙で不便な年齢だと思う。……イレクくと、同様に。

不老である“体質”を羨む女性達は大勢いそうだけど、やはり面倒なことの方が多いから、それを手放しでは喜べない。

「そういえば、ミズカさんは、日本から出たことはないんですか？」
麦茶で喉を潤した後、ふと思い出したように、唐突にイレクくんが訊いてきた。

「うん。まだ一度も」

「そうなんですか、意外でした。ユエル様は一つの国に長く留まるのを嫌う方なのだとイスラから聞いていたんですが」

「うん、でも、単に面倒なのかなって。わたしを伴っていくとなると、ユエル様は必然的に通訳しなくちゃならない立場になってしまふし。だから、いろんな国の言語を覚えたいって思ってるの。少しでもユエル様の負担が軽くなるように。わたしはユエル様に負ぶさってばかりだから……」

苦笑いをして答えたわたしに、イレクくんはふわりと包み込むような笑みを浮かべ、優しい声音で言った。

「ミズカさんは、ユエル様のことがお好きなんですね？」

「……っ」

一瞬、言葉に詰まった。

否定は、しないけど。でも……！ でも、それは……っ！

「そっ、それは、ユ、ユエル様は、そ、そのっ、大切なご主人様でっ！」

おたおたとろたえ、赤面したわたしを、イレクくんはにこにこと笑いながら見つめている。イレクくんの鋭敏な薄茶色のまなざしが、少し痛い。

「お聞きしたいと思っていたんですが」

「は、はいい？」

「ミズカさんのこと」

「わたし？」

わたしがどういった経緯でユエル様の眷族になったのかわかりたいというので、わたしは憶えていることを、ありのまま、イレクくんに話した。

わたしの昔話に、イレクくんは興味深げに相槌をうったり、意外そうな顔をしたりして、真摯に耳を傾けてくれていた。もしかして、「なんでこんな子がユエル様の眷族に？」と疑問に思っていたのかもしれない。その答は、わたしの話からは得られなかったろうけど、でも、イレクくんはにこやかにしている。

「ユエル様は優しい方なんですネ」

というイレクくんの感想には、わたしも大いに首肯した。けれど、「ミスカさんも」と言い添えてくれたのには、返答のしようがなかった。追従口とまでは思わないけれど、イレクくんの優しさから出た言葉だと思ったから。

ふと思いついたのと、わたし自身のことから話を逸らしたくて、今度はわたしの方からイレクくんに質問をした。イレクくんのお母さんは、どうしているのか、と。

イレクくんは一瞬ためらったようだった。けれどすぐに笑って、答えた。

「もう亡くなりました。ずいぶんと昔のことです」

「あ、ご、ごめんなさい」

昨日のユエル様の話でいくなら、イレクくんのお母さんは、イスラさんの「眷族」なのだろう。そう思ったから、興味がわいた。できればどんな人なのか会ってみたいなって思った……のに。

「ごめんなさい、わたし」

「ミスカさんが謝る必要はありませんよ。それに、もう昔のことですから」

「昔って、……訊いていいかな？」

「ミスカさんが生まれるより前のことですよ。戦渦に巻き込まれて……事故死とでもいうんでしょうか、あれも」

「……………」

日本の歴史と、それに関わる世界の歴史は、ユエル様に習った。学校に通わせていただいた時にも、授業で習った。わたしがユエル様の着族になってから、「世界」と名のつく戦争は、二度ほどあったと記憶してる。

その他にも細々とした「戦争」は日本各地で起こっていて、けれどユエル様とわたしは「冬眠」をすることで戦禍を免れてきた。

「冬眠」も、人外的存在であるわたし達が持つ特殊能力だ。体の全機能を仮死状態にまで低下させ、何年でも眠って過ごすことができる。もちろんこれも着族であるわたし自身ではできないことで、ユエル様の力に頼ることになる。

短い期間の「冬眠」は何度が経験した。ふた月とか半年とか。

それ以外に、長い期間の「冬眠」を、わたしは二度、経験した。

一度目は五年程、二度目は十年程、地下で眠り続け、時を過ごした。

おかげで戦争の被害に遭うこともなく、その悲惨さも、わたしは見ずに済んできた。

イレクくんは何事もないように今こうして笑っているけれど、辛かったに違いない。戦禍を目の当たりにするなんて、想像するだけに恐ろしい。

それに、たとえ人外の存在だといったって、肉親を失う悲しみは人間と変わらないはずだもの。

「お母さんのこと、憶えてる？」

イレクくんは静かに微笑み、頷いた。

「聡明で美しい女性でした。あの父……イスラにして、頭が上がりなかつた唯一の人でした。母以外に他の着族を持つこともできたのに、それもしませんでしたから」

「……………」

イスラさんの着族になって、イレクくんを生み、ともに過ごした期間は、五十年程だったという。長く生きている彼らにとって、その五十年はあまりに短い期間だったろう。

それを思うと切なくなった。

どんなに辛くて、悲しかったろう。イレクくんもだけど、イスラさんの悲しみはいかばかりだったろうと、胸が痛む。

ああ、そうだ。母と言えば……。

ふと頭に浮かんだ、金髪碧眼の美女の顔。

イレクくんはその人のことを尋ねようとしたのだけど、あいにく、忙しいベルの音に邪魔をされてしまった。

真鍮の呼び鈴を、誰かが受付場所で鳴らしている。

一度鳴らせば済むだろうに、何度もしつこく、ベルを振っている。

「お客様のようですね」

「うん」

頷いて、わたしはイレクくんとともに玄関脇に設けた受付場所へと急いだ。

8・矢も楯も

もしかしてこのせつかちなベルの鳴らし方は……と予想していた人が、受付場所にいた。片手を腰にあてて、急いで駆けつけたわたしを「遅い！」と言わんばかりの傲慢な態度で睨みつけてくる。

ああ、やっぱり。

甘ったるくてきつい香水の香りが、エントランス中に漂っている。亜矢子さんだ。

待ちぼうけを食わされてイライラしている様子だった。

というよりも、わたしを見るたび、亜矢子さんは目を釣りあがらせているような気がする。

亜矢子さんは、昨日とは変わって、カジュアルなスタイルだ。丈の短いTシャツに黒のカプリパンツ、ビーズのはめ込まれたミュールからのぞく足先は、水色のペディキュアに彩られている。洋服やバッグ、靴、それにメイク用品だって、きつとどれも値の張る、高価なブランド物なのだろう。廉価品じゃないことくらいは、わたしにも分かる。

「まったく、対応が遅いんじゃない？ 客をこんなにも待たせるだなんて？」

「……すみません」

こんなにもって、ほんの一、二分も経っていないと思うけれど。なんて口答えは、もちろんしない。

店を開いたその翌日にやって来てから今日まで、亜矢子さんはユエル様に会いに毎日やってくる。昨日みたいに閉店していても懲りずにやってくるのだから、そのマメさには感服ものだ。亜矢子さんの常連客は他にはいない。

「さつさとユエル様のところへ通してくださらない？」

「はい。それでは、こちらに記帳を……」

「毎回毎回、手間を取らせるのね？ あなたが書けばいいんだわ」

「いえ、でも」

「愚図なうえ、物覚えまで悪いだなんて、処置なしね。まったくユエル様はどうしてこんな使えない子を雇っているのかしら？」

「……………」

反論の余地もなければ、その勇氣もない。

わたしは目線を逸らして黙するしかない。

嫌みたっぷりで高慢な亜矢子さんだけど、嫌いかと言えば、実はそれほどでもない。苦手ではあるけれど、わたしのことを「鬱陶しく目障り」だと思っっているのがあまりにあからさま過ぎて、なんだから悪感情を抱けない。分かりやすい人だなと思うだけ。

それに亜矢子さんは、蔑んだ目ではあるけれど、わたしを“人”として見てくれる。わたしという個人を見ていてくれている。

だからわたしも亜矢子さんと対峙できるのだ。むしろ、対等の相手だなんて思っていない。そのあたりはわかまえているつもりだ。

とはいえ、わたしが何を言っても亜矢子さんを苛立たせてしまうとわかっていいるから、対応には困ってしまう。

困惑顔をするわたしに、横からさり気なく助け舟が漕ぎ出された。

「お手数ですがこれも規則ですので、ご記帳願えませんか」

漕ぎ手は、イレクくん。

イレクくんの丁寧な口調は、聞きようによつてはひどく冷やかで威圧的にすら感じられる。いささかも臆さず、亜矢子さんを見据えている。

亜矢子さんは口を挟んできたイレクくんを怪訝そうに見やり、眉をしかめた。

「なんですよ、あなた」

イレクくんは愛想笑いを浮かべて答える。

「ユエル様の、遠縁にあたる者です」

「あ、あら、そうなの？」

亜矢子さんは、本当に分かりやすい。

直前まで「何、この小生意気な子供は？」とイレクくんを睨みつ

けていた亜矢子さんは、「遠縁」という言葉を聞くやいなや、みごとな早さで手のひらを返した。

イレクくんの適応能力の早さも見事なものだと思う。

ユエル様の遠縁なんてたぶんその場しのぎの嘘だろう。だけどユエル様の「身内」だと言えば、ユエル様の信望者は容易く平伏する。そのことをイレクくんはわずか半日足らずで悟った。

亜矢子さんのような高慢な女性にも、「美青年効果」はいかななく発揮される。「ユエル様効果」と言いかえてもいいかもしれない。僕は、イレクと申します」

イレクくんはさり気ない所作で、握手を求めるために手を差し出した。亜矢子さんは少し腰を屈め、何のためらいもなくイレクくんの手をとった。

「初めまして。わたしは桜町亜矢子と申しますの」

「そうですか。よろしく、アヤコさん」

勘のいい人なら、あるいは気づいたかもしれない。

イレクくんから発せられる、異様な“気”に。

イレクくんの薄茶色の双眸が、一瞬、きらりと光り、亜矢子さんの目を捕らえた。

「……………」

亜矢子さんは言葉を失い、イレクくんを瞠目する。

握られた亜矢子さんの手から、イレクくんの手を伝って、生気が奪われていくのが分かる。

イレクくんは声のトーンを落とし、亜矢子さんを見据えて言った。

「今日は、お疲れではありませんか？ 帰って、少し眠った方がいいでしょう」

「……………眠り……………」

「そう。今日はもう帰られた方がいいですね」

「帰……………る……………」

イレクくんは微笑んだ。一見、優しげなその笑顔。けれど、生気が奪われていくのと同時にあたりの空気からも温みが奪われていく

ようだった。背筋がぞくりと冷える。

それも、ほんの僅かの間だった。

「さあ。このまま振り返らずに、どうぞお帰りください、亜矢子さん」

「……………」

亜矢子さんは木偶人形のようにぎこちなく頷いた。イレクくんが手を放すと、亜矢子さんはぼんやりとした面持ちで身を翻し、そのままわたしを一瞥することもなく、覚束ない足取りで屋敷を出て行った。

イレクくんが何をしたのかはなんとなく分かったけれど、あまりに唐突だし驚いてしまって、わたしは言葉もなく、茫然と立ち尽くすばかりだった。

そんなわたしの背後から、パチパチと手を叩く音が聞こえた。振り返るとそこに、感心した様子のユエル様がいた。

「お見事、イレク」

ユエル様は愉しそうに笑いながら、厄介払いができた、人の悪いことを言う。

「幻術を使うのが得意だとは聞いていたが、なかなか強引だね、イレク。生気は、ちょっと飲みすぎの気もするが？」

「あれくらい大丈夫でしょう、あの方は」

「そうだろうね。まあ、味の方はいまひとつだが、少々飲みすぎてもすぐに回復できるほどの生気を持ち主ではあるからね」

「ミスカさんに酷いことを言うものだから、つい腹に据えかねて」
そう言うってから、イレクくんは改めてわたしの方に向き直り、申し訳なさそうな顔をした。

「もしかして余計なことをしてしまったでしょうか？」

「う、ううん。ありがとうって言うのもただけど……………」

わたしは首を横に振り、苦笑して応えた。

亜矢子さんを幻術にかけて撃退してくれたこと、やっぱり……ちよつと……感謝してる。

わたしがどのような対応をしても亜矢子さんは不愉快だったろうから、イレクくんが割って入ってくれて助かった。

「あの方はミズカさんに対して、いつもあんな態度なんですか？」

「うん、だいたいあんな感じかな」

「失礼な方ですね。いったい自分を何様だと思っているんでしょうか」

イレクくんはまるで自分のことみたいに腹をたて、語気を荒立てている。

「二度と来ないよう、強い暗示をかけておけばよかった。とっさのことでそこまで気が回らなかったのは失敗でした」

そこまでしてしまうのは、さすがにちよつとかわいそうなんじゃないかなと思っただけれどそれは口にせず、とりあえずはイレクくんにお詫びとお礼を述べた。

「嫌な思いをさせちゃってごめんね、イレクくん。それから、ありがとう。イレクくんがいてくれて良かった」

「いいえ、不快にさせられたのはあの方の言動のせいで、ミズカさんには何の落ち度もないんですから、謝らないでください。ともあれ、ミズカさんの手助けができたのなら、よかったです」

イレクくんが笑い、わたしも微笑み返した。

なんだかちよつとくすぐったいような心持ちで、それにとっても嬉しかった。

自然と口元がほころんでしまう。

「ミズカ」

突如、頭上からユエル様の声が降ってきた。

ユエル様は、いつの間にかわたしの真後ろに立っていた。少し動いたら体が触れてしまう程に近い。ユエル様は少し腰を屈めて、囁くようにわたしの名を呼んだ。

いつもより少し低い声に、ぞくりと鳥肌がたつ。優しさよりも、

押さえつけるかのような重い声。だけど怒声からは程遠い、甘さの含まれた声だった。

ユエル様を肩越しに振り返り見た途端、深い緑色の瞳とぶつかった。

「ミズカ。出掛けるから、ついてきて」

「え……」

「息抜きに、外の空気を吸いにね。午後の散策も、たまにはいい」

「は、はあ……」

気のせいだろうか？

ユエル様、怒っている風ではないけれど、気難しげな顔をしている。

さっきまで愉しげに微笑んでいたのに、急にどうしたのだろうか？

「イレク、留守を頼むよ。来客は適当にあしらっておいてくれればいい」

「……はい、わかりました」

イレクくんは叱られた子供みたいに肩を竦め、ユエル様の言に素直に従った。だけど、笑いを堪えているみたいな訳知り顔をしていて、恐縮している様子はちっとも見られない。

ユエル様とはいえ柳眉をしかめ、不機嫌顔だ。「面白くない」

と拗ねているような、そんな顔をしてイレクくんを睨んでいる。

「あの、ユエル様……？」

わたしの心配げな目線に気づいて、ユエル様はふっと小さく息をつき、優しい笑みを見せてくれた。

「ミズカも息抜きをした方がいいだろうからね。少し、外に出よう」

「はい。……それじゃあ、お供します」

「イレクも適当に休んでいるといい」

「はい、そうさせていただきますから、どうぞごゆっくりお出かけになってください」

にこりと微笑むイレクくん、ユエル様は小さな苦虫を噛みつぶしたような顔をして、「そうしよう」と短く応えた。

踵を返し歩き出したユエル様の後を、わたしは急いで追いかける。ユエル様の気紛れはいつものことだけど、わたしの器は狭量で、なかなかそれに慣れないでいる。

ユエル様の突飛な行動に一喜一憂するわたしの身にもなっほしいものだなんて、とても言えないけれど。

「まっ、待つてください、ユエル様！」

せめて、置いてきぼりにはしないでください。

わたしの心の声が聞こえたとは思えないけれど、ユエル様は玄関先で足を止め、振り返ってくれた。

そしてわたしを見やり、艶然と微笑んだ。「慌てると転ぶよ、ミズカ。君は、存外ドジなところがあるからね」

余計な一言を口にして。

9・思い出の散策

高原地の夏は、平地と比べると幾分かは涼しい。陽射しの強い日はやっぱり暑いけど、今日のような曇天の日は多少ましだ。とはいえ、湿度が高いから肌にまとわりつくようなじっとりとした暑気は不快に感じることもある。それでも緑陰を渡る風は心地よく、土と緑の匂いが心身を洗うようだった。

ユエル様は人気の少ない森の小路を選び、ゆったりと歩く。わたしはその後をしずしずと付き従っている。

ユエル様がこうして散歩に出るのは久しぶり。

このところ屋敷に引きこもっていることが多かったから、気分転換がしたかったのかもしれない。

「……………」

ユエル様が黙っているから、わたしも口を閉じている。

重い沈黙じゃない。穏やかな静けさが心を安らげていた。

ユエル様とわたしの、土と草を踏んで歩く足音もまた耳に心地良かった。

さやさやと梢が風に揺れ、擦れ合う音を響かせている。近くで小鳥が鳴いている。深緑の奥から空へと抜けていくような、甲高く澄んだ囀りだ。

わたしとユエル様がゆるやかに歩いている道は、コンクリート舗装のされていない小路だ。だけど車両が通れるくらいの道幅はあり、路にもタイヤの跡が残っている。木立の合間に、売り物件の立札のあるいささか古びた別荘が見えた。その他にも何件か、個人の所有かと思われる別荘があったけれど、人気はなかった。お盆休みに入れば、ここらももう少し賑やかになるのだろうか？

路の両脇にはずらりと羊歯が並び、枯れた巨木や岩にはびっしりと苔が生え、あたり一面を緑色で覆っている。改めて上を見やると、落葉松の他にモミジの木も多く、秋になればさぞかし美しい紅葉が

見られるだろう。

また視線を落とし、地を這う緑に目をやった。

小さな花をつける山野草のほとんどは直射日光を避けて咲き、やもすれば見逃してしまいそうなほど、地味で目立たない。

タイヤに踏みしだかれても、根をはり、葉を伸ばしている草々もまた美しいと思った。踏まれ続けても、根強く生きている。

園芸種の花みたいな華やかさはないけれど、見過ごしてしまいがちな山野草や名も知らない草々に、わたしはなにやら羨望まじりの共感を覚えていた。

誰の心に留まらずとも、こうして生き続けていくには辛苦に耐える強さが要る。わたしにもその強さがあればいいのに。

わたしが取るに足らない雑草ならば、ユエル様は一輪の薔薇といったところだろうか。冷艶とした、幻の銀の薔薇

ユエル様の背を見つめながら、ぼんやりと思考を巡らせた。

ユエル様は孤独を愛する方なのかも。

街中に居を構えることが少ないからそう感じるのかもしれない。

吸血鬼である正体を隠すためという理由もあると思うけど、それよりも、ユエル様自身が雑踏を嫌ってるということの方が大きい気がする。

ユエル様は時と場合によっては社会的になるけれど、必要がなければ愛想笑いの一つもせず、排他的になることもしばしばだ。好奇の目に晒されるのが、「鬱陶しい」と仰っていた。

「まあ、やむないことだけだね。私のこの美貌では、どうしても人目を惹いてしまうから」

その述懐に異存はありません。だけど、不遜に微笑むユエル様に、わたしはちょっと胡乱な顔をしてしまったのだった。

ユエル様は苦笑して、「事實は事実として、真摯に受け止めねば

ならないよ」と返してきた。それから真顔をこちらに向けて言ったのだ。

「ミスカも目をつけられやすいから、気をつけなさい」

「……？」

「目が離せないとも言つが……。四六時中見張っているわけにもいかないからね」

ため息をついたユエル様にどういう意味なのか訊き返しても、微笑みでごまかされてしまった。

ユエル様の真意はいつだってはかりしれず、わたしには分からないことだらけだ。昔も、今も……

ユエル様はとくに目的地があるようでもなく、ゆったりとした歩調で道を行く。首を伸ばして木々の隙間に見える曇りがちな空を仰いだり、風に撫でられた銀髪を指で梳き、整えてはまたそれを風に遊ばせたりしていた。そして時々、わたしがちゃんとして来ているか肩越しに振り返って確かめる。

目が合っても、ユエル様は何も言わない。だけど、わたしの存在を確認してくれるそのことが、わたしを安堵させた。

話しかけていいものやら戸惑ったけれど、わたしはユエル様との距離を詰め、口を開いた。

「ユエル様、実はお願いがあるんですけど」

「うん？」

ユエル様は足を止め、振り向いた。ユエル様の深緑色のまなざしが宙からわたしへと向けられた。ユエル様は静かな微笑を湛えている。

鼓動が、どきりと跳ねた。

「え、えつと、……その、外国語を教えていただけなかな、と思っ
いてまして」

「外国語？」

「はい。英語でも、他の言語でも」

「それはまた、どうして？」

「さつきイレクくんとも話してたんですけど……」

海外に行きたいと思ってるわけじゃない。そりゃあ、興味がないこともないし、機会があるなら行ってみたいなど、内心思ってる。そんな贅沢が言える身分じゃないことは承知しているつもりだから、口に出したりはしないけど。

わたしの存念はどうであれ、いつかユエル様の意向で海外へ行くことになった時に、日本語しか話せないのはやっぱり不便だろう。それに、もしかしてわたしのせいでユエル様が日本から出られないでいるのなら申し訳ない。たとえそうでなかったとしても、いざという時のために、英語くらいは話せるようになって、少しでもユエル様の負担を軽くしたい。

それを告げると、ユエル様は「ミズカらしい」と微笑んだ。

「向学心があるのは良いことだ。ミズカは勉強家だね」

「ありがとうございます。でも、それはきつと、今まで勉強をすることがなかったからだと思います」

ユエル様に仕える前、わたしは読み書きと簡単な算数ができる程度で、まったく無学だった。学ぶ楽しさなど、知る由もなかった。

ユエル様に様々なことを習い、そうして自分の中に知識が増えていくのが嬉しかった。

勉強が苦痛にならなかったのは、きつと「進学」や「受験」という強迫観念に駆られることがなかったからなんだと思う。「将来」を危惧せず、ただ純粹に、知識や感性を豊かにするために学べるというのはとても贅沢なことなのかもしれない。

楽しくはあってもなかなか身にはつかず、それが我ながらもどかしくて、情けなくなる時もあるけれど。

「わたし、学習能力は高い方じゃないし、憶えもいいとは言えないから、その分ユエル様にはお手間をかけてしまいますけど……」

「ご謙遜だね、ミズカ。そう卑下することもなかるう。ミズカは教え甲斐のある良い生徒だったよ、いつでもね」

「ほつ、ほんとにそうだといいんですけどっ」

麗しい微笑みを向けられて、思わず頬が熱くなる。

「ミズカは素直なのだが、反面、考え方が頑なになりすぎるくらいがある。もう少し柔軟になっても良いと思うが、まあ、矯正した方がいいという程でもないね」

「……はい」

ユエル様は迷惑顔もせず、いつだって根気よくわたしの勉強に付き合ってくれた。

特に学校……高等学校にもぐりこむ時は、少なくとも義務教育を終えてきた程度の一般教養は必要になってくる。さらに「現代人」としての一般常識もある程度は頭に入れておかねばならない。

それらを、ユエル様は懇切丁寧に教えてくれる。言葉でだけでなく、「実地学習が一番手っ取り早い」と言っ、この時ばかりは街中に居住し、「現代人」の営みを体験させ、学ばせてくれる。

ユエル様だって、移り変わっていく時代に応じた「一般常識」はその時になって初めて体感することが多いはずなのに、その順応性の早さときたら、もう一種の魔法としか思えないほどだ。

様々な“術”を使いこなせるユエル様だから、そうした術もあるのかと、いつか訊いたこともあるくらいだ。もちろんそんなことはなくて、

「私ほど頭脳明晰な者になれば、即座に時代に対応できるのだよ。長年に培われてきた慣れがあると言えなくもないが」

と、仰ってた。

「ミズカもよくやっている」

ユエル様は「褒めて伸ばす」の姿勢で、わたしの成長を促してくれる。それも、とても自然に。

「何事も真摯に取り組むその姿勢は、ミズカの美点と言えようね。素晴らしいことだと思っよ」

ユエル様は、ありのままのわたしを認め、受け入れてくれている。それを感じられて、とても嬉しかった。だからもつと頑張ろうと思

うのだ。

あれは、いつだったかな。

そう、何年か前のこと。初めて高校にもぐりこんだ時のことだ。

かなり浮足立ってたって、我ながら思う。同じくらいに緊張もしていたけど、たとえ短期間でも高校へ通わせてもらえるなんて、夢のようだった。

最初は正体がバレやしないかとひやひやしていたけれど、ユエル様は英語の教師としてもぐりこみ、わたしのことを後方から何くれとなくサポートしてくれた。おかげで、たったの三ヶ月間だったけれど、わたしは高校生らしい日々を満喫できた。

それで、少し欲が出てしまった。もう少しだけ学生らしい経験がしてみたくなったのだ。

「テストを受けたい？」

ユエル様が訝しげに訊き返してきた。わたしが、「テストを受けてみたい」と言ったことがよほど意外だったのか、驚いたような、とまどったような顔をしていた。

「はい、せっかくですし」

「変わっているね、ミズカは」

「なんで変わっている、なんですか？」

「テストなんて、普通は受けたがらないものだよ？」

くすつと、ユエル様は小さく笑った。からかうようにはなく、とても優しい顔をしていた。

「でも、どれくらい身についたか知るにはちょうどいいですから冬休みが来る前、期末テストの日程が決まった頃、もう頃合いだからそろそろ姿をくらまそうかと言ったユエル様に、「もう少しだけ待って下さい」と頼み込んだ。テストを受けてから、学校を去りたいと無心した。

「きつと、点数は惨憺たる結果になるんでしょうけど、それでも受けてみたいんです」

「……わかった。ミズカのしたいようにするといい」

「はい！ ありがとうございます、ユエル様」

ユエル様はわたしのことを案じてくれていたのだと思う。

だって、とんでもなくサイアクな点数の解答用紙が戻ってくるのは目に見えていたから。

まともな教育を受けたことのないわたしが、いきなり高校生クラステストを受けるなんて、無謀の一言だもの。

どの授業も、ついていくのが精一杯で、「ちんぷんかんぷん」と頭がぐるぐる回っちゃうことも多かった。

だからテスト前の一週間は、そりゃあもう、必死になって勉強した。どうしてもわからないところはユエル様に聞いて。ユエル様は面倒がらず、わたしの勉強をみてくれた。

必死の勉強の成果はあって、どの教科も平均点はとることができた。

「よくやったね、ミズカ」

ユエル様もそう言って褒めてくれた。よしよしって頭を撫でてくれて、深緑色の瞳をやわらげて微笑みかけてくれた。

それだけでも頑張った甲斐があったって思ったし、ユエル様の優しい笑顔を見られて、本当に舞い上がるほど嬉しかった。

ユエル様の笑顔を見られるだけで幸せだった。

もうそれだけで胸がいっぱいになるほどに。

ざあつと枝先を揺らす緑風が吹きつけてきた。

ユエル様の銀の絹糸のような髪が風に乱される。

銀の髪をしなやかな指で梳きあげると、ユエル様はわたしをじつと見つめ、意外そうに訊いてきた。

「日本を出たいの、ミズカ？」

「え？ いえ、わたしではなくて。ユエル様は一つの国に留まるのはお好きじゃないって、イレクくんから聞いたのですけど」

わたしはためらいつつも、訊きかえしてみた。

「わたしを連れて海外へ出るとなると通訳とか、そういうのが面倒なのかなって。だからユエル様は日本に留まっていらっしゃるのかなって思っ、それで」

「なるほど」

「え？ なるほどって、それはどういう意味でのなるほどなんですか、ユエル様？」

「ミズカはそう思っていたのか、という“なるほど”だが」

「違いましたか？」

「違うような、違わくないような……。まあ、ミズカが教えてほしいというのなら、やぶさかではないよ」

「は、はあ……」

わたしは首を捻った。

なにやら微妙で曖昧で意味深で、答えになってないですけど、ユエル様？

「西欧圏の言語を覚えようとするのなら、ラテン語から始めるのが手っ取り早いのだが」

ユエル様は腕を組み、そしてちよつとからかうみたいな顔をして、わたしを見る。……みたい、じゃなくて、間違いなくからかっている。「どっ、どこが手っ取り早いんですかっ?! いきなりラテン語な

んで！」

「大元の言語なのだから、基礎を知っていれば、他の言語を習得する際に、楽ができるのだけど？」

「ちよっ、それはいくらなんでもすっ飛ばしすぎです！」

「そう？」

「そうです！ とりあえず、英語とかからで十分ですっ！」

「ミズカがそういうのなら、いたしかたないね。アメリカとイギリス、どちらがご希望かな？」

「……っ、わかりました、もういいです、ユエル様！ 教えてくださいさる気、ないんですね」

わたしは踵を返した。

難癖つけてくるってことは、面倒だから教えたくないってことなんだ。

がっかりもしたし、からかわれてちよっ腹も立ったわたしは、勢いづけて歩き出した。ユエル様が後を追ってくる。

「ごめんごめん、ミズカ。待って」

笑いながら「ごめん」と言われたって、説得力ないですっ。

「知りませんっ」

ヤダ。

……痛い。喉、痛い。胸も痛い。キリキリ痛んで、苦しくなる。

どうしよう。なんで……なんで、こんなことくらいで。

なんで泣きそうになんかなるの？ 泣くようなことなんかじゃないのに。どうして、切なくなるの？

拒まれたわけじゃない。

いつもの悪戯心だって、わかっているのに。どうして拒絶されたみたいなの、そんな身勝手な解釈をしてしまうの？

目が、熱くなってきてる。引き結んだ唇がどうしようもなく震える。

泣きそうになっことを悟られたくなくて、顔を俯かせ、小走りになった。

「ミズカ」

「……っ」

ヤダ。

どうかしてるんだ、わたし。ユエル様の顔が見られない。泣きそうになってるこんなひどい顔、ユエル様に見せたくない。

「ミズカ、待ちなさい」

「……っ、やつ」

たまらず、駆け出そうとした。

ところが、気持ちと同様にもつれた足がそれを邪魔した。石を踏んづけ、それに足をとられてしまった。

「……った!」

ぐきっ、という擬音が聞こえてきそうだった。右の足首が不自然に曲がって、声をあげたのと同時に、ぺたんとお尻をついて、その場に座り込んでしまった。派手にすっ転ばなかっただけでしたけれど、情けないやら恥ずかしいやら、顔があげられない。

「ミズカ!」

「……っ」

踏んだり蹴ったり、という語彙が目の前で点灯していた。

捻ったらしく、ズキズキと釘を打ちつけてくるような痛み在眉をしかめた。

「ミズカ、だい……」

「大丈夫です!」

すぐにわたしに追いついたユエル様の差し出された手を取りもせず、顔を背け、立ち上がるうとした。けど、足に力が入らない。

「ミズカ」

ユエル様はわたしの前に片膝つき、そして捻った足首にそっと手を置いた。ユエル様の少し冷たい手が素肌に触れ、思わず身を竦めた。ユエル様が“手当て”をしてくれると分かり、さらに申し訳なくなつた。

「足首を、捻つたみたいだね?」

「……………すみません」

俯いたままだったけれど、非礼を詫びた。

仕える主人に対して、礼を失した態度をとってしまったのだから、ただ顔を上げられない。眦に溜まった涙がこぼれ落ちそうだった。

「悪かったよ、ミズカ」

そんなわたしの顔を上げさせたのは、ユエル様の一言だった。

「からかったりして、悪かった。ミズカが望むのなら、英語でもスペイン語でもフランス語でも、きちんと教えるから」

「……………ユ…ッ」

「それで、赦してはもらえないだろうか」

「……………ッ」

思いもかけないユエル様の謝罪に、わたしは大いに周章し、言葉も出ない。迂闊にも、みっともない泣き顔をユエル様に晒してしまった。

涙が頬を伝った感触に気がついて慌てて拭ったのだけど、手遅れだ。

「わっ、わたし……………」

「ミズカ、そのまま……………じっとして」

「え？」

次の瞬間に起きたことは、わたしを驚愕させるのには十分だった。ユエル様がさらにわたしに身を寄せ、背中と膝下に腕を回した。そして、体がふわりと浮いた。

「なっ、なん……………っ？」

「じっとしていなさい、落ちる」

気がつけばわたしは抱き上げられていたのだ、ユエル様に。軽々と、横抱きにされていた。

「ユッ、ユ……………ッ」

急な展開に頭がついていかない。

いつ、いつたい何事がわたしの身に起きてるの？ 何がどうなってるの？

胸が、痛いくらいに鳴ってる。顔中が熱い。

ユエル様はわたしを抱き上げたまま、歩き出した。

「あつ、歩けます、わたし……っ！ おろしてください、ユエル様！」
「そうは思えないが？」

「でっ、でも……っ」

「どうしても嫌だというのなら、おろすが」

ユエル様は目を細めてわたしの顔を覗き込んでくる。数センチしか離れていないところにユエル様の美しすぎる微笑があつて、目はチカチカするし鼓動は速まるばかりだし、おかげで涙は引っ込んだけれど、とにもかくにも落ち着かない。

「嫌とかじゃなくてっ」

「嫌ではないのなら、じっとしていなさい。……すぐに着くから」
「……………」

肩を竦め、わたしは小さく頷いた。頑なに拒んでユエル様の機嫌を損ねたくなかったから。

……………ううん、違う。それだけじゃない。

恥ずかしくて申し訳ないと思いつつ、それでもこのまま、ユエル様の腕の中にいたかった。

僅かの間だけでも。

* * *

帰宅したわたしとユエル様を出迎えてくれたのは、アリアさんだった。

「あらあら、お姫様だっごで帰還とは。いいもの見ちゃったわ」
アリアさんはなにやら嬉しげににこにこ笑っている。

「おかえりなさい、ミズカちゃん」

「ただいま、です。……あ、あの、お姫様だつこつて……なんのことですか？」

たぶん、それは間の抜けた質問だったんだろう。

アリアさんは一瞬目を丸くし、その直後ころころと笑い出した。

「今のミズカちゃんの状況のことよ？ お姫様みたいな扱いでしょ、それって？」

「そんな……お姫様だなんて、わたしはそんな身分じゃ、全然……」
「ふふ。ミズカちゃんって、ホントに可愛いわ」

青い双眸に明るい光を宿して微笑むアリアさんは、悪戯好きの女神のようだ。神々しいだけではなく、近しさも感じる。そういうところがユエル様とよく似てる気がする。

ふと視線を上げると、ユエル様は表情を消していた。不機嫌そうではなかったけれど、少しバツの悪そうな顔に見えたのは、たぶんわたしの気のせいなんだろう。

アリアさんは小首を傾げ、ユエル様の顔を覗き込み、尋ねた。

「退屈だったから早く帰ってきたんだけど、手伝えること、ありませんかね？」

それを受けて、ユエル様は「ああ、助かる」と短く応じた。

ユエル様はわたしを寝室まで運んでくれ、ベッドにおろしてくれ。ベッドの端に座るわたしの顔を、ユエル様は気遣わしげに窺ってくる。

「まだ痛むかい、ミズカ？」

「いえ、もう、だいぶいいみたいです。さっきユエル様に“手当て”をしてもらったから……」

「そう？ ならば良いが」

「はい」

気恥ずかしくて、まともにユエル様の顔を見られない。胸の動悸も、さっきよりはだいぶん落ち着いたとはいえ、平常には戻らない。

かといってこのまま顔を背けてはいられず、平静なふりをした。もっとも、それはきつとうまくは出来ていなかったと思うけれど。「すみません、お手間をかけてしまって」

「ミズカ、……」

ユエル様は戸惑いがちな様子で、何かを言いかけた。けれどそれは扉の開く音によつて遮られてしまった。

「入るわよ、ユエル、ミズカちゃん？ 一応、湿布も持ってきたわ」
「アリアさんが水の入ったデキャンターと湿布をお盆に載せて、部屋に入ってきた。」

「ああ、すまない、アリア」

「すみません、アリアさん」

「いいのよ。それより、ミズカちゃん、足、痛まない？ 湿布貼らなくても平気かしら？」

お盆をサイドテーブルに置き、アリアさんは青い目を何度も瞬かせて、わたしの顔を覗き込んでくる。

「ありがとうございます、アリアさん。痛みはもうひきましたし、大丈夫です」

「……ミズカちゃん、目が赤いわね？ 何かあったの？」
心配そうな顔をし、アリアさんはわたしの頬に指を当ててきた。優しく触れてくるアリアさんの指の感触が、熱帯びた頬に気持ち良かった。

返答に窮して、わたしはちょっと目を逸らしてしまった。

ユエル様の方にも顔を向けられない。一瞬、微妙な空気が室内に漂った。

「……いえ、その……、これはちょっと、ゴミが入って」

「両目に？」

「えっと、……そ、です」

「ミズカちゃん」

「……っ！」

唐突に、アリアさんはわたしをぎゅっと抱き寄せた。そして、お

さまりの悪いくせつ毛を宥めるようにして、よしよしと撫でる。

アリアさんの豊満で柔らかい胸の谷間に顔を埋める形となつてしまつて、ドギマギしてしまつた。

アリアさんは、とつてもいい香りがする。鼻腔をくすぐる甘い芳香は、懐慕の情を誘うようだった。なんだか切なくなる。

「いい子ね、ミズカちゃん」

アリアさんの口調があまりに優しくして……。喉の奥がきゅっと締まつたように痛む。

……どうしよう、また泣きだしてしまいそうだ。

「ミズカ」

アリアさんの後方に控えていたユエル様は、この時ばかりはアリアさんをわたしから引き離そうとはしなかった。

「ミズカ、このまま少し、休んでいなさい。昨夜は、あまり眠れなかつたのだろう？」

「そうね。それがいいわ」

アリアさんはわたしを離し、前髪を撫でつけた。赤くなつてる目を隠してくれたのかもしれない。

「休めば気も落ち着くわ。ね？」

「……はい」

わたしは素直に頷いた。

余計な心配を、もう……これ以上かけたくない。

「じゃ、あたし達、行くわね？ ユエル、行きましょ？」

「ああ」

アリアさんに促され、ユエル様も部屋を出て行く。

ユエル様はドアの向こうで一度足をとめ、わたしのことを振り返つて見たようだったけれど、わたしはそれに気づかぬふりをして、布団にもぐりこんだ。

ドアの閉まる音がした。二人の足音も遠ざかっていく。

……ごめんなさい、ユエル様。

目頭がまた熱くなり、わたしはぎゅっと目を閉じた。

* * *

心の奥にしまっておいた問いが、不意に浮かびあがってくる。喉をせせりあがってくるのに、いつだって声にはならない、その問い。

生気の飲み方を教えられ、初めてユエル様の生気を飲んだ時のことだ。

「私のことを、恨んでいるだろうね？」

そう、ユエル様に訊かれた。微笑んでいたけれど、とても儂げだった。

わたしは首を傾げ、「どうして」と、訊き返した。

ユエル様はおうむ返しに、「どうして」と訊き返してきた。

「こんなことになってしまったとは、思わない？」

わたしは首を横に振って答えた。

人外の生き物になってしまったそのことに、たしかにとまどってはいたし、不安はあった。予想外の人生展開には違いなかったからけれど……………

「恨むなんて、考えつきもしなかったです。ちょっと驚いてはいますけど。……………まだ慣れないだけで、大丈夫です」

わたしの返答に、ユエル様はとまどったような笑みを見せた。「本当に？」とさらに訊き返してくるようなことはなかったけど、どこか不安なような、不審なような、揺らぎのある微笑だった。

「ユエル様には感謝してもしきれないほどなのに、恨むなんて……あり得ませんから！」

「……………ミズカは、生真面目な性分だからね」

そう言って、ユエル様は苦っばく笑って嘆息した。

ユエル様に引き取られてからずっと、わたしは自分の置かれた状況を把握するだけで精一杯だった。ユエル様の“眷族”になっても、それはあまり変わらなかった。自分の身に起こった変化に無頓着すぎたかもしれない。

それでも、気になることはあった。

わたしに変化をもたらしてくれたユエル様に、ひとつだけ、どうしても訊けないことがあったのだ。

そして今もなお訊けずにいる。怖じている。

「どうして、わたしだったのですか」

と、ただそのひとつの問いに。

11・不意の風守り

風が強まってきたのか、葉擦れの音がイヤに耳につく。ざわざわと、胸がざわめいた。

暑いとも涼しいともいえない、じつとりと重い湿気のせいで、覚醒がしつくりとこない。

横たわり、くの字に曲げていた体を伸ばし、仰向けになった。それでも瞼はなかなか上がらず、目をこすった。不覚にも泣いてしまい、そのせいで瞼が腫れたように重い。

うつすらと目を開けると、部屋が少しだけ暗くなっているのに気がついた。

どれほど眠っていたのだろう。まだ夕方のようにだけど、早く起きなくちゃ。

気だるくて、目を開けるのすら億劫だった。

でも、起きなくちゃ。

「……力……ん」

だれ？ だれか、傍にいる？

顔の近くに、何かがある気配がした。人の息遣いが聞こえる。

「……力……ちゃん……」

「……ん」

頭がまだぼんやりとして、重い。

だけど、もう起きなくちゃ。

再び目をこすり、両手を額にのせて、そのままゆつくりと目を開けた。その瞬間、予期しなかったものが目に飛び込んできた。

息がかかるほどの近距離で、わたしの顔を覗き込んでくる明るい茶色の双眸と、ぶつかった。

「やあ、ミズカちゃん」

「……っ、き……きゃあぁっ……!!」

ほとんど反射的に、わたしは思いつきり腕を振って、間近にあっ

た人の頬を一切の加減なく、殴ってしまった。……またしても。

わたしの手のひらも痛かったけれど、叩かれた人の方が、きつともつと痛かったろう。

「おー、いてっ」

けれど、平手打ちの被害者は、ひっぱたかれた頬をさすりながら、なんだか愉快げに笑っている。

「うーん、これで二度目かあ」

「すっ、すみません、イスラさんっ」

ベッドに座ったまま、わたしは深々と頭を下げ謝った。申し訳ないやら恥ずかしいやらで、顔が赤くなってるのが自分でもわかる。「ははっ、いいっていいって、気にしないで。驚かせちゃった俺が悪いんだし」

イスラさんにはこやかにそう言って、片手をひらひらと振った。

昨日ひっぱたいたのは反対側の頬を叩いてしまったので、イスラさんは「これで左右、公平だ」なんて、冗談めかす。

「でもっ、ほんとにすみませんっ！　なんだか手が反射的に動いてしまっ」

自分でも不思議なほど、体が勝手に反応してしまう。こんなこと、他の誰にもしたことないのに。

ほんとにもう、無意識的とはいええ、なんてことしちゃったんだろっ！

「加減せずひっぱたいちゃったから、痛いですよね？　ほんとにすみませんっ！　あ、湿布！　湿布ありますから、貼った方が……」

アリアさんが持ってきてくれた湿布はまだサイドテーブルに置いてある。それを取ろうと体を動かしたのだけど、イスラさんは笑ってわたしをとめた。

「いいっていいって、すぐ治るし。だからそんな申し訳なさそうな

顔しないでよ」

「でもっ」

「その通りだ。ミズカ、謝る必要などないと言ったろう」

いつの間にかやってきたのか、ユエル様が忽然と姿を現し、剣呑な顔でイスラさんの肩を掴んでいる。イスラさんは背後に立ったユエル様をちらりと振り返り見、「部屋に入る時は声くらいかける」と文句をつけた。

ドアが開けっぱなしになっていて、昨日と同じように、わたしの悲鳴を聞いて駆けつけてくれたんだろう。

それにしたってユエル様、気配がなさすぎます！ どうしていつもいつも、忽然と現れるんですか！ と、責めたいところだったけれど、驚きのあまりとっさに声が詰まってしまった。ぼかんと間の抜けた顔をして、ユエル様とイスラさんを眺めているばかりだ。

「イスラ、塵となつて消えたいのなら、いつでも希望を叶えてやるまどろっこしいことはせず、私に直接そう言え」

「ミズカちゃんみたいな可愛い女の子の手にかかって消えるのなら本望だが、おまえさんみたいな野暮な野郎に消されるなんて、ご免こうむるね」

「戯言を」

気まずい雰囲気になつてしまふのかと焦ったけれど、どうやらそこまで至らないようだ。

イスラさんはユエル様の冷淡な態度や口ぶりには慣れっこになっているようだし、ユエル様もイスラさんの冗談口を（たぶん）本気にはとらず、軽くあしらっている。

心底いがみ合っているようには見えないし、互いに反目しているようでいて、遠慮がない分、存外気の合った心友だったりするのかもれない。

二人の関係性を勝手に斟酌していたわたしの心の内を見透かしたとも思えないけれど、ユエル様はイスラさんを押しつけ、わたしの顔を覗き込んできた。

「ミズカ、イスラの厚かましい面を殴って痛かったろう？ 手は、大丈夫？」

「あの、え……ーっと……」

そりゃあたしに痛かったけれど……、そう訊かれると返答に困ります、ユエル様。

「最悪の目覚めだったようだが、少しは休まったかな、ミズカ？ まだ疲れの残った顔をしているが」

「ありがとうございます、ユエル様。大丈夫です。足も、もう痛みませんし」

ユエル様は「そうか」と応えたものの、心配そうな顔のままだった。

ユエル様の視線を受けていられず、目を逸らしてしまった。挫いた足ではなくて、なぜなのか、胸がきゅゅと締まるように痛みだして、喉元が苦しくなった。

ユエル様に心配をかけたくないのに、どうしてこんな態度をとってしまうんだろう。

自分の感情が、よく分からない。

下唇を噛み、俯いた。痛みをすり替えようと唇を噛んでも、胸の痛みは消えなかった。

「ミズカちゃん？」

ユエル様を押し返しのけ返し、再びわたしの顔を覗き込んできたのは、イスラさんだった。明るい茶色の双眸で、じっとわたしを見つめる。

「ミズカちゃん、どした？」

「あ、……いえ、なんでもありません。寝起きで、ちょっとぼつとしてしまっただけで」

わたしは首を左右に振り、笑みを作った。イスラさんは「そう？」と、ちよつと不審そうな声を返してきたけど、深くは追求してこなかった。横にいるユエル様も同様で、銀系の髪を物憂げにかきあげて嘆息し、「おまえのせいだろうが」とイスラさんに当てつけて毒づいた後、口を閉ざした。イスラさんは聞こえぬふりをして、話題

をかえた。

「実はさ、ミズカちゃんにちょっとお願いというか、プレゼントがあるんだけど」

「え？」

「これ」

イスラさんは、いったいどこから取り出したものやら、紙袋をわたしに差し出した。

「なんですか？」

わたしは首を傾げる。

「お願いで、プレゼント……って？ どういうこと？」

「これさ、ミズカちゃんに着てもらいたくって買ってきたんだ。ゼッタイ似合うと思うから、着てみてほしいんだ」

「ここにこの笑顔でイスラさんが頼み込んできた。

贈り物はもちろん嬉しかったのだけど、いきなりのことで、やっぱりちょっととまどってしまった。

困惑顔をユエル様に向けると、ユエル様は苦っばく笑っていた。遠慮せずもらっておきなさい。ユエル様の目がそう語っている気がする。

「断る理由もなかったし、わたしはありがたくそれを受け取った。

「ありがとうございます、イスラさん。あの、中を見てみてもいいですか？」

「もちー！ てゆーか、今すぐ着てみてよ」

「え、今……ですか？」

「うん。もうさあ、それ着たミズカちゃんが見たくてそっこーで帰ってきたんだよね。おっと、ユエル、心配しなさんな。下着でも水着でもねーから」

「……………」

ユエル様は眉間に深々と皺をよせて、イスラさんを睨んでいる。もちろんイスラさんはユエル様の剣呑な目つきなど、まったく気に留めていない……どころか、ユエル様のそういった反応を見、面白

がるきらいがあるように思う。イスラさんは、そういった茶目つ気というか悪戯心のある人のようだ。そういうところはユエル様とよく似ている。

ユエル様の機嫌を損ねかねない軽口をさらりと言えてしまうイスラさん。非友好的な態度を崩さないのにイスラさんを拒絶しきれないユエル様。

絶対に違つと否定するだろうけど、気が置けない友人、なのじゃないかしら、ユエル様にとってのイスラさんって。

「で、靴も用意したから。ここ、置いとくね？」

これもまた、いつたいどこから取り出したものか、手品並みの唐突さと早さで、イスラさんは白い箱をわたしに見せたかと思うと、ぱつと蓋をあけて、中から蝦茶色のショートブーツを取り出した。

「あ、なんなら俺、着替え手伝つてあげよつか？　って、あつちいつて、ユエル！」

「……………」

ユエル様は眉をきつくしかめ、無言でイスラさんの首根っこを掴むようにして、手を押し当てている。力を入れている様子はないけれど、“力”を使っているのが分かった。加減はしているのだろうけど…………。

「冗談に決まつてんだろ。いちいち本気にとるなよ！　ほんと余裕ねーな」

「ミズカ、嫌なら着替えなくてもいい」

ユエル様はまだイスラさんの首根っこを掴んだまま、少しだけ表情をやわらげてわたしの方に視線を移した。

「それに、体がだるいようなら、無理に起きなくてもいい。イスラの言うことなど無視してかまわないから」

「いつ、いえ、もう起きます。それに何か飲みたいから…………。あの、それよりユエル様」

イスラさんが苦しそうです、手を離してあげて下さいと言おうとしたのに、ユエル様は「それならば」と言葉を被せてきた。ユエル

様はイスラさんの首から手を離さないし、おそらく“力”も当てたままだ。イスラさんは痛み顔に顔を歪ませている。

「下のリビングで待っているが、一人で、降りて来られる？」

「はい、大丈夫です。着替えて、すぐに行きます」

「急がなくてもいい。もし足が痛むようなら、呼び鈴を鳴らしなさい。くれぐれも無理はせず、慌てないようにね、ミスカ」

「はい」

「それじゃあ、先に行っているよ、ミスカ」

ユエル様はイスラさんの首根っこを掴んだまま、踵を返した。イスラさんはうつとうしげにユエル様の手を払いのけると、わたしに笑いかけ、「じゃ俺も、下で待ってるからね」と、手を振った。

わたしは、イスラさんを引きずっていくユエル様の背中を、扉が閉まるまで見つめていた。さっきより気が楽になったのは、イスラさんのおかげだ。

だから、贈られた服を着て見せることで喜んでもらえるのなら、いくらでもって思った。

とはいえ、……とんでもない服じゃないのだけど。

わたしはおそろおそろ、イスラさんから手渡された紙袋を開けた。

12・コスチューム

イスラさんから贈られた服は、とんでもない服ではなく、クラシカルな雰囲気ワンピースだった。「とんでもない服」がどんなものかは、想像がつかなかったのだけど、ともあれ、着てみるのに戸惑いのある服ではなく、その点は一安心だった。

着方が難しい服でもなかったから、簡単に着られた。

着替えたものの、似合うのかどうかは自分では判断がつかない。

ともかく、身なりを整えてから階下の居間に向かった。わたしが降りてくるのを、皆が待っているのかもしれないと思い、なるべく急いで。

リビングには、ユエル様、イスラさん、アリアさん、イレクくん、全員が揃っていた。久しぶりの再会に会話が弾んでいるようだった。ユエル様を除いて。

リビングのドアは開け放たれていて、こそつと覗きこんでから足を踏み入れた。一応、「失礼します」と声をかけて。小声すぎて聞こえなかったろうけど。

そんな中、アリアさんが一番に、わたしがリビングにやってきたのに気がついた。アリアさんは「まあ！」と声を上げるや駆け寄ってきて、出逢いの時と同じように、いきなりぎゅっつと抱きしめてきた。

「……っ！」

「やったもっつ、ミズカちゃんったらなんて可愛いのっ！」

この日、アリアさんは短めの丈のＴシャツとカプリパンツという軽装だ。腕を伸ばすと素肌が覗くほど短い丈のＴシャツは、豊満な胸がより強調されているようで、ついそこに目がいつてしまう。その、「つい目がいつてしまう」部分に顔を押しつけられて、心地い

いやら、気恥ずかしいやら、反応に困ってしまふ。

「ミズカちゃん、それ、とってもよく似合ってるわ!」

そう言って、アリアさんは体を離してくれた。目を輝かせて、わたしの全身を見やり、感嘆の声を上げた。ユエル様、イスラさん、イレクくんの視線も一斉に集まり、なんだかとても恥ずかしい。

「父さ……イスラですね、あの服を贈ったのは?」

呆れたようなため息をついて言ったイレクくんに、イスラさんは親指をたて、自慢げに応えた。

「おう。どうよ、ミズカちゃんに似合ってるだろ?」

「ほんと、可愛いわあ。そうねえ、どうせなら髪もこう……二つに分けて編んでみたらもつと可愛いんじゃないかしら」

「そうだ。これこれ、オプシヨン。白レースのカチューシャもつけたら可愛いんじゃないかと」

「あら、いいかも。似合うかも」

アリアさんはイスラさんがさかさず差し出したカチューシャを嬉々として受け取ると、早速わたしの頭に装着し、髪も整えてくれた。「……………」

迷惑なんてことはちつともないんだけど、どのような反応を示してよいのか分からず、困ってしまう。

それにユエル様の反応も気にかかった。だって、さっきから黙ったままで、一言も声をかけてくれない……。

ためらいつつも、わたしは一人がけのソファアに深く腰を沈めているユエル様に目を向けた。

ユエル様は僅かに眉をしかめ、驚きつつも可笑しがっているような、けれどちょっと呆れてもいるような、そんな複雑な顔をしていた。不快げな顔をしてはおらず、ホッと胸を撫でおろした。

ユエル様の反応を気にかけていたのは、わたしだけではなかったみたい。

「申し訳ありません、ユエル様。イスラの悪ふざけにミズカさんを巻き込んでしまって」

すまなそうな顔をして父親の所業を謝罪するイレクくんは、ユエル様は苦笑で答えた。

ユエル様はため息をついてから、苦虫を噛み潰しているような顔を、再びこちらに向けた。

そして、わたしを見つめる。

目があつて、途端、胸がドキドキと早鐘を打った。

ユエル様の深緑色の双眸に、イスラさんから贈られた衣服を着ているわたしは、どんな風に映っているんだろう。

いま、わたしが着用している服は、イスラさんの説明によると、

「メイド服」という「制服」らしい。

こげ茶色のワンピースの総丈は、膝よりやや下の長さで、裾の部分に白いレースが施されている。袖の付け根部分はやや膨らんでいて、長袖の先は折り返されていた。そこにも白いレースが縫いつけられていて、高めの衿にも控えめなレースが施されている。肩がけの白いエプロンは、肩部分も裾部分も、ギャザーの寄せたレース仕様になっている。装着されたカチューシャとエプロンはおそろいらしい。

メイドというのはつまり「女中」のこと……よね？

女中の制服にしては、ひらひらとしすぎて非機能的で、掃除もしにくいと思うのだけど。

そんなことをぼんやりと頭の隅で考えている間に、アリアさんはわたしの肩より少し長めの髪を二つに分けて編み、結んでくれた。た。

「もうっ、ミズカちゃんったら、お人形さんみたいで、ほんとに可愛いわ！ ねっ、そう思うでしょ、ユエル？」

「ナイスチョイス、俺！ どうよ、ユエル？ いい感じじゃね？」

アレだ、アレ。なんだっけ、萌えとかいうヤツだ」

アリアさんとイスラさんは、わたしを間に挟み、大喜びではしゃいでいる。イレクくんはソファーに腰かけたままこちらには来なかったけれど、「よくお似合いです」と笑顔を向けてきた。

「クラシカルな雰囲気かミズカちゃんには合うだろうなとこれを選んできたけど、正解だったな」

アリアさんとイレクくんの贅辞に、イスラさんはほくほく顔だ。ちなみに、わたしに「メイド服」を贈ってくれたイスラさんはいつと、「メイド」とか「萌え」とかとは縁のなさそうなラフな格好をしている。

Tシャツにジーンズという軽装なのだけど、Tシャツに描かれているプリント文字がいかにもイスラさんので可笑しかった。

黒地に真つ赤な毛筆描きで、背中に「送り狼」と。

「送り狼」って、イスラさんはその意味は知っているのかしら？

「いや、俺さ、漢字はまだいまひとつ読めないから、実のところ、意味はよくわかんないんだよね。で、他にこんなTシャツも勧められて買ってみた」

と言つて見せてくれた真つ青なTシャツは、やはりプリント文字があつて、「軟派一筋」。

イレクくんは呆れかえり、「まったく、呆れますね」と呟き、その後「まあ、似合いの言葉ですが」と揶揄した。どうやらイレクくんは漢字が読めるらしく、意味もわかるようだった。

わたしはというと、「送り狼」と「軟派一筋」の意味はなんとなくわかるけれど、イスラさんの言う「萌え」という言葉の意味が今一つ理解できなかつた。わたしの知っている「萌える」の意味とは、なんだか少し違う気がした。意味を訊いてみると、

「や、俺もよくわかんねーけど。ミズカちゃんみたいな可愛い娘を“萌え”とか言うらしいぜ？」

イスラさんはなんとも曖昧な返答をくれた。
「現代用語ですね。一部の方々が頻繁に使う俗語、といつていいでしょう」

イレクくんが横から補足してくれた。「僕も、詳しくはありませんが」と苦つばい笑みを目元に浮かせて。

そんなことはどうでもい言つたといった風に、イスラさんは話を戻

した。

「他にもロリータ風とか、ネコ耳とネコ尻尾付きのワンピースもあったんだけど、ミズカちゃんにはやっぱこれでしょと思って」

「……はあ」

イスラさんは、日本人のわたしでもよくわからない流行にうつかりのせられてしまっているみたいだ。イスラさん達は、もしかしたらけっこう長い期間日本に滞在していたか、頻々と来日していたのかもしれない。三人とも、日本語がとても上手だし。

それにしても、こういう……何だかよくわからない情報や流行に慣れきってしまうところも、ユエル様とイスラさんはちよつと似てる……なんて言ったら、二人とも真つ向否定するんだろうな。

それはそうと、「メイド服」をいただいたお礼をまだちゃんと伝えてなかった。遅まきながらそれに気付き、急いで謝辞を述べた。

「あの、イスラさん、ありがとうございます。喜んでもらえたのならよかったです」

「うん、俺こそすつごく嬉しいよ、ありがとね、ミズカちゃん」

そう言って、イスラさんは満面の笑みを浮かべた。

「やー、ほんと贈った甲斐があつたつてもんだぜ！ よし、次は口リ系でいこう。ミズカちゃんにめっちゃ似合いそうだし！ 不思議の国のアリスとかオズの魔法使的なのやつで何点かいいのあったんだよね。それまた買ってくるから、お楽しみに！」

「えっ、えーっ……と」

お楽しみにと言われても、「はい」とは頷きがたく、無下に断るのも失礼だろうと、言葉を濁した。

アリアさんは「それは楽しみね」と嬉しげに微笑み、わたしの顔を覗き込んでくる。

「ミズカちゃんって、ついついじりたくなっちゃう小動物系の可愛さよね。目もくりつと大きくて、見つめられるときどきするわ」「そんな……」

見つめられてときどきするのは、アリアさんこそだと思う。

優麗な微笑みはまぶしいくらいだ。まじまじと見つめられて、赤面してしまった。

「イスラもアリアさんも、そろそろミズカさんを解放してあげたらどうです？ 困ってらっしゃいますよ？」

イレクくんは助け舟を出すのがとつても巧みだ。本日二回目の船出に、わたしはまた助けられた。

イスラさんとアリアさんに挟まれて、迷惑とかじゃないのだけど、ちよつと困ってしまっていた。ユエル様に声をかけるきっかけがかめなくて。

「あ、あのっ」

わたしはようやくユエル様の方に体を向け、声を発した。

ユエル様は体を少し傾けて、頼杖をついている。物憂げな様子で、けれどわたしをじつと見つめていた。目が合うと、少し目をやわらげてくれた。

ユエル様の友人に服を贈られ着てみせたことで、その友人……イスラさんには喜んでもらえたけれど、ユエル様はどう思ってるんだろう。訊くべきなのかな、「どうですか？」って？

でも、どう言って訊けばいいのかわからない。わからないし、訊く勇氣もなかった。

だから、発した台詞はまったく別のことだった。声が、ちよつと上擦った。

「あ、あの、ユエル様、お茶をお持ちしましょうか？」

「……」

「皆さんの分のお茶も、お持ちします」

そしてわたしは、ユエル様の了承も得ず、逃げ出すかのように早足でリビングから出て行った。

深い緑色のまなざしを背中に感じながら。

13・過現

わたしは色々と自覚が足りないのだと思う。迂闊で、鈍い。

ユエル様にも、「ミズカは基本的に敏いのだが、思いがけず鈍感なところがあるね」と苦笑されたことがあった。

何事にも、気付くのが遅すぎるくらいがある。それは自覚しているのに……。

足の力が抜け、リビングを出てキッチンへ向かうその途中、へたり込んでしまった。

眩暈を覚え、目の前がぐらりと歪み、立っていられなくなった。

足元が崩れ、その場に膝をついた。

こうなって、やっと気付く。

「……っ」

こんなこと、以前もあった。しかも一度じゃない。何度も同じことを繰り返してきた。

前兆はあったはずなのに、それに気付かなかった。……ううん。

それから目を逸らして、気付かぬふりを決め込んだんだ……。

「ミズカ」

名を呼ばれ、ハツとして顔を上げた。

「……ユ、エル様」

片膝をつき、わたしの腕をそつと掴んだのはユエル様だった。眉宇をしかめ、厳しい面持ちでわたしを見つめている。

「だから言っただろう、くれぐれも無理はするなと」

「……足は、もう痛くないです」

「足ではなくて」

「……」

ユエル様はわたしの手を取った。そしてわたしの指先を、そつと自分の首筋にあてがう。

「渴いているのだろう？ 飲みなさい」

「……………あ、の……………」

「限界まで我慢をするから立つてもいらなくなるんだよ。いつまでたっても慣れないんだね、ミスカは」

「……………すみません」

ユエル様の目を見ていられず、俯いた。ユエル様の首にあてがわれた手に、無用の力みがこもる。指先から、生気がゆっくりと流れ込み、全身に熱が伝わっていく。

わたしに生気をくれる時、ユエル様の緑色の瞳はさらに深みを増して美しく熱帯びる。深緑色の燠火のように麗しく、ひどく悩ましい。

「あ、あの……………すみません、もう、いいです。ありがとございませす」

いつまでたつても慣れない、そのことが申し訳なかった。

生気を飲むことに対するとまどいはなかなか消せない。それをユエル様は責めたりはせず、かえってすまなそうな顔をする。だから早く慣れなくちゃと思うのに、気後れして自分からはうまく飲めず、いつだってユエル様の手を煩わせてしまう。

「ミスカ、立てる？」

「あ……………、はい。すみません」

ユエル様は手を離さず、わたしの体を支えるようにして立ち上がらせてくれた。

「私こそ、悪かったね」

「……………え？」

「ミスカが慣れないのは仕方のないことだ。私がもう少し気をつけてあげるべきだった。限界まで我慢させて、悪かったね」

「いつ、いえっ、そんなんっ！」

思いがけずユエル様の謝罪を受け、わたしはうろたえた。

以前、今と同じように渴ききって倒れこんだ時は「渴ききる前に自分で気づきなさい」と窘められたのに……………。どうして急に、「悪かった」なんて。

「いったいどうしたの、ユエル様？ 何か……違う。今までのユエル様と、何かが違う。違和感が拭えない。」

着族の話をしてから、ユエル様のわたしに対する態度が少し変わってきている。気のせいかもしれない。ふと見せる物言いたげで差し迫ったような表情は、いったい何なのだろう……？

「ミズカ、もう少し飲んでおきなさい」

わたしの手を握り直して、ユエル様が言った。

「まだ足りないだろう？ 今夜あたり天候が崩れるから、もっと飲んでおいた方がいい」

「でも、ユエル様は大丈夫なんですか？」

「私なら大丈夫だ。毎日新鮮な生気を飲んでいるから」

「……………はい……………」

促されるまま両手を握り、そこから生気を飲ませてもらった。

生気を分けていただいているその途中、「あらあら」と背後から声がかかった。振り返るとそこにアリアさんがいた。

「ずいぶんと色気のない飲み方なこと」

「色気？」

訊き返したのはユエル様だった。

わたしはというと、訳もなく赤面してしまい、その顔をユエル様に見られなくてホッとしていた。

「なんて色気のない生気の飲ませ方かしら、とって。いつもそうなの？」

「余計なお世話だ」

思ったとおりの返答だったらしく、アリアさんはクスクスと可笑しげに笑う。

ユエル様は眉をひそめ、洗面をつくった。でも、わたしの手は握ったまま。

生気はもうたくさん飲ませただいたから、手を離してくださいとも言えず、ちょっと困ってしまった。生気のせいではなく、手や頬が熱い。

「ふふ。ユエル、変わったわねえ。それとも相変わらずと言つべきかしら？」

「……………」
「変わったけれど、相変わらず…………？」

わたしはユエル様とアリアさんを繰り返し見やって、首を傾げた。

それに気付いて、アリアさんは笑みを深くした。

「ユエルの素直じゃなく不器用なところは相変わらず。でも、ずいぶん変わったのよ。そう、むかーし昔のユエルとはね。顔つきまで変わっちゃって、驚いたくらいよ？」

「そう……………なんですか？ 顔つきまで？」

「反抗期の子供みたいに捻くれて顔をしたのに、とっても柔和になつたわ。イスラもびっくりしてたもの。ちよつとは成長したみたいだなんて」

「アリアやイスラの言うことは、信用しない方がいいね、ミスカ」
「耐えかねたように、ユエル様が口を挟んできた。」

「特にアリアは物事をオーバーに言い過ぎる。それに、そんな昔のことをいちいち憶えている連中じゃないからね」

「はあ……………」

たしかに「昔」の年数単位が、一年、二年という単位じゃなさそうだから、憶えていなくても当然かもしれない。アリアさんの言う「むかーし」って、いったいどれくらい前のことなんだろう？

「あら失礼ね、ユエル。イスラはともかく、あたし、記憶力はいいほうよ？ なんなら話して聞かせてあげましょうか、ミスカちゃんに。ユエルのあんなことやそんなことを？」

「同じように、私も思いたさせてあげようか、アリア？ あんなことやそんなことを。ミスカに聞かせても良いのなら？」

焦る様子もなく、ユエル様は不敵に笑ってアリアさんに言い返した。

「ま、いやね。可愛げのない子。そういうところは相変わらずなん

だから」

アリアさんは子供っぽく拗ねて、そっぽを向く。

「顔立ちだけじゃなくって、そういう不遜な性格も母親譲りね」

「アリアさん、ユエル様のお母様をご存知なんですか？」

アリアさんの付け足した言葉に、速攻で反応してしまった。

ユエル様はご自身の過去の過去を詮索されるのを好まれないようだったから、家族のことなど、ほとんど聞いたことがなかった。母親のことも、銀髪緑眼の美しい女性だったくらいにしか聞かされていない。ユエル様が話してくださらないのなら、わたしから聞くべきではないと、我慢してた。でも、知りたい気持ちはやっぱりあって、出れば知りたいと、ずっと思ってた。

「ユエルの母親？ ええ、もちろん知ってるわ。ユエルが生まれる前からの友人だったもの」

わたしはまじまじとアリアさんを見つめた。

「ユエルの母親は、あたしが初めて出逢った生殖者だったわ。彼女の方がずっと年上だったのだけど、同じ生殖者で、生殖の時期も重なっていたから、相談相手になってもらってたの。子供を産んでからもずっと付き合いは続けて、大切な友人だったわ。……もう、いなくなってしまうたけれどね。あらあら、ミズカちゃん、そんな哀しそうな顔をしないで？」

「……すみません」

ユエル様の、わたしの手を握る手に力が入った。少し汗ばんでいるように感じるのは気のせいかもしれないけど、わたしは無意識的にユエル様の手を握り返していた。

「人のこと言えないけれど、ユエルの母親は子沢山だったのよ？ だから、生きているのかどうかはあたしには分からないけど、ユエルには兄弟がたくさんいるはずよ」

「そうなんですか？ 初耳です、ユエル様」

顔をユエル様の方に向きなおした。

「……そうらしいね。会ったことがあるのは二、三人だけだから、

兄弟が全員で何人いるかなど、私もいちいち把握していない。それに兄弟の父親が全部同一人物とは限らないからね」

「……………」
言葉に詰まってしまった。もしかして、言いたくないことをユエル様に言わせてしまったのだろうか。別段不機嫌顔ではないけれど、淡々とした口調は他人事を話すみたいだ。

聞いてはいけないことだったのかなと、後悔した。

「父親のことは、しばらく一緒にいたから憶えているが」

ユエル様は嘆息した後、語を継いだ。声に険はなく、微風がすすめていくような静かな声音だった。

ユエル様は、わたしが「すみません」と言うのを予測して、先回りをしたのかもしれない。そしてユエル様は半ば強引に話をすり替えた。

「アリアにしたって、あれだけ生んでおきながら、一緒にはいないだろう？ 兄弟達もそれぞれ別の場所にいるのだし」

ユエル様の言に、わたしは「そういえば」と思い立ち、再びアリアさんに視線を戻した。

訊いてみたかったことだった。

アリアさんも生殖者なのだからお子さんがいて、旦那様もいるはず。旦那様……つまりアリアさんの眷族は今現在どうしてらっしゃるのか、と。

アリアさんは澄んだ青い双眸を優しく細めて、語ってくれた。

「ダーリンとは、生殖者になったと気付く前に出逢ったの。色々とおったけれど、あたし的には生殖者になれてラッキーだったわ。おかげで彼と永い時をずっと一緒に過ごしてこれたのももの。でももう二百年近く経つのかしら？ 彼ったら、先に逝っちゃったの。彼以外の眷族はいなかったから、今は独り身よ。生殖の期限は過ぎちゃったから、もう眷族は持てないわ」

あっけらかんとした口調でアリアさんは言うけれど、やはり淋しそうだ。

アリアさんがどれほど“眷族”だった旦那様を愛してらっしゃったのか、切なくなるくらいに分かる。切ないけれど、アリアさんの微笑みは優しく穏やかで、悲しい気持ちにはならなかった。

「もう眷族は持てない」というアリアさんの言葉に、わたしは改めて“眷族”の存在理由を知りたくなかった。理由というか、存在意義…… だろうか。

いまひとつ理解していない、“眷族”のこと。それをもっと詳しく知りたかった。

だけどユエル様がいる前では訊きづらかった。またユエル様に突き放されたらどうしようかと不安が先に立って、口から出かかっていた質問は、再び喉の奥にしまわれた。

代わりに別のこと……アリアさんのお子さん達について尋ねてみた。お子さんは、なんと五人いらっしやるとのこと。わたしはあんぐり口をあけ、まじまじとアリアさんを見つめた。

「五人とも生きてはいるみたいね。元気でいるようだけど、いちいち連絡を取り合ったりはしないから、どこにいるかまでは分からないわ。兄弟でつるんでた時期もあったみたいね」

ちなみに、男の子四人と女の子一人、だそうだ。

アリアさんはそのぷっくりとした唇に人差し指を当て、気紛れな少女のような仕草で小首を傾げた。

「五人とも、あいにく生殖能力は持たなかったけど、吸血鬼らしく好き勝手にやっつてるでしょう。生殖能力を持たなかったからこそ、好き勝手やっつてるとも言えるわね。まあ、吸血鬼らしくすぎて退治されちゃったりなんかしないよう注意はしておいたけれど、どうかしらねえ」

「そうなんですか……」

気の利いた言葉の一つも出ず、ぼんやりとした声を発した。

話を聞くだけでは実感はわきにくいけれど、やっぱり驚いた。

アリアさんは見た目年齢……二十代半ばから後半といったところで、五人の子持ちにはとても見えない。

お話を伺う前からユエル様より年上でいらっしやることはなんとなく察していたけど、ユエル様のお母様とご友人だったということ、いったい、お幾つでいらっしやるのだろう。さすがにそれは訊けなかった。……知りたくもあり、知るのがちょっと怖い感じもする。

でもわたしだって、見た目は十代だけど、生まれてからは百年近くが経つてて、「何歳なのか」と問われたら、きつと戸惑ってしまうだろう。

ユエル様の眷族になって、もう随分と経つ。そろそろいろんなことに慣れ、ちゃんと自覚しなくちゃいけない。ユエル様を困らせないためにも！

「あ、あの、ユエル様！ わたし、お茶淹れてきます！」
唐突に、切り出した。ユエル様は少し面食らったような顔をし、目を瞬かせた。

「ん？ ……ああ」
ユエル様から手を離し、わたしは意気込んでみせた。

「すぐに用意しますから、リビングの方で待っててください。アリアさんも！」

「ミズカ、もう……」
「もう大丈夫です！」

こぶしをつくって両腕を上げ、元気ですというポーズを見せて見せた。

するとユエル様は、ちょっと呆れたようにため息をついて、やわらかな笑みを浮かべた。そして、

「その服、なかなか似合っているよ、ミズカ。その格好で給仕されるのも、悪くはないかな」

少しからかうような口調で、そう言った。

わたしが耳まで赤くなつたのは、至極当然のこと！ だって、目も眩むような艶然とした微笑を向けてくるのだもの！

もうっ、ユエル様、勘弁してください！

照れ隠しも手伝って、わたしは虚勢を張って言い返した。

「わたし、女中ですから！ メイド服が似合うのは当たり前なんです！」

その一言が、ユエル様の眉目を曇らせてしまうなんて思いもせず。

14 予兆

雨は、夜半に降り始めた。

早めに床に就いたのだけど、なかなか寝付けなかったうえ、ようやく眠れたと思ったら、深夜に目が覚めてしまった。

窓ガラスをたたく雨音と、背中に走る痛み、そして遠い日の“記憶”……

「……」

安らかざる眠りから覚めて、わたしは安堵のため息をこぼした。背が、微かに痛む。痛みはすぐに治まったけれど、体が酷く重かった。

電気スタンドに手を伸ばし、スイッチを入れて時間を確かめた。卵を横に置いたような形のクリーム色の目覚まし時計の針は、一時をさしていた。

両手で顔を覆い、背中を丸めた。

……憶えてなくて、よかった。

一瞬過ぎた夢の記憶は、いつまでも脳裏に留まっていることはなかった。

憶えていないのに、どうして？ 酷い悪夢を見ていた気がする。動悸がして、冷や汗までかいている。背中への痛みは、胸が痛むよりもっと切実に……現実的にわたしを襲う。

篠突く雨の音が、耳につく。

室温の低さに体温が奪われていくようだった。

何か、温かいものでも飲もう。

ユエル様から生気をもらったばかりだというのに、渴きが癒えない。

それはきつと雨のせいだ。

そう思っていたかった。

ユエル様の眷族になってから、わたしはなぜか雨に弱くなってしまった。雨、というより湿気、かな。

そういえば、吸血鬼って「流れる水」が弱点だって本で読んだことがある。

わたしの場合でいえば、流水自体は平気だ。だから蛇口から流れ出る水に驚いて腰を抜かすなんてことはないし、小川の辺で日向ぼっこをするのは好きだったりする。

わたしのご主人様であるユエル様も、雨が苦手なようだ。

ユエル様は、

「私の力の属性と反するものだから、こればかりはいたしかたないね」と述懐していた。

苦手というだけでわたしほどに弱くはないから、雨の日でも普通に過ごしている。億劫がって外出したからないというだけ。

だけど。

ユエル様と出逢った……というより見つけた……あの日は、雨だった。雨の中、ユエル様は行き倒れていたのだ。青ざめて、いかにも息も絶え絶えになって憔悴しきってた。

どうしてだったのかしら？

これも、常々疑問に思っていて、そして訊けずにいたことだった。だってあれ以降、ユエル様が具合悪そうにしているところを見たことがない。

生氣不足のせいで前後不覚になり、道端で昏倒してしまうほど弱りきってしまうなんて、今じゃ想像もつかない。

今日みたいに、湯ききってしまったって倒れこんでしまうのは、いつもわたしの方だ。

半袖のパジャマの上に薄手のカーディガンを羽織り、寢室を出た。

廊下の小窓に映っているのは、濃紺の闇。窓ガラスはしとどに濡れ、幾筋も雫を垂らしていた。周囲に人家がないせいで外灯もなく、森は深い夜闇に包まれている。枝々をうつ雨音が暗い森に響き、さらに閉塞感を募らせていた。

身を竦ませたのは暗闇が怖いからではなく、気温の低さのせい。夏とは思えないほど肌寒い。昼夜の気温差は、こうした高原地特有のものなのかもしれない。

深夜ということもあり、足音を忍ばせて廊下を歩き、階段を下り、キッチンに向かった。

階段を下りたところで、ふと、リビングから明かりがもれているのと、話し声があるのに気がつき、足をとめた。

ユエル様と……イスラさんの声？

キッチンへ向けていた体を、リビングの方へ向け、そろりと近寄った。

ドアが少しだけ開いていて、そこから明かりと二人の話し声が漏れていた。

「ユエルさあ、おまえいったい何考えてんの？」

「何とは、何だ」

呆れたような声のイスラさんに、ユエル様は相変わらずつつけんどんに応えている。声だけでも、二人の表情が想像できる。

「どういう了見なんだ？ まあ、おまえさんらしいっちゃらしいが、ちよつとひでー気もするな。焦らすのも程度つてもんがあるだろ」

「余計なお世話だ」

「だって、おまえ、もう期限迫ってるじゃねえの？ だから俺達を呼んだんだろ？」

「おまえを呼んだ覚えはない」

「なんだよ、つれねーなあ。心配して来てやったつてのによ」

「心配？ 嘘をつくな、嘘を」

「まあ、実際のところはイレクが会いたがってたってとこなんだけどな。イレクが言ってたぞ？ 余裕なさそうだったさ」

「……………」
わたしはドアの影に潜むようにして立ち、息をひそめ、耳をそばだてていた。

でも、これって立ち聞き……盗み聞きじゃない。
だめだよこんな、失礼なこと！ 早くここから立ち去らなきゃ！
と思うのに、体が動かない。

ユエル様とイスラさんの会話が気になって仕方がなかった。

「それにしても意外だな。昔はけっこう手当たりしだいで、無節操な方だったのによ？」

「人聞きの悪い。第一、おまえほどではない」

「そっちこそだろ？ 人を浮かれ男みたく言うなよ」

「事実だろう、浮かれ者なのは」

「ユエルにだけは言われたくないなあ。言つとくが、眷族に関してだけは、おまえにあれこれ突っ込まれる筋合いはないぜ？」

不意に、イスラさんの声調子が鋭くなった。

「ユエル、おまえさ、もしかして別の相手探してんの？ 占いとかなんとかいって物色中かよ？ ミズカちゃんのこと……」

え、なに？ 別の……相手……？ それに、わたしのことって……？

イスラさんの言葉にドキリと鼓動が跳ねた。

どういう意味……？ 先を聞きたくて、つい身を乗り出してしまった、その時だった。

リビングの扉が大きく開けられ、照明の光が影を押しやった。同時に、わたしも光の中に身を晒すことになってしまった。

「……っ！」
またしても鼓動が大きく跳ねた。途端、顔だけじゃなく、全身が熱くなった。

ドアを開けたのは、ユエル様だった。わたしの立ち聞きに気がついて席を立ったのだろう。

「ミズカ」

ユエル様は嘆息し、眉をしかめてわたしを見つめる。怒っている風には見えなかったけれど、気まずくて、目を合わせられない。

「すっ、すみませんっ、あのっ、わ、わたし、あの……っ」

土下座をして謝罪したい気分だ。声が、どうしようもなく上擦っ
てしまう。

肩をすばませて、ひたすらに謝った。

「すみません、あのっ、わたし、あの立ち聞きなんてするつもりは
なくて……っ」

嘘だ。

嘘だから、やましい気持ちに苛まれて、ユエル様の顔を見られな
かった。

「ミズカ。顔を上げなさい」

「……っ」

「ミズカ」

「はいっ」

ユエル様の平静な声が頭上に落ち、わたしは委縮したまま急いで
顔を上げた。

ユエル様はまたひとつ、小さなため息をついた。

「別に怒ってはいないよ、ミズカ。だからそう怯えなくてもいい。

……だが、そうだな」

ユエル様は肩越しに振り返り、わたしに向かってにこやかに手を
振っているイスラさんを見やった。

今度こそ呆れたように深いため息をつき、ユエル様は力なく肩を
落とした。それからまたわたしの方に向き直り、表情を和らげて微
笑みかけた。

「ミズカ、立ち聞きをしていた罰として、ブランデーと新しい氷、
それからワイン……あのドイツワインがいいな。それとワイングラ
スを二つ、持ってきて」

「はっ、はいっ、分かりました、すぐにお持ちします！」

「ミズカ、慌てずにね。また躓いたりすると、せっかく治った足首

を痛めるよ?」

「は、はいっ」

ユエル様のからかうような笑みにちよつと安心したわたしは、慌てずにと言われたもの急いで踵を返し、小走りになってキッチンへと向かった。

リビングから少し離れたところで一旦足を止め、ふと肩越しに振り返ってみると、ドアノブを掴んだままユエル様はまだそこにいてわたしのことを見ていた。深緑色のまなざしが、わたしを捕らえている。

わたしを着族にしたあの日の、あの時の……哀しげな色と似ている気がした。

胸が早鐘を打って、頬が熱りだした。

頭を左右に降り、脳裏に焼き付いている深緑の切なげなまなざしを消そうとした。けれど、うまくいかない。それどころか頭の中がますますユエル様でいっぱいになって、息が詰まるほどだ。

どうして? 何がこんなに苦しいの?

ユエル様を見ていると……見つめられていると、苦しくて堪らなくなる時がある。

どうしてなのかわからない。けれど、その苦しみは「いけない事」だという気がしていた。だからなるべく気に留めないようにしていたのに。

それなのにまた苦しくなってしまった。しかも、今までにないほどの苦しさと胸を締め付けてくる。

わけがわからず混乱して、わたしはまた向き直り、駆け出した。胸が締めつけられる。そして、鼓動の高まりに呼応するように、背がズキズキと痛みだした。

その痛みは、忘れてしまっていることに対しての“罰”のようだった。

忘れている……? 何を……? 思いだせない。……思いだした

くないような、けれど忘れてはいけなかったことのような。
……そう、たしかにわたしは大切な何かを忘れている。

眠っていたはずの記憶の底から、冷たい断罪の声がした。

…… オマエノヨウナ、イヤシイモノガ、……ミノホドシラズ

ナ……

……サレル、ハズガ、ナイ……オマエナド、ダレニモ……

その声は、どことなく亜矢子さんに似ている気がした……

15・誘い水

大急ぎで居間へ戻ったわたしを、イスラさんが「こっちこっち」と手招きをし、笑顔で迎えてくれた。

竹製の小椅子に座っているイスラさんは、空になったブランデーの瓶を振っている。

「おかえり、ミズカちゃん」

ほんのりと頬が赤らんでいるけれど、酩酊している様子はない。だけど、あのブランデーは、たしかまだ半分以上残っていたはず。

……全部、しかもロックで飲み干しちゃったのかな、イスラさん……一人で？

「お待たせしました。ワインはユエル様、ですよね？」

空いたワインの瓶がテーブルに置いてある。これも半分以上残っていたはずのロゼのワインなんだけど、ユエル様一人で飲み干してしまっただけらしい。

下戸の吸血鬼なんて様にならないかもしれないけど、お二人とも……飲みすぎなんじゃあ……。

「それほどでもないよ、ミズカ。このくらいは嗜む程度というものだ」

「ユ、ユエル様、考え読まないでください」

ユエル様は一人用のソファアに深く腰かけ、ゆったりと足を組んでいた。そしてわたしにやわらいだ笑みを向けてくれている。

「私の顔と酒瓶とを見比べて、そうしかめっ面をされてはね」

「それ、は、その……、だ……、だ……」

「心配せずとも大丈夫だから。この程度はどうということもない。正気は保っているよ、常にね」

「……」

ユエル様は黒絹のナイトウェアの上に黒地のガウンを羽織っていて、その肩先に銀の髪が流れている。なんとも艶めいた雰囲気だ、

酒気帯びのせいでさらに匂い立つような色香がある。

いつも以上に艶美な微笑を向けられ、とても平静ではいられなかった。

きゅうつと胸が締めつけられて、酔ってもいないのに顔が赤くなってくる。……正気でいられないのは、わたしの方だ。

胸の痛みに耐えかねて、わたしはいささか強引に話を転換させた。

「あ、あのっ、イスラさんは、ロックですよ？ おつぎします」

「お、ありがと、ミズカちゃん」

今日イスラさんが贈ってくれた「メイド服」は着用していないけれど、メイドらしく給仕をしようと居ずまいを正した。けれどユエル様がすかさず口を挟んできた。

「ミスカ、イスラに構う必要はない。イスラも、何ちゃっかりグラスを出している。自分で注げ。ミスカ、こちらへ。そこに座りなさい」

「え、えつと……」

不機嫌そうなユエル様の口調に、わたしはちょっと身をすばませた。

「おいおい、そう脅すように言うんじゃないよ、ユエル。ほんと余裕ねえのなあ。あ、いいよ、ミスカちゃん、セルフサービスらしいから、自分で入れるし」

「……はい」

にこやかに笑って、イスラさんはわたしの手から新しいブランドーを受け取った。

「お、これ、俺の好きなやつだ、カルヴァドス。ありがとね、ミスカちゃん」

カルヴァドスはフランスのノルマンディー地区で造られる、リンゴを主原料とした蒸留酒だそうだ。お酒には詳しくないし、飲む機会もあまりないので、その味がいか程のものかは分からない。とりあえず高級そうで美味しそうだったから持ってきたのだけど、イスラさんのお好きなお酒のようでよかった。

ホツとしたのもつかの間、少々不機嫌な様子で、ユエル様が横やりを入れてきた。

「ミズカ、イスラに持つてくるのなら安酒で十分だ。……いや、私が指示しなかったのがいけないのだが」

「で、でもユエル様、安酒は一本も置いてないです」

「まあ、たしかにそうか。しまったな」

心底口惜しげに眉をしかめるユエル様を、イスラさんは「おまえはほんといい性格だよ」と睨みつける。とはいえ、さほど険悪なムードにならないのは、やっぱりお二人が長年の知己だからだろう。

それにしても、ユエル様とイスラさんは、見た目だけで言うなら、とても対照的だ。たとえば、今の服装にしたってそう。

ユエル様は全体的にシックにまとめてて、佳人に相応しい装いが常だ。カジユアルなスタイルに決めることもあるけれど、ラフ過ぎず、美装は崩さない。

一方のイスラさんは白いＴシャツと綿パンツというラフな格好で、どうやら普段からそうした服を好んで着るみたい。堅苦しくなく、緩くて気軽な雰囲気がある。イスラさんにはある。明るい茶系の髪も、洗った後そのまま手櫛で梳いたような整え方をしていた。おおらかなイスラさんらしい形貌だと思う。

ユエル様が、「堅苦しくて、緩さが無い」というのではない。むしろ普段のユエル様は、けっこう緩くて、のんびりしすぎていると思うくらいだ。

イスラさんに対してだけとげとげしい態度になる。でも、それだつて本気で厭つてのことではないと……思う。

「出してしまったものは今更しようがない。ミズカ、イスラは放っておいていいから、こちらに座りなさい」

「あ、……はい」

わたしは落ち着かない心持ちでユエル様とイスラさんを見やっただ。「どうしよう」と迷ったけれど、ここはともかく、ユエル様の言葉に従うべきだと断じ、ユエル様が指示した椅子に腰を下ろした。

ユエル様はワインを手に取ると、手早くコルクを抜いた。
そして、

「ミズカ、グラスを持ちなさい」

と、わたしを促す。断れる雰囲気でもなく、わたしは言われるまま急いでワイングラスを手に取った。

グラスに、ワインが注がれる。

やや黄色みのかかった白ワインで、甘いような、酸っぱいような香りがたつ。芳醇な香りというのかもしれない。

「飲みなさい、ミズカ。喉が渴いていたのだろう？ 身体も温まる」
ユエル様はそう言って、もう一つのワイングラスに自分の分を注いだ。

「おっ、いいね！ やっぱ酒の席に女の子がいると！」

陽気なイスラさんの声に、ユエル様は渋い顔を返す。わたしはというと、ちよつと困っていた。

だって、ユエル様の「晩酌の相手」なんて、今までしたことがなかったもの。

お茶と一緒に飲むことはあっても、お酒を一緒になんて、あり得ない。仕えている主人に給仕するのではなく、同席してお酒を飲むなんて……。いいのかしらって、とまどってしまふ。

そんなわたしの葛藤を知ってか知らずか、イスラさんは気軽な口調でさり気なく訊いてきた。

「ミズカちゃんはお酒、いけるクチ？」

「え？ いえ、どうでしょう……分らないです」

飲んだことのあるお酒といたら、梅酒と蜂蜜入りのホットワインくらいだ。寒い日に身体を温める目的で飲んだものだったし、アルコール度数も低かったように思う。

「そっかあ。じゃ、まずはぐぐつと、飲んで飲んで」

なにやら嬉しそうにイスラさんは言う。そしてユエル様は眉間に深い溝をつくって、イスラさんを睨んでいる。

わたしはとまどいつつも、ワイングラスに口をつけた。まず、香りが鼻腔をくすぐってくる。

ワインの正しい飲み方なんて知らないから、ちょっと口に含んでそのまま嚙下した。

「これはなかなか良いワインだよ。1969年ものの、エアバツハー・マルコブルン。ドイツのラインガウ地域の白ワイン。甘口だから、ミズカでも飲みやすいだろう?」

ユエル様が言ったとおり、酸味も低く、かといって甘すぎもせず、苦味を感じる前に、するりと喉をくだっていった。

亜矢子さんが持ってきたドイツワインは高価なものだったらしい。わたしはワインにも疎いから、亜矢子さんが言っていた「シュペートレーゼ」というのは、てっきり地名か醸造元の名だとばかり思っていた。

シュペートレーゼというのは、等級を示す語で、「遅摘みした葡萄から造られる」ワインを指すのだと、ユエル様に教えられた。濃厚で、どちらかといえば甘口寄りのワインとのこと。

そしてドイツワインに限ったことではないけれど、ヴィンテージもののワインというのは、目玉が転げ落ちるほどに、高価だ。

亜矢子さんが持っていらしたこのワインも、希少価値の高い品だという。

貢がれたユエル様はというと、特別にありがたがるでもなく、もちろん迷惑顔もしない。

「ワインに罪はないからね」

なんて、笑って言うてのける。

わたしは知らず、ため息をつく。そのため息も、ワインの良い香りに染められていた。

「ミズカちゃん、そういえば具合良くなかったんだっけ? 大丈夫?」

お酒を勧めておいてから、はたと気がついた様子で、イスラさんが尋ねてきた。

「雨、弱いんだって？ ユエルから、さっき聞いたけど」

「雨というか、湿気に、なんですけど」

「ユエルもだもんな。力の種類からいってやむを得ないか。けど、ミズカちゃんの方に大分しわ寄せがいつっちゃったんだな」

「でもわたし、もともと雨の日って……少し苦手でしたから、その影響かもって」

「へえ？ そうなんだ？」

イスラさんは、黄みをおびたこげ茶色の瞳を、まじまじとわたしに向ける。

わたしは曖昧な相槌をうって、答えた。背中が一瞬痛んで、顔をしかめてしまった。

雨の日は、こうして背にある傷が疼くから苦手なんだ。

わたしはユエル様に目を戻した。

ユエル様は黙したままわたしの様子を窺っている。何か言いたげに唇が動いたように見えたけれど、ワイングラスが傾けられ、同時に瞳も伏せられてしまった。

また、ちくりと胸が痛む。

なぜだろう。なぜこんなに胸が騒ぐのか、切なくなるのか、自分が分からない。

顔が熱くなり、動悸がし始めたのは、きっとワインのせいだ。

「あつ、あの、訊きたかったことがあるんですけど！ イスラさんの力は、なんなんですか？」

話の転換の仕方が下手なのは、我ながら、もうどうしようもない。ユエル様から視線を逸らし、イスラさんに向け、唐突に話を切り出した。

「え？ 俺？」

「はい。魔力っていうんでしょうか？ そうした力を持ってらっしゃるんですよね？」

「ああ、うん。でも、俺ら吸血鬼全員ってわけじゃないんだぜ？」

「そうなんですか？ それは、知らなかったです……けど」

「古い血脈の一族だけが力を保ってる。ユエルとアリア、まあ、一応、俺もだけどね。一族つたって、一族の全員が力を受け継ぐわけじゃないし、なんていうのか、天賦の才ってやつだね」

さりげなく……でもないように思えるけど、自慢しているようだ。やっぱりイスラさんって、こういうところなんか、ユエル様に似ている。……なんて、口に出せないけれど。

「俺とアリアは同じ属性の力だ。風使い」

そう言っつて、イスラさんは指を鳴らした。

するとユエル様のしなやかな銀の髪が、下からすくいあげられるように浮いた。

「やめろ、イスラ、うつつうしい」

ユエル様は髪を乱した旋風を、軽く手を振って、散らした。

イスラさんは右手の上に、風を乗せている。小さな風の渦が、うつすらと見えた。

「こんな具合。風を使って身体を浮かせたりもできる。疲れるからあんまりやらないけどね」

ああ、それでなんだと、納得がいった。

イスラさんもアリアさんも、来訪時、どうやって二階にあがったのだろうと思っっていたけど、柱を伝ってよじ登ったとかではなく、つまりそういう“力”を使って、上がったんだ。

「それじゃあ、イレクくんもそういう力を持つてるんですか？」

「いや。あいつにはないよ。俺もよくはわからねえけど、もしかして生殖者限定なのか？」

イスラさんに問われ、ユエル様はグラスをテーブルに戻した。

「違うな。生殖者ではない奴でも、力を持つ奴はいた」

「そうか、そういう奴に俺は会ったことないからな。生殖と同じくらいレアな能力だと思っただけど、それでもないのか」

「レアな能力には違いない。力加減も、その種類と同じくそれぞれだ」

それからユエル様は、不思議顔をするわたしに、改めて説明をし

てくれた。
「吸血鬼」である、自分達のことを。

16・炎と風と

吸血鬼がもともと持っている超常的な力は、幻惑の能力。人間の記憶や思考を意のままに操作できる、一種の催眠術のような能力だ。個人差はあるものの、吸血鬼にとって、生存し続けるために必要な能力のようで、この能力を持たない吸血鬼はいないみたい。

他に長寿で不老でなのは、

「種族的な特徴で、いわば体質のようなものだよ」

と、皮肉ったような口調で、ユエル様は述べた。

この二つの特殊能力の他に、吸血鬼というよりは魔法使いめいた能力があることも、ユエル様から聞いていた。その能力……魔術とか超能力とか言ってもいいようなその“力”には、風・火・水の三種の力があるそうだ。

そのうちの“火”の属性の力を、ユエル様は持っている。そしてイスラさんとアリアさんは“風”。

「私が確認したのはその三種だけだが、他にもあるかもしれないね。古い血脈を継ぐ者、そして“魔力”の強い者にしか、そうした特殊能力は顕現しないようだ」

「ほら、俺達、個人主義だろ？ 横の繋がりなんてないも同然だから詳しい事はわかんないんだよね。たぶんそうなんじゃねーかっていう適当な結論さ」

わたしは「はあ、そうですね」と間の抜けたような返事しかできない。

ユエル様が有してる火の魔力ちからについては、ずいぶんと前に説明されてた。だけどユエル様がその力を行使する機会って滅多になくて、実感は乏しかった。

いつだったか、ユエル様が手の上に作って浮かべて見せてくれた蒼白い光の球体は、怪談話とかに出てきそうな火の玉か狐火のようで、きれいだなと思った憶えがある。手品を見せてもらってるよう

な感覚で、不思議な力が“吸血鬼”にはあるんだなと、暢気に感心した。そうした能力に、少しも疑問を抱かなかった。

だって、そもそも“吸血鬼”という存在自体が現実味のない、不思議なもの存在なのだから、例えばびっくりするほど摩訶不思議な魔法を使えるのだと教えられ、それを見せられても、「そんなものなんだ」とあっさり納得したと思う。

あっさりというか、……ぼんやりと納得、というか。

それでもちよつと意外だなと思ったのは、水の属性の力だった。

吸血鬼って、水……主に雨や湿度等に弱いものだと思いきんできた。ユエル様が雨の日をとくに億劫がっているから、そう思ったというのもあるし、後は小説が何かでそういう記述があったという憶えもあった。「流れる水」のせいで正体を現されたり、とか。だからそれほど深刻ではないにしても、ちよつとした弱点なのかなと思っ

てた。
「水は、とくに弱点ではないよ、ミズカ。聖水を含めてね」

「そうなんですか？」

わたしは小首を傾げてユエル様を見やった。

「ただ、自然の法則に従うように、それぞれ、その力の属性と相反するものは、弱点とまではいえないが、苦手になるということはあるかもしれない。中国の思想だったかな？ 陰陽五行、というのは？」

そのあたりの知識も、以前ユエル様から教えていただいたことがある。

えーと……、たしか中国古来の哲理とかなんかで、天地の間に循環流行して停息しない「火水木金土」の気を表わす……とか、な

んとか？ それぞれが相剋し相生する。
「まあ、それに当てはまるわけではないが、相性の良いもの悪いものは確かにある。滅せられるほどの脅威にはなりえないが」

滅せられるなんて物騒な語彙を、ユエル様はさらりと口にする。
自分と人間達との差異を、そうしたさり気ない一言に含ませてい

るように感じた。

ユエル様は時々ひどく自嘲的で、皮肉めいたことを口にする。

「ただイスラさんまでがそんなことを言うなんて、思いもよらなかつた。」

イスラさんはグラスを傾け、僅かに残っていたお酒を飲みほして、深々とため息をついた。そして、苦笑まじりに零した。

「俺達はさ、見た目は人間の姿をしてるけど、やっぱり魔性の種族なんだろうね、吸血鬼っていう。人間のまねごとをして“生きて”ても、人間とは交わりあえない」

イスラさんは明るい茶色の双眸を曇らせ、イスラさんに似つかわしくない寂しげな物言いをした。

「超常的っていうか、魔物っぽい異能の力を持っているのは、人間との区別をつけるためなのかもね？俺達は本来、在ってはならないモノなのかもしれない」

「で、でもっ！」

思わず、身を乗り出してしまった。

「人間の中にだって、超常的な能力を持っている人はいます！そりゃあ、魔法とかそういうのとは種類は違いますが、でもっ、たとえば、すつごく足が速かったり力持ちだったり、記憶力が飛び抜けて優れていたり演算能力が高かったり、ええっと……あと、いろんな発明をしてそれを形にしたりとか！ごくごく平凡な人から見たら、そういう能力を持つ人はすごく特別な人種に思えてしまうし、魔法みたいだって思える能力もあつて……。天賦の才能でも努力の賜物でも、そうした常人以上の能力を持つ人間はたくさんいて人間社会の中で“生きて”るんです。だから、吸血鬼だって、人間と同じように“生きて”いたって構わないはずなんです。人間のまねをしていたって、こうして存在しているのだから、……在ってはいけないなんて、そんなことないって思うんです」

ずっと……ずっと、そう思ってた。

そう思っていたかった。“生きて”いてもいいんだって。

だって、そうでなければ悲しすぎる。

わたし達は確かに人間とは違う、別の“何か”だ。そのうえ、人間の生気なしには存在もできない、ひどく儚い存在でもある。

それでも、こうして存在してる。永い……とても永い時の中を、人間の世界に潜み、在り続けてきた。

たしかに、人間に害のある異端の存在なのかもしれない。そうしたら一面もあると、それは否定できない。

だけど、人間とは交じり合えないなんて、思いたくなかった。在ってはならない存在なんて、思いたくなかった。わたしはともかく、ユエル様の存在そのものを否定するなんて、それこそ在り得なかった。

だって……、だってわたしはユエル様に救われ、こうして存在できているんだもの。

吸血鬼とか人間とか、そんなこと関係なしに、ユエル様はわたしに優しく接してくれた。そうしてわたしを生かしてくれた。わたしのような者でも生きていて良いと、ユエル様が信じさせてくれた。

だから、これからも生き続けることを、否定したくない。

たとえ人間とは別種の存在であっても。

わたしの気持ちを、曖昧な単語でしどろもどろに繋げた言葉の羅列だけでも、ユエル様は察してくれた。

「ミズカらしいね」

そう言っつて、微笑んでくれた。穏やかな笑みを見せてくれるのは、なんだか久しぶりの気がする。

恥ずかしくつて、居たたまれない心持ちにもなっただけれど、ユエル様の笑顔が見られたのが嬉しくて、何よりホツとした。

でも、心が和んだのも束の間、……

「ミズカちゃん！ いい子だなあ！」

「……………っ!？」

いきなりイスラさんが抱きついてきて、声も出ないほどに驚いた。イスラさんは、いつでも突然だ。

ついさっきまでテーブルの向こう側にいたはずなのに、いつの間にかわたしの目の前にやってきていて、ソファーに座ったままのわたしの頭を抱え込むようにして、ぎゅうっと抱きしめてきたのだ。

「あつ、あの……っ」

「うくん、ミズカちゃん、ほんと、可愛いや！」

そう言っつて、イスラさんはまるで子供を褒めるみたいに、わたしの髪をくしゃくしゃと撫でてくる。

ワイングラスを両手で抱えるようにして持ったまま、わたしは硬直していた。突き放そうにも、腕を伸ばせない。

突然の抱擁に驚き、戸惑い、焦り、心臓が痛いくらいに高鳴りだした。

アリアさんとは違う。頬に当たるイスラさんの胸元の硬さが、それを体感させた。

男の人の胸元、腕、……力強さだった。

「いやあ、ほんと惜しいなあ」

耳ともで、イスラさんがささやいた。少し声のトーンが落ち、そして、イスラさんの片手がわたしの背に回され、抱きしめる力が強まった。

思わず、ひゅつと息を呑む。寒くはないのに、全身が粟立った。

「ミズカちゃんがユエルの眷属でなきゃあ、俺がもらったのになあ」

イスラさんの声が悪戯っぽいものになった。からかうような声は、わたしにはなくユエル様に向けられているようだった。

「……イツ、イス……ラ、さん、あ、の……っ」

な、なに……？

急に、イスラさん、何を言い出すの……？

「ユエルになんかには、ホントもったいないくらいだよ、ミズカちゃん。俺ならもつと大事にしてあげられるのになあ」

冗談めかしたイスラさんの声が、引き金になった。

「……っ」

心の深いところにある何かがひび割れ、弾けた。

17・抉へこじ放たれて

息が詰まって声も出ず、心臓が破れそうな勢いで鳴り始める。

や、だ……、何、これ……？ 痛い、背中が……ズキズキと疼く。イスラさんの腕の力が強いせいじゃない。

いやだ、何？ 何か、思いだしそうな疼痛が、背を、全身を走らせてく。

どうしよう、何、何がこんなに、……こわ……い？

釘を打ちつけてくるような激しい痛みが頭部にまで及んで、とても目を開けていられなかった。目を閉じると、瞼の内で小さな光が明滅した。

何か、……何かが、じわじわと痺れるように全身に拡がっていく。

「イスラ」

低く、威圧的な声が、耳に届いた。それと同時に身体が解放された。

ユエル様が乱暴な所作でイスラさんをわたしから引き離したようだった。ふと見ると、イスラさんは顔をしかめ、不安定な姿勢で床に片手と片膝をついていた。

「……」

わたしはソファアに座ったまま、イスラさんを気遣う余裕もなく、体の緊張も解けずにいた。

「わざとか、イスラ」

「……」

わたしに背を向けて立ちはだかっているユエル様は、右の手のひらをイスラさんに向けていた。表情は見えない。けれど、その口調はひどく冷たい。それでいて烈火のような熱れしきがあった。

一方で、イスラさんは不敵な笑みを浮かべるだけで何も言い返さず、ユエル様を突き上げるようにして睨みつけている。

イスラさんは上半身を起こし、片膝を立ててその場から動かない。「さすが風使いだな、イスラ。炎を煽るのが巧い」

ユエル様の冷笑じみた声音が空気を張り詰めさせていく。こんなにも荒々しい怒気をまとっているユエル様を見るのは、初めてだ。緊迫感が高まり、同調するようにわたしの胸もざわついて、動悸がひどくなっていく。

イスラさんは余裕綽々といった笑顔で、軽口をたたいた。

「いいね、ユエル。おまえのそういう顔見るの、好きだぜ、俺」
「うるさい、イスラ、黙れ」

ユエル様は声を荒げない。静かに言い放ち、次の瞬間、青白い炎が渦巻く塊となってイスラさんを襲った。

「……チツ」

イスラさんは間一髪で、その炎を止めた。風の盾が炎を止めている。炎はその形を歪ませるも、勢いは衰えない。やがて螺旋を描くようにして、イスラさんが両手をかざして作っている風の盾を押し去っていった。イスラさんは苦しげに顔をしかめる。風と炎の勢いに髪が乱され、額に汗が滲んでいるのが窺えた。

火が、爆せている。

ユエル様はわたしの前で佇立したまま微動だにせず、イスラさんを抑えつけていた。

空気が軋むような音を立てていた。あるいはそれは、耳鳴りかもしれない。こめかみが酷く痛んだ。

イスラさんはなおも笑みを崩さず、ユエル様をさらに煽った。

「風使い冥利に尽きるね、火の勢いを増させる要因になれたってのは」

「……ではそれを冥土の土産にでもするがいい」

「ユツ、ユエル様！ 待って……っ！」

二人がどれほどの力を持っているのか計り知れないけれど、きつととても強い。本気で力を行使し、相手にぶつけたとしたら、無傷ではいられない。それほどの力だと、感じる。

たとえ冗談だとしても、争い合うなんて絶対ダメだ！

ユエル様を止めなくちゃ！

「ユエル様！」

そう思っただけで腰を浮かせたわたしを、ユエル様は振り返りもせず、片腕をのばして制した。そのユエル様の肘が、わたしの手に触れた。軽く触れたただけだった。

「……………」

けれど手に痺れが走り、震え、力が入らなくなった。

ワイングラスが、まずわたしの膝の上に落ち、それから床へ落ちて、パリンツと音をたてて、砕けた。ガラスの破片が散らばり、黄色みを帯びた白ワインが絨毯に染みをつくった。わたしの胸中に広がる痺れのように、じわりと滲む。

「……………」

立ち上がりかけて失敗したわたしは前のめりに倒れ、ソファーから崩れ落ちるようにして、床に両膝をついた。

「ミズカちゃんっ!？」

「ミズカ？」

硬直していた体が、わなわなと震えだした。わたしは目をきつく瞑って、自分自身を抱きしめていた。

痛い。

背中と、ガラスを踏んだ膝が痛い。それよりももっと、甦った記憶が苦しくて、胸をひしめかせる。

「ミズカ？ ミズカ、いつたい……………」

弾かれるようにして振り返ったユエル様は、身を縮こまらせて震えているわたしの肩を掴んだ。そのユエル様の手を、わたしはほとんど反射的に振り払ってしまった。

その直後、自分が何をしてしまったのか気づき、愕然とした。

「……………あ……………」

自分がとったとっさの行為にうろたえ、声が出ない。

「す、すみ……………ません、わたし」

声が震えた。

なんてことをしてしまったんだろう……！？

ユエル様の手を払いのけるなんて、……どうして。

手や腕の震えが治まらない。動悸は酷くなるばかりだ。頬も熱く、目頭まで熱帯びてきた。背中がずきずきと痛みだしたのは、雨のせいじゃない。古い傷痕が疼くのは……

「わたし、……すみません、あの、驚いてしまって……すみません、本当に」

その場を取り繕おうと、わたしは散らばったガラスの破片を集めようと四つん這いになった。手が震えて、うまくガラスの破片を拾えない。膝や指先から血が滲みでていた。

「ミズカ」

ユエル様がわたしの手を掴んで止めた。ユエル様の手は、炎を操った後だったからか、とても熱かった。

「酔ったのだろう、ミズカ。もう、寝たほうがいいね」

ユエル様はどうしたのかと問い質すようなことはせず、わたしの手をとったまま、立ち上がった。さり気なく、手や膝に付いたガラスの破片を払い落してくれ、血も拭ってくれた。

ユエル様の手が、わたしの血で汚れてしまった。

「部屋まで送ろう、ミズカ」

ユエル様は小首を傾げ、わたしの顔を気遣わしげに覗きこんできた。深い湖のような緑色の双眸に、わたしが映る。

「……………」

大丈夫です。そう応えようとして、失敗した。

喉がきりきりと痛んで声が出なかった。瞼が熱い。

大丈夫です、すみませんと言おうとしたのに、声が喉の奥に詰まり、それが苦しくて、思わず顔を背けてしまった。

肩をすばませ、口の端をきゅっと締めた、その時だった。

「ミズカ」

ユエル様の手が軽く背中に触れた。わたしの身体を支えてくれよ

うとしたんだろう。

それなのに、……

「……っ」

わたしはまた反射的に身を擦って、ユエル様の手を拒んでしまった。

「すっ、すみませ……っ」

背中がどくどくと脈打って、傷みが激しくなる。

「……」

ユエル様は、わたしから手を離した。それからゆっくりと立ち上がった。

「あ、……わた、し……」

一度ならず二度までも、わたし、なんてことをしてしまったんだろう！

自分のした行為が信じられない。

どうしよう。どうしよう……！

不安げにユエル様を見やると、ユエル様は表情を消していた。目は、夜闇を映した濃紺色の窓に向けられている。

ユエル様は物憂げな仕草で、銀の髪を指先で軽く梳いた。一度はかきあげられた銀の髪は、指を離すと同時に再び額にかかり、ユエル様の深緑色の瞳を隠した。

「ユエル」

佇むユエル様に声をかけたのは、挑戦的な態度を取り続けたいたイスラさんだった。さっきまでとは裏腹に落ち着き払った様子で、声も淡々としていた。

「ミスカちゃんは俺が部屋まで連れてく。傷の応急手当もしくから」

見かねてのことだったのだろう。

イスラさんはわたしに近寄ると、添える程度の力具合で腕を掴んだ。さつきみみたいな恐怖感は、もうない。

イスラさんは申し訳なさに、わたしに謝った。

「ごめんな、ミスカちゃん、怖がらせちゃって」

「……………」

わたしは首を横に振って応えた。

申し訳ない気分でいっぱいなのは、わたしの方だ。

それなのに、せつかくの寛いだ時間を台無しにして、あまつさえイスラさんに「ごめん」なんて謝らせてしまうなんて…………。

ごめんなさいは、わたしが言うべきことなのに。

なのに、声が出なかった。一言でも声を発したら、その拍子に泣いてしまいそうだった。

「ミスカちゃん、歩ける？」

問われて、ぎこちなく頷いた。

イスラさんはわたしの腕を掴んで、そのまま踵を返した。そしてユエル様の方に向き直って、赦しを求めた。

「ふざけて悪かったな。酒の席でのことだ。ここはひとつ、さらつと流して忘れてくれよな」

「……………」

ユエル様はイスラさんとは目も合わさず、謝罪にも応えずに、再びソファーに腰をおろし、ワイングラスを手に取った。端正な横顔をこちらには向けてくれず、グラスを口につけるでもなく、ただ黙然と座っている。砕けた散ったガラスの破片もそのままに、まるで氷の彫像のような居ずまいで。

雨は、まだ降り続いていた。

泣きだしたい衝動をどうにか抑えてはいたものの、背中の痛みは自分では抑えようがなかった。

蘇ってしまった記憶を、もう、消してしまえないように。

* * *

雨が降っていた。あの日、あの時も。

わたしは、さる子爵家の使用人だった。物心ついた時にはすでにそこにいて、下働きの日々を過ごしていた。

その頃のことは、あまり憶えていない。

あまりに遠い昔のことだからというよりも、記憶に残るような事が少なかったからだと思う。機械人形のように与えられた仕事を、ただ黙々と、何を考えるでもなく、こなしていた。

両親もなく、頼る身寄りもないわたしだから、働く場所があるだけでも幸運だった。飢えずにいられる現状に満足しなればならなかった。

身分の差というものが、まだ人の心に根付いていた時代。

わたしは「身分の卑しい下々のモノ」で、高貴な方々の目にとまるような娘じゃなかった。

ある日、……

子爵家の跡取り息子の若様が、わたしを私室に呼びつけた。何用だったのかなんて憶えてない。何故呼ばれたのかも皆目検討がつか

なかった。たぶん、用など無かったのだろ。

わたしを舐めるように看視し、若様はにやにや笑って言った。

「へえ、なるほど。これは迂闊だったな。……なかなかじゃないか」
言葉の意味が解からず、返答に窮した。

若様の私室に一人呼ばれて立ち入るなんて今までなかったから、わたしはひどく怯えて、まともに顔も上げられなかった。

若様に直接声をかけられたのもこれが初めてだった。

空豆のような顔形の若様は、いかにも両家の子息らしい傲慢さと横柄さを、そのでっぷりとした体型に現わしていて、正直、好感は持てなかった。

「おまえ、名はなんという」

「……水果と、申します」

「ふん。ミズカ、ね。おまえのような者には過ぎた名だな」

「……………」

「まあいい、名など必要ないしな」

では何故名を訊いたのですか。そう言い返すなんて、当時のわたしには思いつきもしないことだった。口答えをする“頭脳”すらなかった。わたしはただの“労働力”でしかなく、自分の意思すら微かにしか持っていなかった。

それでも、若様の不遜な態度に不快感を覚えていた。生理的嫌悪感とでもいうのか、些かの好意も持てなかった。

「しばらくの間、退屈しのぎができそうだ」

そう言って笑った若様の目が狡猾に光ったのに、その時は気がつかなかった。ただ怖いとだけ、思った。

それから、若様はわたし個人を指定して命令を下すようになった。「着替えを手伝え」「酒を持って来い」「荷物を持って」「忘れ物をした取ってこい」「酒をこぼした、這いつくばって拭え」

若様はことあるごとにわたしを呼びつけ、用を言いつけた。もちろんわたしは唯々諾々と従うよりなく、そのたび、不可解な胃の痛みを覚えるようになっていた。

どうして？ 他にも使用人は大勢いるのに、どうしてわたしを名指しにして用を言いつけるのだろう。

どうして、という疑問を初めて抱いた。それに、全身が粟立つような嫌悪感も。

若様の舐めるような目つきが、淫靡な粘りを含んだ声が、触れてくる手のいやらしさが、……嫌で嫌でたまらなかった。

どうしてわたしなどに、こうも執拗に構いつけてくるのだろう。

不審に思い始めていたわたしに、若様は気付いたのだろう。

若様はその理由を語らず、その代わり無体な用事を、さらに次々と言いつけてくるようになった。一向におもねろうとしないわたしを、無理強いにでも服従させようとしたのかもしれない。

あるいは、不快感を露わにしたわたしに、若様の嗜虐性が煽られたのかもしれない。

その日も、若様はいつものようにわたしを呼びつけた。私室にではなく、屋敷の敷地内にある温室に。曇天の午後のことだった。

「御用向きはなんでしょうか」

そう尋ね、おそろおそろの温室に入るや否や、いきなり若様に押し倒された。

あまりのことに思わず声を上げた。温室にわたしの掠れた悲鳴が響き渡ったけれど、若様はわたしの口を塞ごうともせず、舌舐めずりをしてほくそ笑んだ。

「泣き叫んでも無駄だ。誰も来やしない」

わたしを組み敷いた若様は喉を鳴らして笑い、身を擦って逃げだそうとするわたしの腕を地面に押しつけた。

「情けをかけてやるというんだ。有り難いと思え」

「……っ」

若様はもがくわたしの頬を叩き、服を剥ぐために胸元に手をやった。胸がはだけ、粗末な服はたやすく引き裂かれた。肘が擦り剥け、腿とふくらはぎが土にまみれた。

恐ろしくて、声も出なかった。喉の奥で声にならない悲鳴が詰まり、全身が戦慄いた。

「お兄様っ！？ 何をなさっておいでですか？」

あの時若様の妹、お嬢様が偶然兄を探しに現れなければ、いったいどうなっていたか。

今思いだしても、ぞっとする。

お嬢様はわたしを助けてくださったわけではなかった。兄の所業に我慢がならないといった風で、「好き心もたいがいになさいませ」と兄を咎めた。それに辟易した若様は、一旦はわたしを解放してくれた。

けれど、若様は懲りなかった。

その後も若様は隙あることにわたしを手籠めにしようと機会を狙っていた。性的な嫌がらせは執拗に続いた。乱暴に腕をひつつかんで壁に押し付け、口をうなじに当てて噛んできたり、長椅子に押し倒してのしかかり、胸や足を揉みしだき、服を剥ごうとしたりした。僅かにでも抵抗すれば、容赦なく頬を打たれた。

大抵何らかの邪魔が入って事は中断され、わたしはほうぼうの体で逃げだすことができた。

猫が、捕まえた鼠をなぶって弄ぶように、わたしをわざと逃がしていることもあった。わたしを玩弄して愉しんでいたのだろう。

若様は傲然と言い放った。

「可愛がってやろうというんだ、光栄に思え」

「……っ」

情婦にしてやると若様は言った。飽きるまでな、と。

その言葉の意味がわかって、わたしにどうすることもできなかった。嫌ですとも言えず、ましてや「光栄に思う」なんて！

「ただ拒みきれなかった。」

だって、わたしには他に行く所なんかなくて、今ある暮らしを受け入れざるを得なかったから。ここを出たら、野たれ死ぬだけだ。わたしに選択しなんか無い。みっちり仕込まれた使用人気質が、わ

たし自身を縛りつけていた。

それでも諦めきれず、若様の言いなりにはなれなかった。必死にもがき、あがいた。それがまた若様の加虐心を刺激することになるうとは、思いもしなかった。若様はわたしをいたぶることを愉しんでいた。

「お兄様！」

だけど恐れていた最悪の事態は、回避することができたお嬢様のお咎めが入ったことよって、免れた。

乗馬用の鞭を持って現れたお嬢様は、頬を紅潮させ、怒りにわなわなと身体を震わせていた。

お嬢様はきつい吊り目をさらにきつくあげて、若様とわたしを烈火のごとく睨みつけた。

「お兄様、いい加減なさつて！」

西洋風の乗馬服姿のお嬢様は革製の鞭を握っていた。それを握る手がぶるぶると怒りに震えている。

「そのように下賤な娘にうつつをぬかしているなど、子爵家の嫡男ともあるうものが、情けなくはございませんの？」

優位に立っているのは常にお嬢様の方だった。

気位が高く、意志の強いお嬢様は、放蕩三昧に暮らしている兄を苛立たしく思い、事に触れては叱りつけ、子爵家の嫡男である自覚を促そうとしてきた。

若様はいつものごとくお嬢様の叱咤に忌々しげに舌打ちをし、わたしから手を引いてくれた。

けれど

お嬢様の怒りの矛先は、わたしにも向けられた。

「おまえのようなものが、よくもまあお兄様を誘惑できたものね！薄汚い下女の分際で、なんと身の程知らずな！」

鬼のような形相でわたしに近づいて来るや、お嬢様は狂ったように鞭を振るってきた。

わたしは逃げだすことも叶わず、その場に崩れ落ちた。お嬢様は

容赦なく鞭を打ちつけてきて、わたしは両腕を抱えてうずくまった。「お赦しをください」と、何度も赦罪を請うた。

「おいおい、見えるところに傷なんかつけるんじゃないよ」

若様が、わたしの背をはだけさせた。悦にいったような含み笑いが、鞭打ちの傷に沁みてくるようだった。

「……ッ」

抗うことも逃げることもできず、わたしは土下座の格好で、ひたすら苦痛に耐えた。

「おまえのような卑賤の者をいつたい誰が真面まともに相手をするものですか。身の程を知りなさい！ 汚らわしい淫女！」

若様の粘着いたせせら笑いの下、お嬢様の罵倒と鞭を、齒を食いしばって耐え忍んだ。

背の肌が裂け、血が床に飛び散った。

痛みあまり失神しそうになりながらも、わたしは掠れた声で、何度も赦しを請うていた。お赦しくださいと、うわ言のように繰り返した。

内心では、悲鳴を上げて泣いていた。

わたしが悪いのでは、ないのに……。

わたしがいつたいどんな罪を犯し、なぜこのような理不尽な罰を受けなければならぬのか。

心の底に、怒りが湧いた。怒りというよりそれは悲しみに近かった。

どうして、と。どうしてこんな目に遭わねばならないのか、と。

惨めに這いつくばって赦しを請わねばならない立場にあることを、初めて辛いと、悲しく苦しいと、思った。

ようやく若様とお嬢様の下から解放されたわたしは、ほとんど衝動的に屋敷を出、闇雲に駆けていた。

雨が降っていた。

どこをどう走ったのか、まったく憶えていない。

気付けば港町に来ていた。頃は、夕刻だったろうか。雨にけぐる

港町は、寒々とした影に覆われているように薄暗かった。

そして、人影もまばらな路地で、わたし自身がそこに倒れているかのような憐れ姿の、だけどわたしとは比べ物にならないほどに美しい、憔悴しきった銀髪の青年を見つけたのだ……

19・名残の雨

雨はまだ降り続けていた。

目覚めてもまだベッドから降りられず、わたしは上半身だけを起こし、小窓から見える外の景色に目を向けた。

重なり合った薄雲の向こう側、ぼんやりと霞んで見える太陽は、地上にわずかな光をもたらししている。

小降りになってきているから、そろそろ雨も上がるだろう。昼前には青空が戻るかもしれない。

深々とため息をついたのと同時に背中が痛んで、思わず肩を竦めた。

痛みをすり替えるようにして、下唇を噛んだ。

もちろんそれで背中が痛みが薄れるはずもない。……傷が、消えてなくなるはずもなかった。

どうして忘れていたのか。あれほどの記憶を。

細い線状の傷痕がいくつも背を這っている。蚯蚓腫れの傷痕は、もはや治らず、消えることもない。

普段は痛みも痒みもなく、さして気にならない。ただ雨の日……湿度の高い日なんかには少しばかり疼くくらいだった。

どうしてこんな傷が背中にあるんだろう。

そう疑問に思ったこともあったけれど、短絡的に、子供の頃に何か不慮の事故があつてついたものなんだろうと結論付けていた。

その“不慮の事故”がどんな事故だったのか、遠い昔のことだから忘れてしまったのだと、深く考えないようにしていた。

「……………」

両手に顔をうずめた。

違う……忘れていたんじゃない。

忘れさせられていたんだ。……ユエル様に“幻術”よって。

幻術は人間に特化した力であるらしく、そのため、ユエル様の眷族となったわたしは、ユエル様の幻術にはかからない。

だけど、ユエル様の眷族になるまでに、二年の猶予があった。二年ほど、わたしは人間のままユエル様のもとで過ごしていた。

たぶんその間に、ユエル様はわたしの記憶を読み、忌まわしい過去を忘れさせてくれたんだ。

感謝……しなきゃいけない。

ユエル様はわたしのためにそうしてくれたんだから。

それなのに、どうしてこんなに心が揺れるの？ 心が、背の傷が疼くように、痛むの？

思いだした過去が辛いからじゃない。

たしかに、思いだすには辛すぎる過去だ。忘れたままでいた方が心も安らかだったろうと思う。

だけど……だけど思いだしてしまった。忘れてはいけないのだとでも言うように。

過去の記憶を引き摺りだしたのは、わたし自身の気の緩みのせいだ。

ユエル様の伸ばされた腕、広い背、怒りに燃える瞳、低い威圧的な声、……まるで見知らぬ男の人のようだった。ユエル様ではない別の“男の人”が眼前に迫ってきた。

あの瞬間に、胸に去来した感情はいつたいなんだっただろう。

怖さもあつたけれど、……それだけじゃなく、ひどく苦しかった。動悸が強くなり、それが脳裏を叩いて、封印されていた記憶を呼び起こした。

でも、違う。

記憶が戻ってしまったのはユエル様のせいじゃない。ユエル様のせいだなんて思うのは、お門違いだ。

顔をあげ、わたしは両手に力をいれてこぶしを握った。

傷の疼きはやわらいでも、甦ってしまった記憶はもう消せない。

消すないけれど、……せめて、ユエル様の前では何事もなかった

ように振る舞うべきだ。

ユエル様にこれ以上の負担をかけたくないもの。

ユエル様は優しい方だから、わたしがあの辛い記憶を思いだしたと知ったら、わたしを気遣って、きつと心配げな顔を向けてくる。

「どうしたものか」と困らせてしまうかもしれない。

そんな優しいユエル様を、わたしなんかのことで、あれこれと思い煩わせたくない。

ユエル様にはいつだって悠然と微笑んでいてほしい。

だってユエル様は、わたしを救ってくれた。わたしを、初めて「人」として扱ってくれた。

名を呼んでくれ、微笑みかけてくれた。

ユエル様はわたしのための思っで、あの苦い過去を忘れるべく、術をかけてくれたんだらう。

この上なく人道的な……吸血鬼という人外存在ではあるけど……

…主人に、わたしも誠意をもって応えなくちゃいけない。

だからこそ、きちんと弁えていなくては。気を引き締めて、ユエル様にお仕えしなくちゃ！

それがわたしにできる、せめてもの“誠意”だと思うから。

眷族の意味を聞かされたおかげで少し（本当のところ、かなり）動揺したけれど、大丈夫、きつと自制心は保てる。保たなきゃいけない。

いままでだって、そうしてきたはずなのだから。

わたしは両手で両頬を軽く叩いて、気合を入れた。

まずは、謝らう。

昨夜は失礼なことばかりしてしまったもの。

記憶が戻ったせいも手伝って、取り乱して無様な態度をとっちゃったから、ユエル様に不快な思いをさせたに違いない。

身体はまだ少し重い。けれど急いでベッドから降り、身支度を整えた。

まだ早いからユエル様は起きてないかもしれない。

だとしたらちよつと無作法になってしまつけど、それでもやつぱり、今日は一番に、ユエル様の顔を見よう。
ユエル様に、会いに行こう。

大急ぎで身なりを整えたわたしは、ユエル様の部屋へ向かった。
屋敷内で一番広い洋間がユエル様の私室になっている。わたしの部屋からも近く、同じ二階。

ドアの前に佇み、深呼吸をしてから、ためらう気持ちを押しやつて、ノックをした。

返事はない。

やっぱりまだ寝てるのだろう。朝の六時。この時間にユエル様が起きていたことつて、滅多にない。徹夜してた時は別として。

少しためらつた後、静かにドアを開け、そつと室内を覗きこんでみた。顔一つ分くらい開けたくらいでは、ベッドのあるところまでは窺えない。

入つちやつても良いものだろうか。でも、入らなければユエル様を起しようもない。

まさかこんな所から大声を張り上げて起床を促すのは傍迷惑だろうし、どうしたものかと二の足を踏んでいたら、ふいに声がかつた。

「いつまでもそんなところで覗き見していないで、入りなさい、ミズカ」

「……っ！」

不意をつかれ、髪の毛が逆立つてるんじゃないかってくらいに驚いて、思わずひゅつと息を飲んだ。

ユエル様は僅かに開けられたドアに手を添えている。

いつの間にかやってきたものか、足音も聞こえなかった。

「お、起きてたんですか、ユエル様っ？」

「そんなに驚かなくてもいいと思うが」

「た、だってだって！ ユエル様がわたしより先に起きてるなんて、数えるほどもないくらいですし」

「そういう時は“数えるほどしかない”という言い方が正しいね」

ユエル様はわたしの軽口を、軽口で応えてくれた。そしてわたしを部屋に招きいれてくれた。

ユエル様はすでに夜着ではなく、薄い浅黄色の綿シャツと着古した感のあるジーンズという、カジュアルな雰囲気 of 服装に着替えを済ませていた。……ううん、着替え途中、なのかしら。だって、シヤツのボタンはどれひとつとして留められていなくて、胸元は全開にはだけてる。下着、というのか、タンクトップとかそういうものをシヤツの下に着ていないものだから、なんとも目に毒な、丸見えの状態！ 目のやり場に困るんですけど！

「えーつと……その、改めて。おはようございます、ユエル様。珍しく、本当に“お早う”でございます」

「嫌味なら、もう少し遠まわしに言った方がいいね、ミスカ？」

ユエル様は嘆息し、やれやれと肩を落とした。けれど、不愉快そうでは全然なく、力みのない微笑を湛えていた。

ユエル様は手櫛で髪を整えながら、窓辺へと歩む。その背を見つめ、わたしは安堵のため息をこぼした。顔はちらつとしか見なかったけれど、不機嫌そうではなかったし、声にも重苦しきはない。……いつものユエル様だ。

「あの、ユエル様」

「ん？」

ユエル様はカーテンを開け、それから窓辺に寄りかかった。

雨はもうやんでいた。窓辺に滴が光っている。

ユエル様は額にかかる髪をしなやかな指で梳きあげ、寝起きのせいで少しだけ気だるそうな顔をわたしに向けた。

物憂げな表情が似合う美貌を向けられて、危うく眩暈を起こしそうになった。

綺麗な顔も三日続けて見れば慣れる、なんてよく言うけれど、並外れた美貌の場合、それは適用外だと思う。毎日毎日、どれほど見続けても見慣れるどころか、近頃は目があっただけで心拍数が跳ねて、平常心ではいられなくなる。

ユエル様の濃艶な美貌は、どれほどの月日がたつても色褪せない。まなざしの優しさも。

呆けそうになっていた気を取り直して、わたしは居ずまいを直し、低頭した。

「昨夜はすみませんでした、ユエル様。ご不快な思いをさせてしまったこと、お詫びします」

「……ミズカ」

言葉尻に、ため息が重なった。頭をあげ、ユエル様を見ると、苦笑が浮かんでいた。

「律儀だね、ミズカは。それを言い、わざわざこんな朝早くに、私のもとへ？」

「はい。すみません、朝はご迷惑かとも思ったんですけど」

わたしがそう言うと、ユエル様はまたため息をついた。けれど、迷惑顔ではない。苦っぽく口の端を上げ、眉を下げた。

「起こすついでとも思って来たんです。まさか起きてらっしゃるとは思わなくて、その手間は省けましたけど」

「ずいぶんと驚かせてしまったようだね。……それにしても」

ユエル様は苦虫を噛みつぶしたような顔をし、わざとらしい所作で再三のため息をついた。

「寝ていたらいたで、早く起きてください、いつまで寝てるつもりなのかと小言を言われ、起きていたらいたで、まさかだの珍しいだのと皮肉を連発されるとは。……やるせないね」

ユエル様の口調は、冗談口をたたくように軽くて、わたしを本気で責めているわけではないのは、わかった。わかつてはいてもやっぱりうるたえて、わたしは身を竦ませ、頬を赤くした。

「すっ、すみません、いつも一言多くて……っ！ あのと、えっと

……すみません、ユエル様」

「それがミズ力だし、いつものことでもあるから、別段不快ではないし、気にしていないよ。昨夜のことも」

「……………」

ユエル様はさり気なく先手を取り、そして流した。

もう終わったことだと、ユエル様は静かな微笑を湛えて暗にそれを語った。

だから、昨夜のことはもう蒸し返さない方がいい。

謝罪しきれなかったという中途半端な気持ちが残ったせいで、心はずつきりとは晴れなかった。

けれど、もうこれ以上余計な口をきいて、ユエル様にため息を吐かせたくない。

わたしは口を嚙み、視線を落とした。

20・天気予報

「ところでミズカ。今日の予定だが」

当たり前障りのない会話の糸口を差し出ししてくれたのは、ユエル様だった。

「店は開けるが、今日は、ミズカは休んでいなさい」

「え、でもっ」

お店に出るなっていう意味での「休んで」というのには、さすがに焦ってしまった。

やっぱり昨夜のこと、使用人にはあるまじき態度だと、不愉快に思ってるのかも？ だから頭を冷やして、一日、じっくりと反省していなさいってことなのかな？

どうしよう、やっぱりもう一度、きちんと謝った方がいいかな。何度謝っても、ユエル様に赦してもらいたい。

赦してもらいたいなんて、それも我がままだと分かっているけれど、でも……っ！

「ミズカ」

くすつと、ユエル様が小さく笑った。

「そんな不安そうな顔をしないで、ミズカ。昨夜のことは、本当にもう気にしていないから」

「や、やだもう！ そうやってまた考え読まないでください、ユエル様！」

わたしが情けない声を上げると、ユエル様は肩を揺らして笑った。

「そうはいつでも、分かりやすく顔に出ているからね」

「そんなあ」

わたしは頬を両手で覆い隠した。それを見てユエル様はまた可笑しげに笑う。リラックスしきった、とても柔らかい、ユエル様らしい笑顔にホツとした。

「休みと言ったが、実はアリアから、午後になったら買い物につき

あつてほしいという伝言を頼まれていてね。付き合つてやつて欲しい」

「ああ、はい。そういうことなら、分かりました。アリアさんのお伴をすればいいんですね？」

「そういうことだ。アリアのことだ、色々と振り回されるだろうから、午前中は体を休めておいた方がいい。……ミスカ、こちらへ来なさい」

「……はい」

一瞬ためらつたけれど、ユエル様の言葉に従つた。

「特別サービスだ。ミスカの今日の運勢を占つてあげよう」

「はい？」

唐突に、何を言い出すのかと思えば。

わたしは目を瞬かせ、とまどいがちにユエル様の顔を窺つた。ユエル様が浮かべているそれは、「営業用スマイル」だ。ユエル様の美貌観賞目的でやつてくる多くの女の子達に向ける、美しくも神秘的な微笑みだ。

ユエル様はサイドボードに置かれていたタロットカードを持ち、それを数回シャッフルした後、扇状に広げてわたしに差し出した。

「一枚引いて。好きなところから」

「……」

当たるんですか、なんて訊いたりはずせ、少しだけ考え込んだふりをしてから、一枚、カードを抜き取つた。そしてカードは裏向けのまま、ユエル様にお返しした。

「その顔は、信用してないって顔だね、ミスカ」

「え、それは、その……」

「本当にミスカは、嘘をついたりごまかしたりするのが不得手だね」

「うう、すみません」

「それは美德といえるよ、ミスカ。まあ、ミスカとしてはそれで困ることもあるだろうけどね？」

「……」

ユエル様、当たってます、その「占い」。と言いそうになったけれど、堪えた。「また皮肉かい？」と返されそうだ。皮肉のつもりなんてないけど、からかわれてるのかなとは思ったから、褒められているのかもしれないけれど、少しだけ複雑な気分だった。

「大丈夫。当たるよ、私の占いは、おおよそね」

「おおよそ、ですか？」

「そう……六割弱くらいは」

「微妙ですね」

「カードを抜き取ったその時点で、占いの結果を、カードを選んだ者自身が抜き取っている。占者はそれに注釈を付けるのが役目だ」

「はあ」

「そしてその注釈は、カード本来の意味に加え、占者の勘がものをいう。私は、勘が良いからね」

「そういえば、そうかもしれないですね」

勘というより、単にあてずっぽうという気もするけれど。それは言わずにおいた。

「まあ、そんなわけだから、そこそこに当たるよ、ミズカが当たると信じて聞いてくれたなら」

「はあ……そうですか」

何だか、短時間の間にどっと疲れましたけど、ユエル様……。

だけど、肩にこもっていた妙な力みが、それで落ちた気がする。疲れたけれど、気持ちは軽くなったような。

ユエル様はにこにここと笑ったまま、それからカードを表向けた。

女の子達相手に占いをする時、いつもこんなに愛想を良くしているんだろうか。

ふと、そんなことを考えて、何故だか胸がチクリと痛んだ。

「カードは『太陽』だ」

「良いカードなんですか？」

占いの店の手伝いをしているくせに、ユエル様が商売道具として使っているタロットカードについて、わたしはあまり詳しくない。

見せてもらった『太陽』のカードの不可思議な絵は、悪い結果が出そうなデザインではなさそうに思えた。けれど、『太陽』と吸血鬼の組み合わせは、果たして良い符牒なんだろうか？

「良いカードだよ、とても。……そうだな」

意味ありげに小首を傾げ、しみじみとカードを見やった後、ユエル様は視線をわたしに戻し、そしてユエル様は典雅に微笑んだ。

「少しだけ、何かトラブルめいたことがあるかもしれないけれど、結果的には良い方向へと向かいそうだ。あまり暗く考えすぎないのが良いね」

「……………」

「太陽のカードは、大アルカナの十九番。希望や完成、活力などを意味するカードだ。ミズカが引いた時には正位置だったから、そのまま良い意味を成すカードとして受け止めていい。ただし、太陽のカードは、太陽の烈しさゆえに、マイナス要素も多少含まれている。ミズカに当てはめて考えるならそれは、渴きには注意しなさい、ということだろうね。……それから」

「はい」

わたしは神妙な面持ちでユエル様の占い結果を聞いた。六割弱の当たり率なら、もしかしたら当たるとも思えないと思って。

「午後からは、晴れそうだ」

……………はい？

ユエル様は窓の外に視線を流して、そう言った。

それからもう一度わたしの方に向き直り、

「天気が回復すれば、気分も良くなるだろう」

そう、付け足した。

「……………ユエル様。それ、占いじゃなくて、天気予報です」

「天気予報も占いの一種だよ、古い歴史のある、ね」

ユエル様はしれつと言つてのけるけど。

でもそれって……………屁理屈な気がするんですけど、ユエル様。

わたしは呆れた顔をユエル様に向けてしまっていた。ユエル様は

泰然と構えていて、わたしの呆れ顔もまったく気にしていない風に微笑んでいる。

こうしたやりとりは、ユエル様なりの気遣いだったのだろう。それに気づいたのは、後になってからだ。

ユエル様はおもむろに、タロットカードを持っていない方の左手をわたしに差し出した。

「ミズカ、太陽のカードから渇きに注意の占い結果もでたことだ、一応、念のために飲んでおきなさい」

「え、いえ、いいです、あの……」

わたしはふるふると首を横に振って、身を引こうとした。

ユエル様はわたしが断るのを予想していたのだろう。強引にわたしの手を掴み、繰り返して言った。「少しでもいい、飲んでおきなさい」と。

また、ユエル様に見透かされてしまった。

もう渇き始めてる。飲ませていただいて一日、二日でもう渇き始めるなんて、今までになかった。

渇ききっているわけではないけれど、物足りなさを感じて、落ち着かない。

「すみません、ユエル様」

渇きのせいでまた倒れるようなことがあつては、さらに迷惑がかかってしまう。

そう考え直して、生気を、飲ませていただくことにした。

ユエル様の手をとり、指先から、生気を吸い上げていく。

それは、ほんの数秒間のこと。

満ちたという感にはつきりと得られなかったけれど、もう飲めないだろうと思う程充分に飲ませていただいた。

「ありがとうございます、ユエル様」

それからすぐに、ユエル様から手を離れた。それと同時に、わたしは後ろへ一歩、足を退ひいていた。

「……ミズカ」

ユエル様の手が伸び、わたしの頬に触れかけた。けれどその手はわたしに触れることなく、空を掴んでおろされた。

「コーヒ―を淹れてきてくれないかな。熱いのを、ね」

ユエル様の双眸が、艶をおびた濃緑に沈む。言いかけた言葉を無理に飲み下してしまった、そんな表情だ。

でも、わたしにそれを訊く勇氣はなく、口にしたのは了解の返事。そして、笑顔をつくった。作り笑いなのは、ユエル様には分かってしまっただろうけど。

「あの、ユエル様。……ありがとうございます」

顔を上げ、まっすぐにユエル様を見つめてもう一度礼を言った。

「礼を言われるようなことはしてないと思うが？ 生氣のことなら

……」

「それだけじゃないです。それだけじゃなくて、ちゃんと……言うておきたかったです」

「律儀だね、ミスカは」

ユエル様は少し呆れたように、けれどとても穏やかなまなざしをわたしに向けてくれた。

「それじゃあ私も、どういたしましてと言っておくべきかな」

茶化すようにそう言ったユエル様の瞳は、優しく、だけどどこか寂しげな色を含ませていた。

胸が、わけもなくドキドキしはじめる。

「あのっ、じゃあわたし、コーヒ―、すぐにお持ちしますから！」「慌ただしくそれを言ってから、わたしは踵を返し、小走りになつて部屋を出た。

そして、ドアを閉めてから、

「ごめんなさい、ユエル様」

俯いて、呟いた。

21・青雲と夏姿

果たして。

ユエル様の「占い」は的中し、午後の空には太陽が姿を現し、燦々と輝いていた。

真夏の避暑地は大賑わいだ。

お土産屋さんが軒を連ねているシヨツピング街は、人だかりのせいでまっすぐ歩けないくらいに賑わっている。

背が低いからなのか、それとも単に鈍^{どん}くさいからなのか、わたしはやたらと人にぶつかっては足を取られ、もたついてしまう。そのせいで、度々随伴している方に心配をかけてしまう。足元の覚束ない小さな子供でもあるまいし、我ながら本当に情けない。

本日お伴をさせていただいてるアリアさんは、雑踏をかき分けて歩くのがお上手だ。人とぶつかる割合は低い。向こう側から避けてくれるってこともあるだろうけど。何しろ目を瞠るほど華やかな雰囲気を持った金髪碧眼の美女だもの。自然と人ごみが左右にひらいて、道ができる。

それにしても、踵の高いピンヒールを履いているにも関わらず、アリアさんの足取りはとても軽やかだ。見るからに歩きにくそうな靴なのに、アリアさんは颯爽とした歩行で、つんのめったり躓いたりもしない。

ついでに言えば、アリアさんの本日のお召し物は地色はオフホワイトのドット柄のシフォンブラウスト、すらりと長い脚線美を惜しげなくさらす、黒のタイトスカート。肌の露出は多いけれど、上品に着こなしていて、ため息が出るほど美しい。

「ずっと爪先だって歩いている状態ですよね、その靴だと。すごいですー!」

思わず感嘆して言ったわたしに、アリアさんは屈託なく笑って応えた。

「ふふ、こんなのは慣れよ、慣れ。ああ、でもね、こっちに慣れきっちゃったものだから、ローヒールの方がかえって疲れるようになっちゃったのよ」

そう言ってからアリアさんはちょっと困ったような顔をして、語を継いだ。

「だけど、別荘地の中は舗装されていないところが多いから、そういった場所はピンヒールだとちょっと不便でアブナイわね」

今朝方のことだそうだけど、苔むして湿った土にヒールの部分が全部埋もるほど突き刺さって、危うく派手に転ぶところだったのよと語って、アリアさんはご自分のことなのにこころごと可笑しげに笑った。

その点、ショッピング街はちゃんとコンクリート舗装されているから安心ね、と言って。

さて、そのショッピング街はというと、一部地区は車両の乗り入れが禁止され、“歩行者天国”となっている。もちろん期間限定。

人も多いから当然車の数も多い。

一部地区の道以外の公道は観光バスやタクシー、自家用車がずらっと並んで渋滞している。ほとんどの駐車場で、満車の看板が出るくらいの混雑ぶり。レンタサイクル（貸し自転車）の数も多くて列を成してた。

とにもかくにも、大賑わいのショッピング街。

威勢のいい客引きの声、ひと時も落ち着いてられない子供達の騒々しい声、浮かれてはしゃぐ女性達の甲高い笑い声、観光バスの添乗員さんの人を探す慌てた声などがあちらこちらで飛びかって、ユエル様が好む清閑さには欠片も存在しない。

それでもたぶん今日はまだ、観光客は少ない方なんだと思う。まあお盆前だし、平日だから。今だって十分すぎるくらいに混雑しているけど、これはまだ前哨戦といったところなんだと思う。

何年前だったか、こことは別の避暑地でお盆の期間を過ごしたことがあった。そこも有名な観光地だったから少し詰め状態に観光客がこった返し、人口密度が上がったせいで気温まで上がり、「避暑地」の意味なんてなくなってた。

ユエル様も心底うんざりした顔で歎息し、それでも「仕方ない」と若干諦め気味ではあった。

「これでも街中に居るよりはずっと涼しい方なのだからね。それに観光シーズンは、観光客目当てに商売をしている地元民にとっては書きいれ時だ。しゃかりきになって観光ムードを盛り上げようとするのも当然だろう」

地元民にとってあまり有り難くないレジャー施設も多くあるのだけれどねとユエル様は言下に足し、さらに「遠路はるばるやってくるほとんどの者が、避暑が目的ではないからね」と語を継いだ。

時代感覚の鋭いユエル様に、わたしは日本の行事や社会構造、その他諸々の事を教わった。ユエル様は飽き性なところも多々あるのに、わたしに関しては……だと思っけれど……、とても根気強く、ゆっくりと丁寧に、時代に対応した教育を施してくれる。そして、うまく時代感覚を掴めないわたしをサポートしてくれた。

……わたしって、本当に……ユエル様に迷惑をかけてばかりだ。

「ねえ、ミズカちゃん？」

「あ、は、はいっ!？」

いけない!

並んで歩くアリアさんのことを、一瞬忘れてしまった。

声をかけられて、わたしは慌ててアリアさんの方に顔を向けた。

「八月の中旬って、たしか仏教の……お盆って呼ばれる時期よね？ そのお盆はお墓参りに出かける時期だって聞いたんだけど、違うのかしら？ そろそろそのお盆の時期のはずだけど、なんだかそんな雰囲気じゃないわよね？」

アリアさんが、不思議そうに訊いてきた。

日本へは度々訪れ、長らく滞在したことのあるアリアさんは、日本の伝統的な習慣や行事についてある程度の知識はあるみたい。だからこそ、「よくわからない」と思うことが多いようだ。

わたしは少し考えてから、答えた。

「基本的には、ちゃんとお墓参りに行く時期ではあるんです。帰省ラッシュなんて言葉もあるくらいで、生まれ故郷で親戚一同集ってお墓参りに行く人はまだまだ多いみたいです。だけど昨今ではお墓参りは事前に済ませて、海外旅行に出ちゃう家族も多いみたいです」「ふうん、そうなの。バケーションだからって遊んでばかりもいられないってところなのかしら？ お墓参りにも行つて、レジャーも楽しむとなると、なかなかタイヘンね」

アリアさんはなるほど得心し、それから少し皮肉めいた笑みを浮かべた。

「それにしても、土産屋の多いのには驚いたわ。観光に来るといよりは、観光地の何かを買って帰る目的で来ているみたいね？ 日本人って、オミヤゲっていう買い物義務に思ってるような感じを受けるわ。買って帰って、配らなきゃ、みたいな」

「そう……ですね」

わたしが苦笑で応じると、アリアさんは呆れ顔をやりわりと穏やかな微笑に変えた。

「だけど、買い物自体がけっこうな娯楽よね？ 買っても買わなくても、いろんなお店を見て回るだけでも楽しいわ」

もしかして、気を遣わせてしまったのかもしれない。「日本人」の、わたしに。ううん、もしかしなくても、きっとそう。

ユエル様にしても、アリアさん、イスラさん、そしてイレクくんも、みんな鋭くて、優しい。

わたしの心を読んだみたい、思いもかけなかったことを聞いてきたり、気遣わしげな笑みを向けてくれたりする。

だから、アリアさんがわたしを誘い出してくれたのも、そうした気遣いだったのかなって思った。もしかしたらユエル様から何か話

を聞いていたのかもしれない。……これは邪推といってもいい憶測だけだ。

「シヨツピングは女の特権！　そして得意芸だもの。買いまくりましようね、ミズカちゃん！」

アリアさんは朗らかに笑ってわたしの腕に、しなやかな腕を巻きつけてきた。

「一緒にシヨツピングしましょ」というアリアさんのお誘いに応じたわたしは、真っ白いワンピースを着ている。アリアさんがワードローブから探し出し、選んでくれた。裾にフリルがあるひざ丈のワンピース。こんな可愛らしい服があったのかと驚いた服だった。

普段着なれない服だから、着るのにちよつと躊躇ってしまった。

「ただどアリアさんに」とつても似合うわ」と褒められては、別のものには着替えられず、恥ずかしさを押し込めて、袖を通した。

ワンピース一枚では心もとなくて、薄い生地 of 藍色のボレロを羽織った。半袖のボレロは、透け感はあるけれど肩から肩甲骨あたりまでちゃんと隠せる。背中は、できればきつきりと隠しておきたかった。

「ねえ、ミズカちゃん？　服を漁ってて気づいたけど、シンプルとつか、質素なものが多いのね？　アクセサリー系もないし……ユエルが用意してくれないの？」

アリアさんが、少しばかりユエル様を非難するような声音で訊いてきた。

「そんなことはないです。このワンピースだけじゃなくて、他にもたくさん買って下さいます。それこそわたしには似合わなそうな、可愛すぎる服も勧めてくれて……。でも、仕事をするのにはやっぱり動きやすいものがいいですから、シンプルなものを選んでは、買っていたらいいんです」

とはいっても、ユエル様の趣味も大いに取り入れている。

ユエル様は趣味も良いし、わたしなんかよりはるかにセンスも良い。それにユエル様もシンプルな衣服を好まれるようだから、買ってきてくださる服は大抵わたしの好みとも合致する。

ただ金銭感覚がけっこう大雑把だから、ちよつと無節操に買い過ぎなのではと思う事もあって、控えるよう進言したりもするのだけど。

「仕事？ ……仕事、ねえ……。そう。そうなの。ミズカちゃんはそんな風に考えているのね。ユエルが踏み出せないでいるのも、わかる気がするわ」

「え？」

「ミズカちゃんがそう思ってしまうのも無理はないけれど、少し…困ったものね？ 困りものねってというのはミズカちゃんが、じゃなくて、ユエルよ？」

アリアさんの言葉の意味が分からない。

ユエル様が、困る……？

わたしのせいで、ユエル様が何か困っているというのなら、……どうしよう……。

「あらあら、ミズカちゃん、今、見当違いのことを考えちゃってるでしょ？ そんな不安そうな顔をしないで。大丈夫よ」

アリアさんは優しく微笑み、わたしの頭を撫でつけた。

……そういえば昨夜、イスラさんにもこんな風に頭を撫でられた。子供を宥めるような……落ち着かせるような、そんな優しい手つきと微笑みで。

そりゃあ、お二人にしてみたら、わたしなんて子供のようなものなんだろう。年齢差や経験値を考えてみれば当然のことだ。だから子供扱いされることに關しては不満もないし、ましてや不快感なんてまったくない。

ただ、慣れなくて戸惑ってしまふ。

ユエル様がわたしにかけてくれる優しさとはまた別種の優しさだ。親切というのが近いかもしれない。ユエル様のそれよりもずっと直

截な表し方をするから、すぐに対応できなくて、あたふたしてしま
う。……もつとも、ユエル様が示す優しさにもうるたえがちなのだ
けど。

どうして困ってしまうのか、分からない。わたし自身の気持ちの
問題なのに、その気持ちの正体が分からず、それが焦りに通じてし
まうのかもしれない。

そしてまた心配をかけてしまうのだ。ユエル様やアリアさんに。
アリアさんはちょっと首を傾けて、わたしの困惑顔を覗き込んで
た。

「ミズカちゃん、もうちょっと肩の力を抜いて。ね？」

「えっと、……はい」

もうこれ以上、アリアさんに無用の心配をかけてはいけない。肩
の力を抜くべく、深く息を吐き出した。

そんなわたしを見て、アリアさんは青い瞳を細めて小さく笑った。
「ユエル達つたらね、つれないのよ。あたしの買い物には付き合い
きれいななんて言うんだもの。とびっきりの美女と連れだって歩け
るっていうのに、男気がないわよねえ？」

舌足らずな声と、拗ねた子供のような口調と仕草が、アリアさんの
華麗すぎると言っていていい外見からくる近寄りがたい雰囲気や和らげ
ている。

「だからってわけじゃないけど、ミズカちゃんとうとうして出掛けら
れて嬉しいの。ミズカちゃんもそう思ってくれたら嬉しいのだけど」
「はい！ それはもちろんです！ 誘ってくださいさって嬉しかったで
す。ほんとに、ほんとです」

「そう？ なら、よかったわ。じゃ、早速見て回りましょ！ 気に
なってるお店がいくつもあるの」

「はい、お供します！」

なるべく明るく元気な声を出して応じ、意気揚々と歩きだしたア
リアさんについていった。

22・そぞろ歩き

慣れないといえば、「ウィンドウショッピング」というのもそう
だ。

買い物には一人で出かける事が多いから、いろんなお店をゆつくり見て回る機会は少ない。ユエル様を放って、のんびり買い物に興ずるなんてできないし。

ユエル様とともに出掛けることももちろん何度かあったけれど、ウィンドウショッピング的なことはしたことがないような気がする。たとえ最初から行く店を決めず、なんとなく買い物に出かけようかという気軽な気持ちから出掛けたとしても、ユエル様は基本的に自分好みでない店や用もなさそうな店にふらりと立ち寄るなんてことは滅多になさらない。

目的地の無い散歩は好まれるのにつて、少し不思議。

雑踏する街中を歩くのを好まれないのだろう。それはわたしも同じだから、ユエル様の気持ちが分からないでもない。

それにつけても、ユエル様の買い物の仕方は素っ気ない。

ショーウィンドウに飾つてあるもので、目に留まり、気に入ったものがあつたら即決即断で購入してしまう。自分の好みのデザイン、質、そしてサイズさえ合つていれば、値札すら確かめずに購入する。気に入ったものは「全て包んでくれ」と迷いも見せない豪気っぷり。ちなみに、ユエル様の立ち寄られる服飾店は、高級店ばかりだ。

好みのメーカーやデザイナーズブランドがあるわけではなさそうだけど、ユエル様は無意識的にご自分の麗姿にあつた高品質の物を選んでいる。そして高級店の店員さんも、さすがにプロだ。ユエル様の嗜好をさり気なく聞きだして、頭の前から爪先まで、ユエル様に似合うものを選出し、スタイルを提案してくるのだ。ユエル様も意見を出しつつも大抵は店員さんの勧めるそれに満足し、まとめて購入する。無駄な時間をかけない、即決即断の買い方だ。

わたしの服を買ってくださる時もそうだ。わたしがどれにしようかと選びかねていると、「気に入ったのなら全て買ってあげばいい」と言つて、さつさとレジを通してしまふ。レジを通す前に慌ててユエル様を止めるのだけど、手遅れになつてしまふことが多い。

それでも、わたしの衣服を買う時は、試着を勧めてきたりなんかして、わりあいゆつくりと付き合つてくれる。迷つたあげく買わないことがあつても、わたしの優柔不断さを怒つたりはしない。呆れ顔で苦笑し、ため息をつきはするけれど。

ユエル様にとって買い物……とくに服飾系のシヨツピングは、嫌いとはまではいかなくとも、面倒に感じるものの一つみたい。

「ユエルは何事に関しても面倒くさがりだものねえ！ 今日だね、実はユエルも誘つたのよ？ そしたらあたしのシヨツピングになんかとてもつきあつてられないって、思いつきりイヤそうな顔して断つてきたのよ。もうほんと、失礼しちゃうわよねえ」

と言つて朗らかに笑つたエリアさんは、ユエル様と違って買い物好きのようだ。ユエル様にすげなく断られても別段気にする様子もなく、浮き浮きと足取りも軽くシヨツピング街に繰り出し、ウインドウシヨツピングを思いきり楽しんでる。

シヨツピング街といっても山中の観光地だから、種々雑多のお土産屋さんや、レストランを含む食べ物関係のお店が圧倒的に多い。

だけど輸入雑貨等を扱つたおしゃれで可愛いお店もいくつもあるし、革製品や絹やレースなんかの専門店、服飾店もいくつあつて、エリアさんはそうしたお店を蝶々のように身軽に渡り歩いては、気に入つたものを購入し、あれよあれよという間に荷物が増えていった。

そして今は、スワロ………なんとかいうクリスタル・ガラスのアクセサリー店にいる。

ええつと……スワロフスキー、かな？

店頭に置いてあるカタログを手にとって確かめてみた。

オーストリアで創立されたクリスタル・ガラスの製造メーカーのことで、創業者のダニエル・スワロフスキーから付けられた、とのこと。百年以上もの歴史があるクリスタル・ガラスで、主にアクセサリーに使われているみたい。ビーズ・アクセサリーとはまた違った高級感があって、とても綺麗だ。

「スワロフスキーもビーズも歴史はそれなりにあって、アンティークやヴィンテージものもあるのよ。宝石に劣らない魅力があって、とても好きなの」

アリアさんがそう言うように、スワロフスキーのアクセサリーはどれも目がくらむほど素敵で綺麗で、……そしてお値段もけっこう高かったりする。お値段の方にもちょっと目がくらんだりして。

「あら、このネックレス、素敵。ね、どう、ミズカちゃん？ 似合うかしら？」

「はい、とても」

アリアさんが手にとって自分の胸元に当ててみたのは、楕円形で深い紅色のペンダントトップのついたネックレス。照明の下、それは虹色にキラキラまばゆく光って、アリアさんの豪華な金の髪と白い肌によく映えた。店員さんもこそとばかりに褒めちぎって、他の品物も勧めてくる。

「そうねえ、ミズカちゃんにはこれが似合いそう。デザインもシンプルで可愛いし。ほら、ちょっと当ててみて？」

「……は、はあ……」

そしてアリアさんがわたしのために選んでくれたネックレスは、ハート形のペンダントトップのついたものだった。色は、少しくすんだ感じの水色で、それでも照明の当たり具合によって、様々な色に変化して、とてもきれいだった。

おそろいのイヤリングもございます、と店の人が勧めてくれたそれまでアリアさんにつけるよう言われて、不慣れな手つきで耳につけてみた。

「ミズカちゃん、とってもとっても似合うわ！ それにしましょ。ね？」

「え、あの……」

「他に何か気に入ったものがあつたら言つて。ね？ さつきからあたしが選んではかりだもの。ミズカちゃんが欲しいと思うものがあつたら、遠慮なく言つて？」

「……でも、こんな……買っていたらばかりで、申し訳ないというか……」

「そんなこと気にしないで、ね？ あたしが好きで買つてあげたいんだもの」

アリアさんは青色の瞳をキラキラと輝かせてわたしの顔を覗き込んでくる。ちよつと舌足らずで甘えたような声が、少女っぽい仕草と相まって、くすぐつたいほどの可愛らしさを感じさせる。

少女のような屈託のない笑顔がアリアさんの華やかな顔立ちをふわふわとした柔らかさで包み、気安げな印象を持たせている。アリアさんは一見、迫力ある稀代の美女で、道を歩けば遠巻きに眺める人が多く、近寄りがたい雰囲気がある。けれど実際はとても気さくな方で、その点、ユエル様とは違っている。

それにアリアさんはユエル様よりうんと感情表現がおおらかで、あけっぴろげな方だ。

「それに今日のショッピングの目的は、ミズカちゃんへの贈り物を買つことなんですもの！」

「……………」

何店舗か回っている間に、アリアさんはわたしに似合うからと言つて、服飾品を色々と買つてくださった。冗談めかして、「イスラには負けてられないものね」なんて言いつつ。

もちろんご自分のものもわたしのもの以上に買つてはいるのだけど……。

何度も辞退したのだけど、「あたしが買つてあげたいんだもの。あたしのわがまま、きいて？ ね？」つてお願いされては、強く断

りきれない。

ユエル様同様に、アリアさんも値段なんて見もせず、気に入ったら即購入。お金のことなんてまったく頓着しない。

事情が事情だからクレジットカードなんて持ってなくて、そのため常に現金払い。ちらりと覗き見たアリアさんの長財布には相当の額と思われるお札がきっちり入れこまれていた。

もしかして日本に滞在するために用意したお金なんじゃないかしら？ それを今日一日で遣いきってしまうのではと、他人事ながらひやひやしてしまう。

ユエル様もアリアさんも、そりゃあ、いちいち値段を気にしてお財布の中身と相談しながら買い物をするなんて似合わないけど、でもっ、もうちょっと控えめなお金の遣い方をしてくれたらいいのに！

ユエル様には常々、無駄遣いは控えてくださいと口を酸っぱくして言っているのだけど、すると、

「老後のために貯蓄をしておく必要はないのだから、使いたい時に使えるだけ使ってしまった方がいいんだよ」

という、刹那的な返答が戻ってくる。

そりゃあ、たしかに“老後”なんてわたし達にはない。ユエル様曰く、わたし達は常に“今”だけを生きている。そして何より、人間にその存在を知られてはいけない異界の存在なのだ。存在の痕跡は極力残さない方がいい。だから必要な財物は、必要に応じて手元に引き寄せ、遣いきってしまうのがいいのだと言う。

その理屈は分かる。

分かるけれど……目の前で湯水のようにお金を遣われると、かつてお金そのものに縁のなかったわたしとしては、どうにも落ち着かない。貧乏性だねとユエル様はからかって笑うけど、実際貧しい身分だったんだもの、当然だと思っ。

だから、内心ではアリアさんの豪気な散財っぷりを、「勿体ないですからもう少し買い控えてください」と、止めたかった。だけど、せっかくシヨッピングを心ゆくまで楽しんでいらっしやるアリアさ

んに水を差したくなくて、ずっと我慢していた。

とはいえやっぱり、わたしへの過剰なほどの“贈り物”のいくつかは、さすがに遠慮させていただいた。アリアさんは残念がったけど、わたしの気持ちを汲んでくれて、無理押しだけはしてこなかった。

「ミズカちゃんて、アクセサリー系はほとんど持っていないでしょ？ 身につけるの、嫌い？」

「え、いえ、そんなことは……嫌いではないですけど……」

わかりませんと曖昧に返答すると、アリアさんはちょっと呆れたような顔をして嘆息した。

「たしかにゴテゴテつけるのはミズカちゃんには似合わないわね。

だけど、嫌いじゃないわよね？ 楽しそうに見てたし」

「はぁ……」

「ユエルも、ちょっとしたアクセサリーくらい買ってあげればいいのに。まあ、でもそれも無理かしらね？ ユエルって基本は敏いのに、妙なところで鈍感なところがあるから」

しかたがないわねと、アリアさんは楽しげな笑顔を浮かべた。

「ここはあたしが、ユエルの代わりに買ってあげなくちゃね」

そう言って、アリアさんはネックレスやイヤリングをわたしに似合うだろうものを選び、買ってくださった。負担にならないようにと、ほんの四、五点。

買っていたいただいたスワロフスキーのアクセサリーはとても素敵で、買っていたいただいたということ自体は心苦しかったけれど、やっぱりとても……嬉しかった。

アリアさんはそんなわたしの心を読み取ったのだろう。

買ったばかりの水色のイヤリングを包み袋から取り出し、今着ている白いワンピースにも似合うからと、耳につけてくれた。

「せっかくなんだし、このままつけてるといいわ。とてもよく似合っつて、可愛いもの！」

アリアさんはまるで自分の事のように嬉しそうにはしゃぎ、笑っ

ている。

「そうだわ、きっとユエルも喜ぶわよ。ね、ミスカちゃん？」

「そ、そうで、しょうか……」

わたしは返答に窮して、ちよつと俯いた。

ユエル様が喜んでくださるかどうかは分からない。似合うと言っ
てくださるかどうかも。

でも……少しは気に留めてくれる……かな？

イヤリングなんて今までつけたことないから、「どうしたのか」
と問いかけてくるかもしれない。そう……きつと、からかうような

……悪戯っぽい笑顔を見せて。

そんな場面を想像したとたんに恥ずかしくなって、頬が熱くなっ
てきた。

そしてアリアさんは、頬を赤らめているわたしを見やり、優しく
目を細めて微笑んでいた。

23・フレンズ

スワロフスキー専門のアクセサリー店のすぐ隣にオーブンカフェがあつて、わたしとアリアさんはそこで一息入れることにした。

昼食を摂る必要のないわたし達だけど、喉は渴く。汗だつてかくから、嗜好品としてだけじゃなく水分を取るのは必須のこの季節だ。吸血鬼であるわたし達が熱中症にかかるかどうかは分からないけれど、渴ききつて倒れてしまうのはあり得ることだ。……身に覚えがあるもの。気をつけなくちゃ。

だからわたしの方から、喉も渴いたことだし、お茶でも飲みませんかと誘つた。

アリアさんは「ええ、そうしましょ！」と即答してから、うふふと悪戯っぽく笑つて語を継いだ。

「さすがに歩き通して渴いてきちゃつたから、さっきのお店でちょっと飲ませてもらつちやつたのよ」

「もしかして、店員さんからですか？ ……いつの間に……」
「ふふっ」

アリアさんが浮かべるそれは気紛れな妖精のようで、魔性っぽさがないでもないけれど、人口に膾炙してる吸血鬼のイメージからかけ離れてるだろう、まるやかで明朗な笑顔だ。

わたしが言つた「渴く」って、そつちの意味ではなかつたのだけど……。

でもまあ……事なきを得、アリアさんの渴きが癒されたのならよかつた。

「それはそれとして。何か冷たいものでも飲んで、一息つきましょ。

ね、ミズカちゃん」

「はい」

頷いて、わたしはアリアさんの後に従つた。

お昼過ぎ、オープンカフェはほぼ満席の状態だったけれど、運よく席が空いてそれほど待たされることもなく、席につけた。

ところで、ユエル様はあの美貌ゆえに、こうした人の多い場所に来ると非常に目立って、四方八方から視線が集中し、ざわめきが起ることもしばしばある。ユエル様はそれを辟易しつつも、やむないこととして諦め、且つ近寄りがたい雰囲気を全身に漲らせている。目立つという点では、アリアさんも同様だ。

アリアさんがカフェに足を踏み入れた瞬間、波立つようなどよめきが起こり、好奇に彩られた視線が集中した。金髪碧眼の外人が物珍しいというだけでなく、アリアさんの華やかで美麗な容姿はどうしたって注目を浴び、窺い見られてはひそひそ話され、関心事的になってしまう。

けれど当のアリアさんは注がれる視線を不快に感じたりはしないようで、すっかり慣れきっているようだった。不愉快な顔一つせず、見知らぬ人でも目が合えば、さり気ない微笑みで受け流すという余裕もある。アリアさんはコミュニケーション上手な方だと、つくづく思う。人懐こい性質だから、きつと友人も多いのだろう。

「ね、ミズカちゃん」

ふっと思いだしたかのように、アリアさんはぱんつと軽く手を叩いた。

席に着き、オーダーしたアイスコーヒーで渴いた喉を潤した、すぐ後のことだ。

「あのね、ミズカちゃんにお願いがあるの」

「はい、何でしょう」

「お願いというのもおかしいかもしれないけど、ミズカちゃんのこと、友達だと思っていいかしら？」

優しく笑って、アリアさんはそう言った。

「とっ、友達って……、わたしがですかっ？」

「迷惑？」

「迷惑なんかじゃ！ で、でもっ、友達だなんて、そんなの、とんでもないです！」

わたしは両手をぶんぶんと振った。暑さのせいではなく、汗が額から流れる。

だつて、友達だなんて！ そんなの恐れ多くて、簡単に頷いたりなんかできない。

アリアさんはちょっと上体を前に傾けて頼杖をついた。もう片方の手でストローの先をつまみ、グラスの中の氷をカラカラと音をたててかきまわしている。

「同性の友達つて、もういないのよねえ。同族で同性つて、なかなか見つけれないし出会えないのよ。だからちよつと淋しいなつて思つてて」

ユエル様のお母様とは親しい友人だつたそうだけど、その方が亡くなって以降、同族同性の友達はいなくなつてしまつたのだとアリアさんは語つた。

親しくなつた人間の女友達はたくさんいて、中にはアリアさんの正体を知つてもなお変わらずに友情を示してくれた人も複数いたという。けれど、人間と吸血鬼であるわたし達では、過ごす時の長さがあまりに違う。

映画や小説の中の吸血鬼のように、血を分け与えて“仲間”にすることもできない。

「私達は、酷く孤独な種なのだよ」と、いつだつたユエル様も自嘲めいた口ぶりで零したことがあつた。

その通りだろうと思わざるを得ない。

「耐え難い、というほどでもないのよ？ ただ、ほんの少しだけ淋しくなるの。語りあえる誰かが傍にいたらいいのにつて。女同士でね」

「……」

アリアさんの気持ちは、なんとなく分かる。

同性の友達がいたら、どんなにか心強いだろうと思つもの。

役立つたりそうでもなかったりする情報を交換し合ったり、他愛無い悩み事を相談したり、くだらない時事を笑いあったり、……そんな友達がいたら、どんなに楽しいだろう。

友達という存在自体、わたしにはなかったから。

正体を隠し、期間限定で学校にもぐりこんだこともあったけれど、友達を作るほどの時間はなかったし、勇気もなかった。どうしたら作れるのかも、分からなかった。

だからずっと憧れてた。高望みだと分かっていたけど、友達ができたらいいのにって、夢見てた。

アリアさんはわたしの動揺を宥めるかのように、ふわりと包み込むような穏和な笑みを浮かべた。

「ユエル達も、もちろん大切な友人だと思ってるわ。でもね、同性の友人がいないのは、やっぱりちよつと物足りないっていうか、淋しいの。だからだからミズカちゃんと同じく合えて、本当に嬉しいのよ。ミズカちゃんもそう思ってくれたなら嬉しいわ」

「それは……っ、わたしもとても嬉しく思ってます。だけど、……」

「

「それならもう友達ね、あたし達」

「そんな！」

「あら、やっぱりこおんな年上の友達はいやかしら？」

「いえ、そんな！　そういうことじゃなくて！」

お年のことも、それは……ちよつとはあるけど。嫌とかではなくて、単に目上の方なのにつて。でも、とまどうのはそれ以前の問題で……！

「友達だなんて、そんな、滅相もないですっ！」

思わず声の上擦ってしまう。

「……あのね、ミズカちゃん」

アリアさんは穏やかに凧く海面の青を思わせる双眸をわたしに向け、静かに語りだした。

「ミズカちゃんの昔のこと、少し、ユエルから聞いたわ。ユエルと

出会う前、どんな境遇にいたのか。どんな身の上だったのか」

「……………」
「でもね、ミズカちゃん。もう、今は違うわ。ミズカちゃんがユエルの着族になる前の頃は、たしかに身分階級に囚われ、差別される時代だった。だけど、今はそうじゃない。それは知ってるわね？」

「……………」
わたしは無言で頷いた。だけど、戸惑う気持ちは拭えない。

「差別がなくなったとは言わないわ。だけど、ミズカちゃん自身がそれに囚われたままではダメよ？　いつまでもそんなことにこだわらないで、ね？」

「……………」わたし、そんな、こだわってなんか……………」

「しみついた習慣というのは拭いにくいものかもしれないけれど、時々、ミズカちゃんは意識してそれを口にしてるように思うわ。違う？」

「……………」
わたしは俯いた。

アリアさんの言う通りだったから、今度は「そんなことはありません」って答えられなかったし、気まずかった。

今ほど自分が情けなく感じたことはなかった。

なんて言葉を返せばいいのか、ただの一言すら思い浮かばない。

「もつと自由になっていいのよ、ミズカちゃん。そして自分自身を解放してあげて。ミズカちゃんのためにならないわ。ううん、ミズカちゃんのためだけじゃないわ。そんなミズカちゃんを見ているのはとても悲しいし、……………きっとユエルは、ミズカちゃんと同じくらいに辛いと思うの」

わたしは顔をはつとして顔をあげた。

ユエル様が……………辛い？

そうかもしれない。

ユエル様は優しい方だもの。わたしが過去に囚われているのがかりに思っているかもしれない。だからこそ、……………あの記憶を封

じ込めていてくれた。

それなのに、いつまでもわたしが辛気臭い顔をしていては、ユエル様を落胆させてしまう。

そんなのわたしの望むところじゃないのに、どうしてうまく立ち回れないのだろう。

ユエル様の負担になんかなりたくないのに……。

アリアさんは気遣わしげな表情をし、眉を下げ、わたしを見つめて「ごめんなさいね」と語を継いだ。

「あたしつたら言い過ぎちゃったわね。ミズカちゃんのこと、責めるつもりなんてないのよ？　ただ、すこおしもどかしくって、心配だから、つい無遠慮なこと言っちゃって。……あらあら、ミズカちゃん、そんな泣きそうな顔しないで？　気に障ったのなら謝るわ」

「そんな……わたし、気になんて……」

「あたしね、ミズカちゃんがとても好きよ。もちろんユエルも」

アリアさんはわたしの様子を窺いながら徐にそう言った。

「だから二人には、今よりもっと幸せになってほしいの。そのためにミズカちゃんを応援したいって思ってるわ。友達として、ミズカちゃんを手助けしたいの」

「……っ」

泣きだしてしまいそうになったけれど、寸前で堪えられた。

うつん、堪えきれなかった。だって鼻が赤くなってるだろうことは容易に想像できるもの。鼻先がツンとして、痛い。視界がちよっぴり滲んで、アリアさんの顔がまともに見られない。

優しさって涙腺を緩ませる。嬉しいのに、どうしていいのかわからなくなってしまう。

何か言わなくちゃって思うのに、言葉が出ない。喉の奥が締まって、一言発したら、それを機に泣きだしかねなかった。

アリアさんは少し困ったような、心許なげな顔をしてわたしの様子を窺う。何かを言いかけたようだったけれど、代わりに小さく息を吐き、話をかえた。

「ミズカちゃん、そろそろ帰りましょうか。あんまり遅くなる
とコエルも心配するでしょうし」

「あ……そう、ですね」

応えてから、わたしは大急ぎで半分以上残っていたアイスコーヒ
ーを飲みほした。

水出しコーヒー（ダッチコーヒー）のコクのある濃い目の味は、
口当たりも良くてとても美味しかったけれど、わたしにはちよつと
苦く感じられるコーヒーだった。

「荷物もたくさんあることだし、タクシーで帰りましょ。ちよつと
ずるをして、店員さんと呼んでもらうわね？」

どうやら幻術を使って店員さんに言う事を聞いてもらおうようだ。

アリアさんは近くにいた店員さん呼び寄せると、にこりと微笑み
かけて、こともなげに術をかけた。

「タクシーを呼んでちょうだい、今すぐ」

笑みの優しさとは裏腹に、語気はとても鋭い。店員の女の子はこ
つくりと木偶人形のようにぎこちなく頷くと、身を翻してレジのあ
る方へと向かった。

程なくして、タクシーが店の前に着き、アリアさんは支払いを済
ませて「いきましょ」とわたしを促した。

「今日はいっぱい買い物できて楽しかったわ。寄りたいお店はまだ
まだあったし、また一緒に来ましょうね、ミズカちゃん」

「あ……はい。わたしも楽しかったです。いろいろ買っていただ
いて、あの……ありがとうございます」

素直に賛同し、礼を述べると、アリアさんはちよつと小首を傾げ、
円やかな笑顔を返してくれた。

「どういたしまして。そう言ってもらえて、とっても嬉しいわ」

アリアさんの笑顔は、美しいだけではなくて大らかで、包み込ん
でくれるような寛容さがある。

その笑顔に、胸がきゅうつと締めつけられる。

温かな何かが胸に……全身に沁みいつてくる。甘い芳香に抱擁さ

れているようで、その安堵感に切なさすら覚え、泣きたくなくなってしまう。

　　アリアさんに、記憶にすらない人への思慕を重ねているのかもしれない。

　　どんな女性だったのかと想像することすら能^{あた}わない、見知らぬその人……。

　　だからやっぱり戸惑ってしまうのだ。アリアさんの「友達」という言葉に。

24 嵐の先触れ

今日は、ユエル様の“占い”が当たって、照りつける陽射しが素肌に痛いほどの晴天となった。昼過ぎから多少雲が出てきたけれど、雨の気配はない。

高原地の日暮れは早い。降り注ぐ陽光は淡い黄昏色を帯びていたし、落葉樹や針葉樹の梢を揺らす風には夕暮れの気配が匂っていた。「今日はずいぶん歩いたわねえ。行きは歩きだったし、いろいろ連れ回しちゃったから……。ミズカちゃん、疲れてない？」

「あ、はい。歩くのは好きですし」

「そう？ ユエルと一緒にだとあんまり出歩かなさそうだけど、それでもいいのかしら？」

「ユエル様は、基本的には出不精なんですけど、時々散歩に出て、わたしもそれについていきますから」

「あら、ちよつと意外ね。ユエルってひきこもってばかりいると思ってたわ」

いえ、普段はひきこもりなんです。着替えも億劫がるくらいに。わたしがそう応じると、アリアさんは、「まあ、夜行性でひきこもりなのは、あたしたちの生態ではあるものね」と笑って答えた。

たしかに、青空の下を樂しげに闊歩する吸血鬼というのは、なんとなく様にならない。

「億劫だ面倒だと言ってひきこもってばかりいたけど、ミズカちゃんのお陰でユエルも大分外に出ていけるようになったみたいね。いいことだわ」

「今も、わりとひきこもりがちなんですけど……」

「マシになったのよ、あれでも。昔は“冬眠”ばかりしてたから」

「そういえば最近は冬眠しようかとは言わなくなりました」

「あら、それはいい傾向ね」

そんな他愛無い話……タクシーの運転手さんが思わず首をかしげ

るような、そんな話をしている間にタクシーは屋敷前に到着し、わたし達は大量のショッピングバッグを抱えてタクシーから降りた。アリアさんは「今日の戦利品」を両手に提げ、「荷物持ちにイスラを誘うべきだったわね」と小さく笑った。

たなびく雲の隙間から、黄金色の光が幾筋もこぼれ、地上を眩しく照らしていた。木立を吹き抜ける風は心地よく、日陰に入ると少し肌寒く感じる。

「ミズカちゃん、大丈夫？ 呼び鈴鳴らして、イスラかイレクを呼びましょうか？ ユエルでもいいけど」

「いえ、このくらい大丈夫です」

わたし達が今仮住まいにしている洋館の正面玄関には、『占いの門』と書かれた看板がさげられている。その看板のすぐ下に、出掛ける時には『OPEN』というプレートがかかっていた。ところが今は裏向けられ、『CLOSED』になっている。

どうやら今日の営業は終了したようだ。ずいぶんと早い閉店時間だけど、営業時間は店主の気まぐれで変わるから、別段珍しいことでもない。人の往来はなく、通り過ぎるのは金色の光を帯びた夕風だけだった。

両腕に幾つものショッピングバッグを抱えたまま、腕と肩をつかって、重い玄関扉を開けた。……と、リビングから話し声が聞こえてきた。ユエル様の声と、聞き慣れた女の声だった。

わたしとアリアさんは顔を見合わせた。アリアさんは小首をかしげ、「客がまだいるのかしら？」と目で訊いてくる。

別に足音をしのばせる必要なんてないはずなのに、なんとなく声もひそめ、物音をたてぬよう、静かにリビングへ近づいた。リビングのドアは半開きになっていて、わたしとアリアさんは首を伸ばし、こっそり中の様子を窺った。

リビングにいたのはユエル様と、常連客の亜矢子さんだった。

後ろ姿でも、その居丈高な態度で亜矢子さんと分かる。背中を大胆にあけた小花プリントのノースリーブワンピースの派手な色が、

落ち着いた色合いにまとめているリビング内で浮き出っで見えた。

二人きりで、立ち話をしていた。和やかな雰囲気とはかけ離れた、ピリピリとした空気が漂っている。

「あまり褒められた趣味ではないね」

ユエル様は腕を組み、厳しい面持ちで吐き捨てるように言った。いったい何事だろう。

亜矢子さんに対してあんな険しい顔を見せたことはなかった。いったって慇懃に対応し、営業用の笑顔を崩さずにいたのに。

「趣味ではありませんけど、これも上流階級の愉しみというものですわ。というよりも、当然の危機管理と言えますわね」

こちらに背を向けているから表情はわからないけれど、亜矢子さんの居丈高な口調は相変わらずに聞こえた。

けれど、いつもと違っていている気がした。

媚態をつくり、しなだれかかるとしてユエル様に迫るいつもの亜矢子さんとは雰囲気違った。密着しようとするどころか、亜矢子さんの方から踏み込めない距離をユエル様との間に置いている。「下卑たことをすると軽蔑しておいでなのようですけど、よくよくお調べにならなかったユエル様の落ち度、危機管理の甘さのせいですわ」

「……………」
ユエル様は眉間を寄せただけで、言い返しもしなかった。

亜矢子さんは、ユエル様の険しい表情に満足を得ているようだった。足しげく通い、高価な物を贈ってまで媚を売っていた亜矢子さんが、いったいどうしたことだろう。

「でもご安心なさって。今すぐどうこうしようなどとは考えておりませんから」

「……………」
「それに、ユエル様に不利益な話を持ちかける気はありませんわ。それでも私、口は堅い方ですよ？　ですから」

亜矢子さんは手に持っていた、銀色の四角い何かをハンドバッグ

にしまった。

それをユエル様に見せていたようだったけれど、何だったのかが分からない。

折りたたんでバッグにしまった長方形型のそれが何か、ここからではよく見えなかった。片手に乗るサイズで、携帯電話よりは大きくて厚みもあった。

なんだったのだろう……？

「明日の夜、来てくださいますわね？ お待ちしておりますわ」

「行くとは言っていないが」

「いいえ。ユエル様は来て下さいますわ。お一人でいらつしやらないくても構いませんくてよ？」

傲然とした口ぶりで言い放つてから、亜矢子さんは踵を返した。

それと同時に、僅かな隙をつくようにして、ユエル様は組んでいた腕をほどき、亜矢子さんに伸ばしかけた。

「ああ、それから」

亜矢子さんは肩越しに振り返り、ユエル様を牽制した。

慌てるでもなく伸ばしかけた腕を戻し、ユエル様は平静な態度を取り続けている。面持ちは相変わらず厳しく、微笑の欠片もその緑の瞳にはなく、冷たくて鋭かった。

空気が、異様なほど張り詰めている。

「我が桜町グループのセキュリティシステムは常に万全を期しておりますわ。もちろん当ホテルも。それから今回のパーティー、招待客は限られた特別な方達のみで、さほど多くはありません。それでも決して少人数とは言えない数ですから、その点もご留意なさつてご配慮いただきますよう、あらかじめお願いしておきますわね。迂闊な真似はなさらぬ方が賢明と存じますわ」

亜矢子さんのもったいぶった丁寧な口調はかえって空々しく、脅迫じみて聞こえる。……うつん、実際脅迫しているのだろう。念を押し方が執拗で挑戦的すぎる。

張り詰めた空気に反応して、わたしは体を強張らせ、息を詰めて

いた。

亜矢子さんがこちらに来るといふのに、逃げも隠れもできなかった。

その結果、

「あら」

リビングから出てきた亜矢子さんと、ばったりと鉢合わせてしまった。

立ち聞きしていたわたしとアリアさんは、さすがにばつが悪くてとっさに言葉も出なかった。そんなわたし達を亜矢子さんは鼻先でフンと晒った。

一言二言、何か嫌味でも言ってくるだろうと思っていたのに、亜矢子さんはにっこりと作り笑いを浮かべて、わたしにはなくアリアさんに軽く会釈をした。

わたしのことなど眼中にないらしい。挑むようなまなざしでアリアさんを見据えた。

「アリア……さん、でしたわね？」

「……………」

亜矢子さんの不遜な態度に、アリアさんは当然怯まなかった。ぴくりと金色の眉をあげ、亜矢子さんを睨み返した。

アリアさんと亜矢子さんの視線がぶつかって、火花が散る。……本当に、バチバチという音が聞こえてきそうな睨み合いだった。

美女ぶりで言うのならアリアさんの方が断然勝っているけれど、今日の亜矢子さんはいつも以上に高慢で自信ありげで、優勢を誇っているような迫力があつた。

亜矢子さんの自信の正体が掴めない分、アリアさんが若干押され気味だった。

「明日の夜、またお会いできそうですわね？　それではユエル様、アリアさん、ごきげんよう」

亜矢子さんは甘ったるい香りを振りまくようにして肩にかかる髪を片手で払い、そのまま歩きだし、振り返りもせずに屋敷を出て行

った。ほんの一瞬だけ、ちらりと横目を使ってわたしの方を見た。わたしは半ばぼう然とし、勝者然として去っていった亜矢子さんを見送った。

そして、背水の陣を敷いたらしいユエル様は、いつの間にかわたしのすぐ後ろにいて、不愉快げに顔をしかめていた。

深緑の光を双眸に沈め、表情を消している。振り返り仰ぎ見たわたしをその瞳に捕らえてはくれなかった。わたしもどう声をかけてよいものやら分からず、けれど視線もそらせず、そわそわとユエル様の様子を窺った。

沈黙を破ったのはアリアさんだった。

「ユエル」

アリアさんは怪訝そうにユエル様を見、矢継ぎ早に尋ねた。

「何なの、あの子は？ それにいったいどうしてあたしのこと知ってるの？ それに明日の夜って何のことなの？」

「あれは客だ。ここの常連で、個人的なパーティーに誘われている」ユエル様のその返答は簡略しすぎだった。アリアさんは一瞬むっとしたけど、何か思うところがあつたらしく、わたしには聞こえないよう、そつとユエル様に耳打ちをした。

それからユエル様の肩を軽く叩き、笑って言った。

「まあいいわ。とりあえず今日はミスカちゃんをありがとう、ユエル。ちゃんと返しましたからね」

でもアリアさんの目は笑ってなくて、厳しく、子供を窘めるかのようにユエル様を見据えている。

「あんまり口を挟みたくないんだけど、しっかりなさいよ、ユエル」

「……分かっている」

「なら、いいけど。ああもう、イスラの気持ちがかつちやうわねえ」

「……………」

ユエル様はリビングへ戻るべく身を翻した。俯き加減になりため息をついたユエル様の後を、アリアさんが追い、わたしもそれに続

いた。

わたしは荷物を抱えたまま、どうしたらよいのやらわからず、ただ一言も発せられずにいた。

何があったんですか。そう問いたかった。

でも、ユエル様の背は質問を拒んでいるように見えた。

空気がまだ重い。

心配で不安で、心が怯え、窮している。

どうしよう。

こつこつ時、どうしたらいいんだろう。わたしはどうするべきなんだろう。

おずおずと、わたしはようやく一声を発した。

「あの、ユエル様……」

「ああ、おかえり、ミズカ。疲れたろう。ずいぶんと沢山買い込んできたものだね。貸しなさい」

立ち止まり、振り向いたユエル様は微笑んで、わたしの腕から大量の荷物を奪うようにして、代わって持ってくださいました。

ユエル様の秀麗な面貌は微笑みの形をつくっている。けれど、どこか無機質で硬かった。

「あのつ、すみません、ユエル様、それくらいなら持ってられますから」

「それにしては窮屈そうな顔をしていたよ、ミズカ。大半はアリアの買ったものだろうに」

「あああ！ ミズカちゃんにも色々買ってあげたのに、ひどい言いようね」

「しかし六割、いや七割はアリアの物だろう」

「まあそんなこと……なくもないけど、うーん、どうかしら……？あとでちゃんと中身確かめなくっちゃね」

ユエル様は一番大きなソファーに荷物をどさりと置き、それに倣ってアリアさんも荷物を置いた。

そしてユエル様は再びわたしの方に顔を向けた。

「ミズカ、疲れているところを悪いが、お茶を淹れてきてくれないかな。ああそれと、イレクを呼んできて。キッチンにいるだろうから。イスラは……出掛けているか。まあ、ヤツはどうでもいいとして。私とアリア、イレクとミズカの分の茶を用意して。急がなくていいから」

「……はい、分かりました」

わたしはこっくりと頷いた。指示されたその通りにしか動けなかった。

身を翻して、足をリビングの外へと向けた。

「ミズカ」

足早に立ち去ろうとするわたしを、ユエル様が小声で呼びとめた……気がした。だけど、どんな顔して振り返ったらいいのかわからなくて、聞こえなかったふりをした。

歩きながら、ぼつりとこぼした。

「……ばか」

その一言はわたし自身へ向けたもの。そのはず……だったけれど。

耳に下がっているイヤリングが、空しく揺れていた。

25 不安定な釣合

ユエル様の言いつけ通りにお茶を用意してリビングへ戻ると、あらかた話は済んでいたようだった。わたしがリビングに入ると同時に話し声がやみ、三人分の視線がこちらに注がれた。

「ありがとうございます、ミズカさん」

一番初めに声をかけてくれたのはイレクくんだった。

わたしより一足先にリビングに戻っていたイレクくんは、わたしがリビングに入るや否やこちらに歩み寄ってきて、「お手伝いしますね」と言ってお茶のセットの乗ったお盆を奪っていつてしまった。わたしは進むことも退くこともできず、リビングの出入り口の所で、とまどい顔で突っ立っている。

ふと見ると、思案顔で柳眉をしかめているアリアさんは、ソファに背を預け、何やら考え込む風の人差し指を唇に当てていた。両腕を組んで立っているユエル様に視線を流し、けれど何か問いかけるでもなくまた視線を戻して軽く嘆息した。

なんだろう……ちよつと深刻というか、話しかけにくい雰囲気だ。中に入っていくのを躊躇わせる空気が漂っていて、尻込みしてしまう。

「どうしたの、ミズカちゃん？ そんなところにいないで、中に入つてらっしゃいな」

アリアさんは何事もなかったかのように、微笑みかけてくれた。イレクくんも同様に笑いかけ、「ミズカさんの分も淹れましたよ」とお茶を勧めてくれる。

アリアさんもイレクくんも、わたしを気遣ってくれている。

それは分かるのだけど、……なんだろう。漠然とだけど、何かごまかされた、隠されたような感じがした。

立ち入ってはいけないような気がして、わたしは知らず足を竦ませていた。

案山子よりも役立たずな態で佇立しているわたしを、ユエル様が呼んだ。

「ミスカ」

ユエル様の若干低めで抑えた声が、鼓膜を叩く。打てば響くような返事で「はいっ」と応え、わたしはしゃんと背筋を伸ばしてユエル様の方へ顔を向けた。

わたしの過剰な反応にユエル様は可笑しげに含み笑った。いつもならここで、わたしをからかうようなことを言って話の腰を自ら折ってしまうユエル様だけど、今日はそんな余裕がないのか、笑いをおさめて話を進めた。

「今、アリアとイレクにも話したのだが」

ユエル様は一人掛けのソファーに腰かけ、長い脚を組み、それからふうつと大きなため息をこぼした。

「明日の夜、出掛けることになったから」

そう言って、ユエル様は額にかかる白銀の髪を後頭部に流すようにして梳きあげ、また物憂げにため息をついた。そしてこちらに向けて、白い封筒をひらひらと振って見せた。

それが何であるのか、気づくには数秒の間が要った。

あれは、そう……たしか……。どこにしまっておいたのかもすっかり忘れていたものだ。

ユエル様の指に挟まれているそれは、二日前に亜矢子さんから押しつけられた「招待状」だ。パーティーがあるから、ぜひお越しになつてと、ワインと同時に手渡されたのだっけ。今の今までもすっかり忘れていた。

「面倒だが、今回は仕方がない。行くことにしたから、そのつもりで」

イレクくんの仕事をとられてしまったわたしは、未だにリビングの入り口で突っ立っている。空になってしまった手を組んだり揉んだり軽く抓ってみたり、我ながら落ち着きがない。

「そうですねか。……あ、それじゃあ、もしかしてアリアさんとイレ

「くくんも一緒に？」

「いえ」

お茶を淹れ終え、元いた場所に戻って座り直していたイレクくんは、品の良い微笑をわたしに向けて答えた。笑う時の目元が父親のイスラさんとよく似ている。瞳の色はイレクくんの方が薄く、レモンティーのような甘さと爽やかさがある。外見はイレクくんの方が子供なのに、全体的に感じる雰囲気は大人びてて、父親であるはずのイスラさんの方が少年っぽいくらいだ。

「僕はここに残ります。いろいろとやる必要がありますから」

イレクくんは言葉の先をぼかし、代わりにユエル様の方に顔を向け、目配せをした。ユエル様は小さく點頭して応じた。

「アリアさんはにっこり笑って、「あたしは行くわ」と答えた。

「あの礼儀知らずなお嬢さんに“また”会いたいし、何より逃げたなんて思われるのは癪なもの」

アリアさんはまるで喧嘩でも売られたような、勝気な少女の表情をしていた。そこにはやや不快げな色も含まれていたけど、怯みのない好戦的な笑顔だ。荒海の波を思わせる激しい色を、長い睫毛の下で光らせていた。

人懐っこくて穏やかなアリアさんも、やっぱり亜矢子さんのあの不躰で不遜な態度には腹が立ったのだろう。

「攻撃は最大の防御ですものね」

「なんて、不穏なことをさりと云つてのける。」

「それに護衛も兼ねてよ、ね、ユエル？」

「そうだな。まあ、念のためだ。私一人で対処できないことがあるかもしれないからね」

ユエル様は足を組み替えてから、またわたしの名を口にした。

「ミズカ」。呼ばれる度に、心が縮むような気持ちがある。

「それで、ミズカにも」

言いかけて、ユエル様は唐突に口を噤んで眉をひそめた。そしてわたしを……わたしの後方を睨みつけた。

どうしたんだろうと思った首を傾げたその次の瞬間、背後に人の気配を感じ、両肩にぼんつと何かが乗った。

「っ！」

肩に乗ったそれが人の手だとわかったものの、いきなりのことでびつくりして、とにかくそれを払い除けようとした。……それはもう思いつきり、力いっぱい！

わたしはとつさに身を硬くして、振り向きざまに肘を曲げ、それを後ろへ突き出した。ほとんど無意識的な行動だった。

あつ、と既視感が脳裏をよぎった。

でも、時すでに遅し。

左肘が何かにめり込んだ感触と、「ぐげっ」というくぐもった奇声が、すぐさま状況を把握させた。

「イ、イスラさんっ!？」

振り返ったそこにわたしが見たのは、前のめりになって腹を抱えているイスラさんの姿だった。

「おいててて」

振り向きざまに突き出されたわたしの肘を腹部にまともにくらったイスラさんは、痛そうに頬をひきつらせ眉根を寄せながらも、愉快げなニヤニヤ笑いを浮かべている。

「まいったなあ、これで三度目かあ」

「かつ、重ね重ね、すみませんっ！」

平手打ちを二度も食らわせたあげく、今度は肘鉄っ！

どうしてこんなことになっちゃうんだろう!? イスラさんにはかり暴力ふるって!

ユエル様が突然背後に立ったって、肘鉄食らわせたりしないのに! 寝ぼけ眼にユエル様の美貌が飛び込んできたって、平手打ち食らわせたことなんてないのに!

わたしは顔を真っ赤にし、冷や汗をかきつつひたすら低頭した。

「すみません、イスラさんっ、すみません」

恐縮しまくって謝罪するわたしに、イスラさんは前回、前々回同

様、笑って応える。

「いっていいって。驚かせた俺が悪いんだしさ。つっても、今回は強力だったなあ。いいトコ入っちゃって、目の前で星が飛んだよ、そりゃもうチカチカと」

イスラさんは腹をさすりながら上体を起こし、ようやく体勢を直した。

大丈夫ですかと問うと、「平気平気」と笑ってくれたけど、笑い方にちよつと含みがある……気がした。なんだか可笑しがっているような、からかいたがっているような、そんな感じを受けてしまう。痛そうなのに、なぜそんなに嬉しそうなんだろう……？

「しっかしなんか俺、目覚めちゃいそうだなあ、そっちの方面に。もちろん相手はミスカちゃん限定で」

「えつと……」

目覚めるって、いったい何になんだろう？

イスラさんの言っている事の意味が分からず、どういうことなのかと説明を求めようとしたところへ、いつの間にか傍に来ていたユエル様に腕を掴まれ、引き寄せられた。

「あの、ユエル様？」

「何にどう目覚めようと勝手にすればいいが、ミスカを巻き込むな」
不愉快極まりないといった表情で、ユエル様はイスラさんを睨みつける。

わたしはユエル様とイスラさんを見やって、首を捻った。

何に「目覚め」るのか、ユエル様はわかってるみたいだ。だけど訊かない方がいいの……かな？

「ミスカ、腕は大丈夫か？」

「いえ、あの……っ、わたしよりイスラさんの方が大丈夫じゃないと思います、けど」

「イスラのことなど心配しなくていい。ミスカ、こちらへ来なさい」
半ば強引に、ユエル様はわたしの肩を掴んで歩き出した。そして、さっきまで自分が座っていたソファアにわたしを座らせた。反射的

に立ち上がるうとしたのだけど、ユエル様に「そこにいなさい」と窘められてしまった。

わたしは身を縮こまらせ、「はい」と応える。

もう、何が何だか分からないうえ、色々と居たたまれないんですけど、ユエル様……。

そんなわたしをよそに、肘鉄を食らったイスラさんはすでに回復したようで、さっさとリビングに入ってきた。

「そーいや、みんなして集まって、何の話してたわけ？」

場の空気を読んでいるのかいないのか、イスラさんは陽気な口調で尋ねた。アリアさんの方に顔を向けて。

ユエル様ではなくアリアさんに尋ねるあたりは、やっぱり多少なりとも気を遣ったのかもしれない。

単に、ユエル様に訊いたところで返答は得られないだろうという理由からかもしれないけれど。

26 火の元にご用心

アリアさんから「明日の夜パーティーに行くことになったのよ」というだけの簡単な説明を聞き終えてから、イスラさんは当然といった顔で、「俺も行くぜ」と言った。そしてくるっと首を回してわたしに目を向けた。

「明日は、ミズカちゃんも行くんだろ？」

「え、と……それは……」

返答に困り、ユエル様を見やってその答えを求めた。

「そう、ミズカにも一緒に行ってもらおう。……いいね、ミズカ？」

ユエル様の手はわたしの肩に置かれたままだ。軽く添えられている程度だから痛くはないのだけど、無言の圧力……みたいなものを感じる。

「あの……」

わたしは戸惑いつつ、確認した。

「お供をすればいいんですね？」

「ただの付添ではないよ、ミズカ。私のパートナーとして同行してほしいのだから」

ユエル様はわたしの肩から手を離すや、さり気ない口調でさらりと、とんでもないことを言った。

「ええっ？ そんな……っ、待ってください、ユエル様っ！ パートナーって！」

動揺しまくって、声がつっかかってしまう。

「だめです、そんな！ パートナーだなんてわたしには………！ それにわたし、パーティーになんて行ったこともないのに！」

ユエル様はわたしがそう言って断るのを、おそらく予想していたのだろう。「大袈裟だね」と微笑んだ。

「ウィンナワルツを披露する社交界デビューのパーティーのような、そんなたいそうなものではないよ」

「でもっ」

「察するに、バイキング形式の立食パーティーだろう。飲み食いしながら、自慢話をしたり世辞を言ったりする、そんな程度の集まりだろうから、肩肘を張る必要はないよ、ミズカ」

イスラさんが「そうそう」と頷き、ユエル様の語を継いだ。

「歌を歌えだの演説しろだの、そういうことは招待状に書かれてないんだろ？ だったら気楽に招待されちゃえばいいんだよ。タダで酒を飲めるっつてさ！」

アリアさんもイレクくんも、イスラさんの意見に賛同している。

さすがにイレクくんは、「イスラはちよっとお気楽過ぎですが」と呆れ顔をしていたけれど。

「だけど……」

わたしを躊躇わせているのは、パーティーに行く、そのことだけじゃない。

だって、ユエル様の「パートナー」なんて……そんなのわたしになっただけのものじゃない。ただお伴をするだけとは意味合いが違ってくるはずだもの、「パートナー」だなんて。

俯き、下唇を噛んだ。胸の痛みを、そこにすりかえるようにして。そこへ、イスラさんが声をかけてきた。

「あ、もしなんなら、ユエルじゃなくて俺と一緒に行く、ミズカちゃん？」

「えっ？」

イスラさんの突然の申し出に、わたしは驚き顔を上げた。

イスラさんはにこにこ朗笑を浮かべつつ、その一方で挑むような眼光をユエル様に向けていた。ユエル様は表情を凍らせ、何の反応も示さない。

「ユエルのパートナーが不服ってことなら、俺が立候補しようかなーって。パーティー行くんなら、女の子の同伴者がいた方が見た目にいいしね」

「不服なんて、そんな！」

やだ！ イスラさん、なんてことを言うの！？ 不服なんて、そんな意味で「ダメ」って言ったんじゃないの！

わたしは狼狽し、大慌てでイスラさんの発言を否定した。

イスラさんは意味ありげな笑みを浮かべて、わたしとユエル様とを見やっっている。

「いや、だつてさあ？ ユエルのパートナーは嫌なのかなって思つて。 違う？」

「違いますっ！」

「じゃあ、パーティーに行くこと自体がどうしても嫌つてこと？」

「それは……その、別に、……どうしても嫌という程では……」

「じゃ、行くよね。ええつと、……俺と？」

これは誘導尋問だ。それを分かっているにも、回避できなかった。

「あのっ、わたしは……っ」

いったい応えたらいいのか、頭の中は混乱しまくっていた。

ユエル様のパートナーなんてわたしには恐れ多いことだ。それを伝えれば済むことなのに、焦り、泡を食らっているわたしは、声を発するのも上手く出来なかった。

ああ、どうしよう。

無用なことをいってユエル様やイスラさんを不快にさせたくないけれど、こんな風に言葉を詰まらせているのも、ユエル様を困らせるだけだ。

どうして、さらりと受け流してしまえないんだろう！

こんなにみつともなくうるたえて！ 自分が情けなくてしようがない。

「はい！ 意地悪はそこまでよ、イスラ」

アリアさんがぱんぱんっと手を打ち鳴らした。

「もうそのくらいにして。ミズカちゃんをいじめたら、ユエルだけじゃなくってあたしも赦さないわよ？」

アリアさんに諷められ、イスラさんは首をひっこめた。そのおどけたような仕草に反省が見られないと思ったのか、続いてイレクく

んも厳しい顔をしてびしゃりと窘めた。

「そうですね、父さん。悪ふざけが過ぎます。波風をわざとたてて事を動かそうとするにも、加減があるでしょう？ 加減を誤ってミズカさんを苦しめるなど、言語道断です。ミズカさん、すみません、不肖の父がくだらないことを言ってます」

「い、いえ、そんな……」

心底申し訳なさそうにイレクくんに謝罪され、わたしは首を左右に振った。

「なんだか、わたしの方が申し訳ない気分になってしまっ

「イスラ、下手な横槍は入れないで。余計に事の進みが遅くなっちゃうわ。ミズカちゃんユエルと。そしてイスラ、あんたはあたしと行くの。それで決定。いいわね？」

場を取り仕切るように、アリアさんはそう結論付けた。イスラさんは「はいはい」と投げやりに応え、嘆息した。けれど、アリアさんの決定に異論はないようだった。

ユエル様はふっと小さく息を漏らした。話が収束するのを待っていたようだ。

「と、いうことだ、ミズカ。アリアの言うとおりでいいね？」

ユエル様に改めて確認され、わたしはもう、頷くしかなかった。

「はい、わかりました」

「パーティーなど面倒なだけだが、仕方ない。……カタをつけなければね」

ユエル様は物憂げな面持ちになり、白銀の髪を払いのけるようにして指先を額にあててひとりごちた。

一瞬、冷たい微笑が緑色の双眸と端正な口元に浮かんだ。それは、ぞくりとするほど冷淡な表情だった。

わたしは思わず膝の上で両手を組んで、強く握り締めていた。

……なんだか、怖かった。

こんな言い方は今さら妙だし、嫌なのだけど、酷薄で残忍な「吸血鬼」みたいな微笑だったから。

憤怒の形相ではなかったけれど、蒼白い焰が腹の底で燃えているような、静かな威圧感があった。

こんな表情をするユエル様を見るのは、もしかしたら初めてかもしれない。

ユエル様は目線を落とし、

「ともあれ、明日は少々忙しくなりそうだ」

そう言うてから、深いため息をついた。

それからユエル様は、昼までは店を開くこと、わたしの支度はアリアさんに任せること等、明日の段取りをおおまかにだけ、決めてくれた。わたしはそれらのすべてを承従し、多忙な一日になりそうだと、ぼんやり考えを巡らせていた。

ユエル様の話がほぼ済んだ頃、イスラさんが「俺もなんか手伝おうか」と、申し出た。ユエル様にはなく、わたしに顔を向けて、わたしが返答に窮していると、イスラさんをつれなく無視して、ユエル様はイレクくんの方に目をやり、話を続けた。

「あとはイレク。準備をつつがなく頼む。必要な物があれば言うてくれ」

何やら暗黙の了解が二人の間にあるみたいだ。イレクくんは了承の返事をするや、席を立った。

「ありがとうございます。おおよその材料は手元に揃ってるんですが、足りない物もありますし、ちよつと出掛けてきます。そのついでに手配りもしておきます」

「諸々のことはイレクの判断に任せるよ。急なことですまない。手を煩わせるね」

「お気になさらないください。他人事ではありませんしね。それに、僕の趣味がお役に立つなら、いくらでも協力します」

ユエル様、イレクくんは何を頼んだのだろう？

それを訊こうとし、けれど躊躇していたわたしを越して、イスラ

さんが声を上げた。

「つて、イレク！ おまえまさか、またやんの？ おいおい、勘弁してくれよお」

イスラさんは大げさに身体を仰け反らせた。

「こんな人気の多いリゾート地で爆発騒ぎはごめんだぜ？」

爆発騒ぎ！？

わたしとアリアさんはびっくりして、瞠目してイレクくんを凝視した。ユエル様ですら驚き、目を見開いていた。

「人聞きの悪いことを言わないでくださいよ、父さん」

イレクくんは決まりの悪そうな顔をしてイスラさんを睨みつけた。爆発つて、いったいイレクくんは何をするつもりだったの？

まさか爆弾作りが趣味とか？ イレクくと爆弾つて、まったくイメージが結びつかないのだけど！？

目を白黒させているわたしに気付いて、当のイレクくんではなく、イスラさんが代わって説明してくれた。

なんでも、イレクくんは化学実験が趣味なのだという。

さらにイスラさんは、

「俺が知る限りで、爆発事故を起して家屋全壊が三件、半壊が十件。実験中にね」

と付け足した。

「あくまで俺が把握してる数だから、ほんととはもっと多いはずだぜ、爆発事故」

「人死には出してませんよ。人里はなれた場所でしたから、他に被害が及ぶようなことはありませんでしたし」

イレクくんは少し恥ずかしそうな、バツの悪そうな顔をして言った。

けど、否定しないってことは、イスラさんの言ってることは「言い過ぎ」とか「虚偽」ではないってこと？

「それに今回は、とくに危険な薬品は使いませんから、大丈夫です」

「おまえの大丈夫は全然当てにならねーと思うけど」

「その点、父さんに似たようですね。不本意ながら」

わざとらしく大きなため息をついたイレクくんは、微笑笑を浮かべているユエル様に視線を流した。

「ユエル様がもしご不安なようでしたら、別の場所で精製します。この付近にも空いている別荘はたくさんあるようですし」

「その必要はないよ、イレク。場所を移すのは時間の無駄だ。それに、この屋敷が全壊しようが半壊しようが、それ自体は別段構わないからね。だがまあ、騒ぎになっては面倒だ。できる限り慎重に行ってくれ」

ユエル様はあっさり許可を出した。

でもですね、ユエル様！ 家屋全壊は「構わないこと」「じゃないと思うんですけどっ！ それに爆発なんて起こったら命の危険もあるし！

「心配性だね、ミズカは。命の危険を察しているのなら、大丈夫だ」
「もう、ユエル様！ 考え読まないでくださいっ！」

「いやそんな、いかにもおろおろと慌てふためいて、あ然としたびつくり眼を向けられて、読むなど言われてもね」

ユエル様は相好をやわらかく崩して、くすくすと忍び笑っている。
「ミズカの不安は分かるが、まあ、大丈夫だろう。爆発を起こした当人がこうしてピンピンしているのだからね。それに、ここも仮住まいの屋敷だ。吹き飛んだところでさほど支障はあるまい？」

「支障は大ありだと思っんですけど！」

ユエル様の大雑把過ぎる性格や対応には慣れてきたつもりでいたけれど、こればかりはあまり鷹揚に構えてはいられない。

ユエル様のみならず、アリアさんやイスラさん、それに爆発を起こすかもしれない当のイレクくんの身が危険にさらされるとなれば、
「まあいいか」では済まされない。

「だいたい、爆発なんて……怖いじゃないですか！」

「まあ、怖がる気持ちも分かるが、大丈夫だと言っているイレクを信じてあげられないかな、ミズカ？」

「……そ、それは……」

イレクくんを見ると、申し訳なさそうにしつつも、懇願するような顔をしている。そしてユエル様は優艶に微笑み、「どうかな？」と小首を傾げてわたしの顔を覗き込んでくるのだ。

卑怯ですっ！ ずるいですっ！

そんな顔を二人にされて、「ダメです、断固反対です」なんて言えるわけないじゃないですか！

「……もう……っ」

結局わたしは、消極的ながらも認めざるを得なかった。

「防火用水だけはちゃんと側に用意しておいてね、イレクくん」

イレクくんは「もちろんです」と応じた。「今まで以上に慎重にしますから」と。

アリアさんは「ほんとに大丈夫かしら？」と不安げに柳眉をしかめ、イスラさんは「無事を祈るしかないね、こりゃ」と天を仰いだ。それからわたしは再びユエル様に目を向け直した。

ユエル様はわたしの視線に気づいて、優しい笑み双眸に浮かべたけれどすぐにその深緑色の瞳を逸らし、窓の外へと視線を移した。

ユエル様の端正な横顔に憂色がさし、翳をつくっていた。

ユエル様の一挙一動に、わたしは過敏すぎるほどの反応を示してしまう。それは今に始まったことではない。

いつだって不安はあった。

だけどこんな不安は……知らない。こんなにも胸が苦しくなる、不安と懼れは。

ユエル様に目を逸らされる度、胸がきゅっと締めつけられる。まるで警告のように。

ユエル様、わたしは……

わたしはユエル様の横顔を見つめ、問いかけた。

「……大丈夫ですよね？」

ユエル様はわたしに顔を向け直した。その表情は風のない湖のよ

うに静かで、凧いでいる。何が大丈夫なのかと、ユエル様は問い返してはこない。代わりに微笑みを返してくれた。

「大丈夫。……たぶんね」

その日の夜は、わたし達は皆、それぞれ別の行動をとることになった。

朝から出かけていて、一旦戻ってきたイスラさんは、再び「ちよつくら栄養補給」に出ることにしたらしい。

「けどこんな時間にナンパ……じゃなくて「栄養補給」なんてできるのかな？ 日もとっぷり暮れて、八時を回ってるのに。」

「観光シーズンの別荘地だからね、それなりに皆、出歩いてるもんだよ。とくに駅周辺なんかはね。カフェバーも何件かチェック済みだし。」

さすがと言おうか、イスラさんは抜かりがない。昼間にあちこち回って、深夜まで開いていそうな飲食店をリストアップしてきたらしい。

イスラさんは出かける目的を栄養補給のためだと言ったけれど、本当は避難目的なのかもしれない。

イレクくんが行う化学実験の事故による火災、家屋全壊か半壊するほどの爆発を一番恐れていたのはイスラさんだったから。もしかしたらイレクさんと一緒にいて被害に遭ったことがあるのかもしれない。イスラさんはあからさまに「巻き添えは勘弁」って顔をした。

当のイレクくんはというと、

「実験に失敗はつきものですが、爆発なんて余程のことがなければ起こりませんよ」

そう述べた。そして、だから大丈夫です、と。

失敗はつきものなんだ……。余程のことがなければ……でも、今まで何回かはその余程があったわけだし……。あまり言い訳になつてないよ、イレクくん……。

「今回はいつも以上に慎重に、細心の注意を払って行いますよ。ミズ力さんに怪我を負わせてしまつては申し訳ありませんから」

「今回に限らず、いつも気をつけた方がいいと思つただけ……」

「そうですね。いつも気をつけてはいるんですよ？ ですが、危険はないはずと思つて混ぜたものが予想外の化学反応を起こしてしまつたんですよ……我ながら不思議なほどです」

「……………」

化学実験で爆発騒ぎが起こる方が不思議だと思つただけ。

「今回はそう危険な薬品は扱わないので万が一のことは起こらないと思いますが、十分気をつけます」

イレクくんはにっこりと笑つて有耶無耶に流した。

それにしてもイレクくんの品の良い笑顔は、妙な押しが強さがある。それで、ふと思いだした。

イスラさんが教えてくれたのだけど、イレクくんはユエル様達が持つている火や風に特化した能力がない代わりに、幻術の効力が非常に強いらしい。

とはいっても、基本的に同族同士では……わたしのような眷族も含めて、互いに幻術はかけあえない。

「ただし、人間も治療なんかに使つてる催眠術は別。で、イレクはその催眠術も使えるから、やろつと思えば俺達に術をかけることも可能なんだよ」

イスラさんはそう言い添え、さらに「俺はやられたことないけどね」と言つて鼻先で笑つた。

人間に対して幻術をかける時、イレクくんは催眠術も併用している。だから効き目が強く、長いのだという。

ユエル様は、

「ある意味で、イレクは最強と言えるね。幻術は防御にもなれば攻撃に転ずることもできる」

と言つて笑つた。嫌味でも皮肉でもなく、本心からの言葉のようだったけど、少しからかうような口調だった。ユエル様に最強認定

されたイレクくんは、「そんなことありませんよ」と返し、少し困ったような照れたような顔をしていた。

ともあれイレクくんは、

「材料や器具もおおよそ揃えられたので、早速作業にとりかかります」

ユエル様にそう報告した後、バケツに汲んだ防火用水と小さめの消火器を持って、二階の北端の客間　そこに寝泊りしているわけなんだけど　へと向かった。

イレクくんはリビングでの話し合いが終わってからすぐ外出し、ほんのついさつき戻ってきたばかりだった。必要な物はどうにか買い揃えられたらしい。買い物の報告らしきものもユエル様にしていたようだった。

それはそうと、イレクくんはいつたい何を精製するんだろう。

ユエル様の依頼があつて、何がしかの“薬”を作ることになったようだけど……いつたい何を作つてと頼まれたのだろうか？

さりげなく、「これから何を作るの？」とイレクくんに訊こうとした。

けれど、この「さりげなく」というのが我ながら情けないほど下手で、結局は訊きそびれてしまった。

ユエルの目を掠めてそれを聞きだすのは褒められた行為じゃない。そう考えて思いとどまったというところもある。

弁えなくちゃと自戒したばかりなんだもの。

ユエル様を失望させたくない。……せめて、嫌われるようなことだけはしたくない。

だからわたしがイレクくんに言えたのは、「くれぐれも気をつけてね」という、繰り返されたその一言だけだった。

ユエル様とイレクくんが部屋にこもつてすぐ、アリアさんがエントランスホールに降りてきた。昼間とはがらりと雰囲気が変わって

いる。

長い金髪をぴっちりした後頭部にまとめ上げ、グレイのスーツに身を包んでいた。

白いブラウスの隙間から見える白珠の肌とタイトスカートから伸びる脚線美が、目を釘付けにさせる。けれど下卑た感はずっとなく、一流企業のトップでバリバリ働くキャリアウーマンみたいだ。胸元と耳、指に光っている透明な石はきつとダイヤモンドだろう。

美女は何を着ても、様になるといっつか、美女然とした風体が崩れない。

ユエル様もそうだけど、立ち居振る舞いからして違う。

ええつと、『立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花』だった。その言葉がぴったりとくる、匂いたつような華やかがある。

卓越した美人って、目の保養になるけれど、心臓には悪い……かも。毎日見ているユエル様の綽約とした仕草や目映いばかりの美貌には未だに胸が鳴るもの。動悸、息切れ、あと眩暈にも悩まされたりするから、頭にも良くないかもしれない。三日で飽きるなんてこと、全然ない。

わたしの視線に気がつき、アリアさんは優艶とした微笑みを向けてくる。そしておっとりとした口調でわたしを呼ばれるのだ。「ミズカちゃん」と。心がほわんと温かくなる優しいアリアさんの声だ。アリアさんは階段を下りてきてから、イスラさんに目をやった。

「あら、イスラ、あんたも出かけるの？」

イスラさんはアリアさんの美貌に見惚れるでもなく、平常に応える。

「ああ、まーね。アリアも出かけるの？」

「ちょっと下見と根回しを兼ねてね。それと、ついでに食事もよ」

アリアさんが言う「食事」とは、イスラさんが言うところの「栄養補給」だろう。

「だけど、下見と根回しってなんだろう？」

「それでスーツかよ。足に拳銃でも仕込んでそうだな」

「あいにく拳銃もナイフも手榴弾も仕込んでないわ。あたしは平和主義だもの」

アリアさんは不敵に、そして悪戯な女神のごとく艶然と笑んでみせた。

拳銃だの手榴弾だの、不穏な単語を二人はさらりと口にする。けど、違和感なくて、実際持っても不思議じゃないような口ぶりだ。もちろん持つてはいない……はずだけど。

でも女スパイ的な雰囲気も、今のアリアさんにはある。タイトスカートをめくりあげたら、そこに拳銃かナイフかを仕込んでいるのがちらりと見えるのでは……なんて想像してしまった。

一方、イスラさんは着慣れた風な軽装だ。ジーンズにTシャツ、その上にブルゾンを羽織っている。イスラさんはカジュアルなスタイルが好きようだ。気さくなイスラさんに似合った格好だと思う。ユエル様やアリアさんとは違って、イスラさんの場合、「美しい」というより「ハンサム」って形容が合う。ええっと、「イケメン」とか言うのだった。

イスラさんは、ぱっと見だけで判断すらなら、ユエル様より年少に見える。だけど本当はどうなんだろう。あまりかわらないのかな？たとえば年の差が三十歳ほどあったとしても、そのくらいなら「たいした違いじゃない」って言われそう。

こうした時間感覚には、まだちょっと慣れない。

わたしにしたって、ごく普通に生きていたなら「おばあちゃん」な年齢のはず。生きていられるぎりぎりの年齢だろう。そう思うとやっぱり不思議で、「人間以外」の存在なんだなあって戸惑いながらも、実感してしまう。

でも、それを辛いか悲しいとか嫌だと思ったことはなかった。ただ慣れないだけ。

どうしてかな。

ユエル様が傍にいてくれるからなの……かな。

わたしのこと気遣ってくれて、わたしのこと守ってくれて、わた

しのことをただの「ミスカ」として見てくれて……

「ミスカちゃん？」

「はっ、はいっ!？」

アリアさんに顔を覗き込まれ、わたしは弾けるようにして背を伸ばした。

いけない、またぼうつとしてしまった。

「ミスカちゃん、あたしちよっと出掛けてくるけど、……平気？」

「はいっ、大丈夫です」

「そう？」

アリアさんは優しいげな青色の瞳を心配そうに曇らせ、わたしの様子を窺ってくる。わたしはもう一度「大丈夫です」と、笑って応えた。

「なるべく早く戻るつもりではいるけど、もしかしたら朝までかかっちゃうかもしれないわ」

アリアさんは昼間出かけた時とは違って、面倒くさげな様子だった。遊びに行くというより面倒な仕事を片付けに行くといった風だった。

「ああ、そうだわ」

アリアさんは人差し指を軽く顎にあて、視線だけをイスラさんに向けた。

「この際だわ。イスラにも手伝ってもらおうかしら。あたし一人じや時間かかっちゃうし」

「唐突な申し出だな」

イスラさんは片眉を僅かに上げた。

「どうせ今から食事に行くところだったんでしょ？ ついでよ、ついで。それに、まだちゃんとした説明されてないでしょ？ あたしからちゃんと説明するわ」

「まあ、だいたい事情は掴めてるけど」

「イスラは察しがいいわ。なら、協力してくれるでしょ？ ミズカちゃんのためだもの」

イスラさんは頭を掻き、「ま、いつか」と呟いて、アリアさんに付き合うことをあっさり承諾した。

「ユエルに恩を売っておく、めったにない機会だしな。あいつが他人に協力求めるなんて未だかつてなかったもんなあ。よっぽど切羽詰まってるのか、単に愚図なのか」

「それ、本人の前では言わないようにね。ユエルをからかいたくなる気持ちはわかるけど、今はやめといた方が賢明よ?」

「まったくだよなあ。なんでもあも余裕ないかね、ユエルは。ケツ叩かねえと期限切れになりかねないぜ?」

「大丈夫よ。余裕ないってことは、ちゃんと焦ってるってことでしょ」

「それもそうか。しかし、あいつがめんどくさがりなのは知ってたけど、こうもグズグズするとは、ちよつと予想外だったな」

「本気だからこそよ。それ以外にもそうならざるを得なかった原因はあるんだけど。ユエルの場合は特に期限付きでよかったと思うわ」
「言ってるな」

わたしはアリアさんとイスラさんのやりとりを小首を傾げて聞いていた。話の内容はちつともわからなかったけれど、一つだけ、気になる言葉があった。

「期限」 それに「期間」って、なんだろう。

その言葉を、何度も聞いた。

眷族の存在理由を聞いた時、アリアさんの亡くなった旦那様の話聞いた時、ユエル様とイスラさんの話を立ち聞きしてしまった時……。

アリアさんが言っていた。

「眷族を持てる期間は決まってる」って。その期間を過ぎると、眷族は持てなくなるって。

今まで聞きかじったそれらを要約すると、ユエル様の「眷族を持てる期間」がじきに終わる、ということ?

それが、何なのだろう。

何かとても大切な……重要なことのように聞こえる。今のアリアさんとイスラさんの会話からは、少なくともそう感じられた。

「ミズカちゃん」

ふと、アリアさんがわたしの名を呼び、顔を覗き込んできた。

考えがぐるぐるめぐってるのに答えが出ず、もどかしい感情が表情に出てしまっていたのだろう。

アリアさんは「大丈夫よ」と言って微笑みかけてくれた。

「大丈夫よ、あたし達がうまく収まるようにするから。心配しないで。ね？」

「え、あの……っ」

何をどううまく収めるといつのだろうか？

それを聞き返したかったけれど、もうこれ以上アリアさん達に心配をかけたくない。それにそこまで立ち入っちゃいけない気がして、きゅっと口の端を締め、喉まで出かかった問いを飲み込んだ。

代わりに、ため息がこぼれた。

……と、いけない。こういう「ため息」がまた余計な心配をかけちゃうんだ。

わたしは軽く頭を振って、ため息を散らした。

「ミズカちゃん」

ちよつと俯いたわたしの手を、イスラさんがいきなり掴んできた。わたしは驚いてびくりと肩をあげた。目の前に、イスラさんの真顔がある。

そしてぐつと顔を近づけてきた。

28・長き夜に居る

「あつ、あのつ、イスラさんっ!?!」

イスラさんの黄みのかかった茶色の瞳が、わたしの目をじいっと覗きこんでくる。それだけじゃなく、イスラさんはわたしの手を両手で包み込むようにして握っていて、離れようにも離れられない。背中を反らすのが精一杯だ。

ええつと、この体勢は……いったい何事っ?

「俺がない間さみしいと思うけど、なるべく早く戻ってくるから我慢しててね、ミズカちゃん」

「……はあ……」

「俺としてもできるだけミズカちゃんの傍に居てあげたいんだけど、これもミズカちゃんのためだから」

「え? あの、わたしのためって……」

イスラさんがさらに顔を近づけてくる。

「うん。一肌も二肌も脱ぐよ、ミズカちゃんのためなら!」

「……っ」

あのつ、イスラさん、顔が……顔が近すぎです! 鼻と鼻がくつきそうなくらい、顔が近いんですけど!

「あの、ちよっ……イスラさんっ?!」

イスラさんは目を白黒させてうるたえるわたしなどお構いなしだ。わたしの手をがちり掴んで顔を寄せてくる。

どうしよう……っ!

こわ、……い。……怖くて、たまらない……!

イスラさんが怖いんじゃない。でも、強引に近づけられる行為自体が、怖かった。

喉が腫れてるみたいに痛み、息苦しくなって声が出ない。指先が冷えてくるのが自分でも分かった。

足に力が入らず、その場に崩れ折れそうになった。その時だ

った。

「放せ、イスラ」

わたしの肩を、突如足音もなく現れたユエル様が掴み、引き寄せた。わたしの肩と後頭部が、とすとユエル様の胸にあたった。

「もう大丈夫だ、ミズカ」

「……ユエル様」

肩越しに振り返り、ユエル様の端正な顔を仰ぎ見る。突然な登場に鼓動は跳ねたけど、同時に安堵もした。

「ミズカ、こういう時にこそ平手打ちなり肘鉄なり、思いきり食らわせてやればいい」

「えっと、ユエル様、あ、あれはですねっ、わざとやってるわけじゃないくてっ！ とっさに体が動いて勝手にしてしまっただけのこと、だからやろうと思ってできるものではないんです！」

これまでイスラさんに振るってきた、わざとではない突発的な乱暴な仕打ちを思いだして、恥ずかしさのあまり顔が赤くなった。

ユエル様の顔が近いせいも、……あるけれど。

「あれはその……、事故というか、うっかりというか、無意識的なことなので」

「ならば、これからは意識して殴るようにしなさい。できればもつと、思いきり力を入れて」

「そんな、できません！ 無茶言わないでください！」

「イスラ、いつまで掴んでる。放せ。気安くミズカの手を握るな」

わたしの手を握ったままだったけど、ユエル様に鋭く睨みつけられ、ようやく放してくれた。

「おー、こわっ」

イスラさんはおどけて笑い、わざとらしく両肩をあげる。怖いなんてちっとも思っていない素振りだ。イスラさんはにやにや笑って、その笑みがさらにユエル様の勘気に触れた。

「出かけるのならさっさと行け。帰ってこなくてもいい」

ユエル様の不機嫌指数はうなぎのぼりだ。凍てつくような深緑色のまなざしがイスラさんを睨めつけている。苛立ちを抑えかねた声はまるで炭火のようだ。炎の揺れる様は見えないけれど、ひどく熱い。

ユエル様の怒りを真正面から受け止めながらも、イスラさんは反省の色を見せない。

「ギスギスしちゃって、いやだねえ。余裕のない男はモテないぜ、ユエル？」

それどころかさらに煽って、面白がっているようだ。

いじめっ子の心理なのかもしれないけれど、ユエル様みたいな気位の高い人にそれをしちゃあ、ますます怒りを誘っただけなのではと心配になってしまう。

長い付き合いで、加減は心得ているのだからけど……それでもやっぱりハラハラしてしまう。

ユエル様とイスラさんの間で板挟み状態になり、おろおろとろたえているわたしを見かねてのことだろう。アリアさんが口を挟んでくれた。

「もう、イスラ！ さっき言ったばかりでしょ？ ちょっとは空気を讀みなさい」

アリアさんに襟首を引っ張られ、イスラさんは掴みあげられた仔猫みたいに首をすくめた。

「ホラ、もうそのあたりでやめなさい。しつこい男もモテないわよ、イスラ？」

「苦しいって、アリア！」

「ならもう黙りなさい。ユエルはともかく、ミズカちゃんを困らせて。まったくもうっ」

「悪かった。悪かったって」

イスラさんの首根っこを押さえながらアリアさんは大きく息をつき、ユエル様に顔を向けた。

「ユエル、あたし達出かけるけど、大丈夫ね？」

「ああ」

ユエル様はため息まじりに応えた。
窘められたのはイスラさんなのだけど、まるで一緒に叱られたかのような渋い顔をしてる。

「大丈夫だ、アリア」

そう応えてからユエル様も嘆息した。

わたしの肩を掴んだままにいるから、ユエル様の声が耳朶に近くこめかみあたりにため息がかかって、思わず肩を竦めてしまった。

ユエル様の手の置かれた肩だけじゃなく、全身が熱い。動悸が治まらなくて少し苦しかった。

アリアさんはちよつと小首を傾げ、ユエル様に問いかけた。

「一応訊くけど、何か注文はあつて？ もうこんな時間だし、できることは限られるけど」

「いや。アリアがいいと思うようにしてくれればいい。任せるよ」

「そう？ じゃあ帰ってから報告はするわ」

「ああ」

ユエル様は短く応えた。

アリアさんは視線を少し下げて、青い双眸をわたしに向けた。

「ミズカちゃん、今日は疲れたでしょう？ ゆっくり休んでね」

「あ……はい。あの……」

これからどこへ行くのか、気にかかったけれど訊けなかった。

ただ生気を飲みに行くだけではないらしいことは窺えたけど、どこへ何をしに行くのかを尋ねることはできなかった。訊けば、きっとアリアさんは困った顔をするだろう。

それに、あれこれと詮索して首を突っ込むのは不調法だ。わたしがしていいことでもない。

だからわたしにできるのは、「気をつけていつてきてください」と声をかけるだけ。そして、帰りを待つことだけ。

アリアさんは微笑み返してくれた。

「ありがと、ミズカちゃん。さっ、イスラ、行くわよ」

「へーへー。そんじゃ行つてくるね、ミズカちゃん」

イスラさんはアリアさんに腕をぐいぐい引つ張られつつも、名残惜しげに手を振っている。わたしも軽く手を振り、「いつてらっしやい」と声をかけて、二人を送り出した。

玄関の扉が閉まってすぐ、ひときわ大きなため息がユエル様の口からこぼれ出た。

「まったく、あいつはいつでもどこでも相変わらず騒がしいな」

肩越しに振り返り、そこに見たユエル様の顔は、苦虫を大量に噛み潰したような渋面だった。けれど、冷たくも刺々しくもない。

ユエル様の手が肩から離れ、わたしはホッと息をついた。

「賑やかで楽しい方ですね、イスラさんって」

含み笑ってそう言うと、ユエル様は眉間の皺を深めた。

「賑やかに程がある。ミズカ、イスラをあまり甘やかさないように」

「……はい」

なんだか可笑しくて、口元が緩んでしまった。

イスラさんって、ユエル様を逆撫でるようなことを言ったりもするけど、雰囲気や和らげるのが上手だ。それがイスラさんの持ち味だって、ユエル様もきつと分かっているんだろう。

イスラさんに対し、つれなく冷たいことを平然と言い放つユエル様だけど、心底イスラさんを嫌い抜いているようにも、疎んじているようにも見えない。本気で怒りはするけれど、剥き出しの感情を晒せるほどに信頼しているのだと思う。ちょっと屈折した友情ではありそうだけど、ともあれ信頼関係は成り立っている……と思う。当人たちは真つ向から否定しそうだけど。

「ミズカ」

「はい」

笑いを堪えているわたしを窺めようとしたようだけど、面倒にな

つたらしく、ユエル様はやれやれとため息をついた。

「今日は歩きまわって疲れただろう、ミズカ。アリアの言うように、早く休んだ方がいい」

「はい」

「私も、何やらどつと疲れたよ」

「あ、それじゃあ、お風呂の支度をしてきますね。疲れた時はゆっくりお風呂につかるのにかぎります」

今、わたし達が仮住まいにしている屋敷は、造られてからの年数はかなり経っているものの、設備は新しくそれなりに充実している。浴槽に湯をはるのもボタンひとつ押すだけで済むから、支度をするといつても、浴槽に蓋をするとか、タオルを用意するとか、そのくらい。

「他に何かご用はありませんか？ 早く休ませてもらうことにしますから、その前にできることがあればしておきます。お手伝いできることがあれば言うてください」

わたしがそう訊くと、ユエル様はにこりと美しい笑みを浮かべた。悪戯っぽい色を帯びたそれは、鼓動を速める促進剤だ。

どきりと胸が鳴って、反射的に身構える。身構えたところで、まったく防御できないのだけだ。

「……そうだな。それじゃあミズカ」

ユエル様は目を細め、軽く握ったこぶしを口元に当てる。含み笑いをごまかしているようだけど、ちっとも隠しきれませんよ、ユエル様。

こういう顔する時って、わたしをからかう時だ。

分かっているのに。じゅうじゅう分かっているのに！

「ミズカに、背中でも流してもらおうかな。髪も洗ってもらえるなら、なおいいね」

と言われて、顔どころか、一瞬にして耳まで真っ赤になってしまった。

「なっ、何言い出すんですか、いきなり！ でっ、できません、そ

んなこと！」

頭から湯気が出そうな勢いで慌てふためくわたしを、ユエル様は楽しそうに眺めている。

「いや、そうすればミズカも一緒に風呂に入れるし、私も自分で身体を洗う手間が省けるから、一石二鳥かなと」

「そういうのは一石二鳥って言いませんからっ！　というか、ご自分の身体を洗う手間くらいは惜しまないでください！」

「ミズカがそう言うのなら、いたしかたないね。まあ、無理強いは好きではないし、一人で入るとするよ」

「そうしてくださいっ！」

わたしがむくれてみたところで、ユエル様はその反応すら面白がってる。

はじめから冗談だと分かっているのに、軽く受け流せないのが口惜しい！

だけど、ユエル様って面倒くさがりだから、「身体を洗うのが面倒」というのは、きっと本心だ。そのくせお風呂好きなようで、わたしの倍の時間は入ってる。

何をしているのか訊いたことがあるけど、本を読んでいたり、音楽を聴きつつうたた寝をしていたりするらしい。

のぼせないのが不思議。体内に冷却装置でも備わってるんではなからうか。それとも、ユエル様自身の属性が“火”だから、のぼせにくいんだらうか？

「それじゃ用意しておきます。お疲れのようですから、今日の入浴剤はローズマリーのバスソルトでいいですか？　それともラベンダーにしましょうか？」

「そうだね、今夜はローズマリーでお願いしようか」

「わかりました。準備が整いましたら、お呼びします」

「頼むよ」

ユエル様はまだくすくす笑っている。

ユエル様のまなざしから逃げるように、わたしはぷいっとそっぽ

を向いた。けれど目の端にユエル様の微笑みをとらえたままだ。どうしても逸らしきれはしない。

もつつ、いいかげんその艶っぽい微笑はしまってください、ユエル様！

胸の動悸がさつきからちつとも治まらなくて、ユエル様の顔をまともに見られない。笑われているのが悔しいのじゃない。なのに、なぜかしら悔しい思いがふつふつと心中で燻ぶっていた。

……だけど、よかった。

ユエル様、いつものように笑ってくれてる。そのことに安堵した。すつと、肩から力が抜けた気分だった。

気になることはたくさんあるけれど、それよりもこうしてユエル様に笑っていららうことの方が、わたしにとっては何よりも大切なことだ。

ユエル様には、笑っていてほしい。

そして微笑んでいるユエル様のお傍に、
出来ることならいつまでも、添わせてほしい。

だから……疑問に蓋をしておけばいい。目を瞑っていればいい。

でも……

わたしは、ばかだ。

自分のことばかりに気を取られて見逃してしまったのだ。

笑うユエル様の顔色が、ほんの僅かだったけれど、蒼ざめていたのに。

心が重い。

心の中に靄がかかったようだった。見通しが悪くなって、見えていたはずのものまで見えなくなってしまった。そんなもどかしさに苛立ちすら覚えて、焦燥感をも募らせていた。

こんな気持ちになったのは初めてかもしれない。

ユエル様の憂いを含んだ美しい微笑に、なぜこんなに胸が鳴り、疼くんだろう。背の傷までが痛み、逃げだしたい衝動に駆られる。それでいて離れるのが怖い。

こんなもやもやした気持ちを、いったいどうしたらいいのだろう。どうすれば治まり、元通りになるのだろうか……？

ユエル様の傍に居たいと願うのに、傍に居てはいけない気すらしてしまふ。

胸をひしめかせるこの感情の名を、わたしは知らなかった。知るべきではないと、思っていた。

* * *

森を渡る夜風の音が窓越しに聴こえてくる。

八月最中だというのに、少し肌寒い。昼間の暑さが嘘のようだ。

ふと、部屋へ向かう途中、廊下で足を止めた。

カタカタと窓枠の木が鳴っている。窓の外では梢が擦れ合う音がまるで細波のように辺りに響き渡っていた。

日付が変わる時刻まではまだ少し猶予がある。けれど静寂な空気は宵の深さをいやおうなしに体感させた。

屋内はしんと静まり返っている。ついさっきまでイスラさんやア

リアさんがいて、多少なりとも賑やかだったのに。

間接照明の合間合間にできる黒い影に、僅かな物音すら吸いこまれ、かき消されていくかのようだった。

なんとはなしに、窓に目をやった。夜の闇を背面にした窓ガラスにわたしが映る。疲れ気味のわたしの顔にかわり映えはないのだけど、不意に違和感を覚えた。

なんだろう。何か忘れているような……？

「……………？」

首を傾げ、見たところでなんら嬉しくもないわたし自身の顔を、改めて注視した。

「……………あっ」

瞠目し、右の耳たぶを掴んだ。

リアさんを買っていたいただいたイヤリングが無くなって！

左耳にはある。

細い銀の鎖の先で、水色のビーズが照明の明かりを受け、光を弾かせている。白やピンク、緑から紫へと、光の当たり具合によってくすんだ水色のビーズは様々な色をみせる。ハートの形をしたクリスタルガラスのイヤリングだ。

けれど、片方しかない。右耳にもたしかにつけていたのに、なくなってる！

買っていたいたばかりなのに、もう失くしてしまったなんて、

……………どうしよう！

体中をはたいて、衣服のどこかに引っかかってないかを確認してみた。着替えはまだ済ませてなかったからワンピースのままで、そこに薄手のカーディガンを羽織っている。どこにも、イヤリングはひっかかってなかった。

どこで落としたんだろう……！ 落としたという記憶もない。

踵を返し、駆け出した。

まず、寝室に戻って部屋中をくまなく探した。ベッド周りを重点的に探した。掛け布団もひっぺがし、枕の下もシーツの下も、全て

めくって確かめてみた。箆笥や机や椅子、窓際も、目を皿にして探してみたのだけど、見つからない。

帰宅した時には間違いないく、両耳にイヤリングが下がっている感触があった。つけ慣れないものだったから重たいとすら思っていたのに……！　なのに落としたのに気付かなかったなんて！

廊下、階段、エントランスホールから玄関周り、それからリビングにキッチン、ともかく今日歩いた場所をしらみつぶしに探そう。寝室を出て、廊下と階段の床を端々まで確認しながら、次はリビングへと向かった。

広いリビングでの探索も、かなり骨折りだった。

入り口付近から座ったソファアの周りを特に念入りに探したのだけど、見つからなかった。

スワロ……ええっと、スワロフスキーだったかな？　クリスタルガラスのイヤリングだったから、落とした拍子に割れてしまってるかもしれない。

もしそうだったら、どうしよう……。

わたしに似合うからと、アリアさんが選んでくれたものなのに。

「……………」

締めつけられるような痛みには耐えかねて、わたしは胸元を掴んだ。それで痛みが治まるわけもないのに、こぶしに力が入る。

やっぱりわたしには不相応な品だったんだ。わたしなどが身につけていい装飾品ではなくて……だから消えてなくなってしまったんだ。

でも、そんなことは失くしてしまった言い訳にはならない。どんな言い訳をしたところでアリアさんの好意を二重に踏みにじるだけだ。

探しても探しても見つからない焦燥感も手伝って、気分はどんどん沈み、あんまりにも情けなくて泣けそうだった。

じわりと視界が滲む。

「だめだめっ！ 泣いてる場合じゃない！ もっとちゃんと探さなくちゃあ！」

ひとりごち、わたしは目をこすって、頭を振った。

諦めちゃだめだ！ なにがなんでも見つけなくちゃ！

屋敷からは出ていないのだから、屋敷内のどこかにはあるはずだもの。

リビングを出、エントランスホールを一通り見てから、今度はキッチンへと向かった。

キッチン内の照明を全部点け、足元に用心しつつ、床を見回した。

「……ないなあ……」

それから水周りを一通り確認して、次はテーブルの上を探った。テーブルの上には銀製のトレイと、洗って布のカバーを被せられたポット、それから紅茶の缶が三つとお菓子受けの陶器の皿と、置かれたランチョンマットがあるだけ。それらを全部どかしてみたところで、イヤリングは見つからなかった。

それからテーブルの下にもぐりこんだ。けれど、やっぱりイヤリングは見つからない。

這いつくばった姿勢のまま、わたしはがっくりとうな垂れた。床についている手が冷たくなって震えだす。

見つからないままだったら、どうしよう。

見つかったとしても、壊れていたら……割れてしまっていたら、どうしよう。

どうしよう。そればかりが頭の中をぐるぐると回る。どうしようもない。それは分かっている。

黙っているわけにもいかないから、見つからなくても、壊れたものが見つかっても、アリアさんにはちゃんと謝罪するつもりはある。

それが嫌なんじゃない……怖いんじゃない。

だって……。

アリアさんは優しい方だから、せっかくの好意を無にしたことを怒ったりはしない。きつと「気にしないで」と笑ってくれる。

それが分かるから、なおさらに困ってしまうし、辛い。申し訳なく堪らない。

「……っ」

溢れ出そうになる涙を堪えようと、ぎゅっと眉をしかめて目を閉じた。その時だった。

「ミズカ？」

聞きなじみのある艶っぽく甘い声音。それがいきなり降ってきた。背後の、高いところから。

「ミズカ、いったいこんなところで何を？」

わたしは条件反射的に、その声に応えようと

「……ッ！」

立ち上がるうと手を床から離し、腰を伸ばした。そして思いきりぶつけてしまったのだ。それはもう……ゴンツと音が鳴り、テーブルが僅かに動くほどの勢いで。

「……いつ、っ……っ」

激しい音をたてたわたしの後頭部に、当然の如く激痛が走る。

「……っ」

あまりの衝撃に頭を抱えてうずくまった。痛さに声も出ない。引っこめようとした涙が眦に滲んで、瞼の内側で小さな星が点滅して

る。

痛い、痛すぎるよっ。

もしかしてこれは天罰？ 天罰が下ったの？ 下っても仕方ないとは思うけど、これはちよっと……痛すぎる……っ！

「大丈夫、ミズカ？」

後頭部を打ちつける原因をつくった声の主が、まだテーブルの下にいるわたしの様子を窺ってきた。

「……………う、……………っ」

顔をあげると、ユエル様の深緑色の瞳とぶつかった。心配げに覗き込んでくるユエル様のまなざしは、衝撃のせいでチカチカしてるわたしの目を、さらに眩ませる。

頭も痛くて目もチカチカして、その上さらに心臓までドキドキ落ち着かなく鳴りはじめて、もう收拾がつかない。

「本当に大丈夫、ミズカ？　すごい音がしたけど」

わたしの無事を確認したからだろう、ユエル様は目元をやわらげて忍び笑っている。

「そろそろそこから出たらどうかな？　動ける？」

そう言って、ユエル様はわたしに手を差し伸べてくれた。けれどその手を取りはしなかった。伸ばしかけた手を引っ込め、それを後頭部に回して、のろくさとテールブルの下から出た。ふらつきながらもなんとか立ち上がり、ワンピースの裾を軽くはたいて埃を払った。それからようやく視線をユエル様の方に向けた。

「驚かさないでください、ユエル様っ！　後頭部、あまりの衝撃に割れるかと思いましたよ」

照れ隠しとか、動揺とか、目の端にちよっぴり滲みでた涙をごまかすため、可愛げもなく、文句をつけた。

「ユエル様はどうしてそう足音というか、気配がないんですか、もうっ！　いつもびっくりするんですけど！」

「驚かせたのは悪かったけれど」

ユエル様はため息をつきつつ、額にかかる長い前髪を片手で後ろへとかきあげた。その手は、わたしの手を掴もうとしてくれた手だった。

困ったような寂しげなような、そんな微笑を湛えてユエル様はわたしを見つめる。

「頭、割れてはいなさそうだね。とりあえずは無事で何より」

「……………」

無事じゃないです、ユエル様！

と、言い返しそうになった。

だって、優艶な微笑を向けられて、心が無事ではいられないもの。平静ではいられない。

胸が鳴って痛いほどだ。後頭部の痛みよりもずっと激しく、苦しい。

ユエル様の微笑を見、声を聞くだけで、こんなにも胸が震えるなんて。感情が波立つなんて……。

この感情の正体は、何なのだろう。

見極めたいけれど、やはり知るのが怖かった。

だから、ユエル様の美貌があまりに眩しいせいでと、……それに動揺しているだけの感情だと、内心で自分に言い聞かせていた。

30・消えるもの、消えないもの

不老であり長寿な“吸血鬼”のわたし達は、人間よりは丈夫だといえ、不死身ではないし霞でもないから、怪我をすることも普通にある。

激しく殴打したり肌が裂けたりしたら当然痛いし、血だつて出る。たんこぶだってできるし、足首を捻ったりすることだってある。

人間と違うのは、治りが早いということ。そしてめったなことでは死に至らないことだろうか。

小さな擦り傷程度ならものの数分で跡形もなく治ってしまう。骨折などはさすがに時間がかかるようだけど、人間よりうんと早く完治するらしい。

早く治るからといって、痛みがないわけではない。

以前、ユエル様に訊いた事があった。

「わたし達の致命傷って、なんででしょう?」、と。

ユエル様は僅かの間を置いてからわたしの質問に答えてくれた。

「そうだね……、首を斬られれば死ぬよ、確実に。銃で脳や心臓を撃ち抜かれ、大量に出血したままの状態を放置しておけば、これもさすがに生きてはいられない。人間の致命傷と、さほど変わりはないよ」

まるで他人事のように淡々とした口調でユエル様は語って聞かせてくれた。

「だが、死ぬ時の様子が人間とは違う。私達は、存在そのものが消えてしまう。異界に吸い込まれるようにして“消える”。あとかたもなくね」

ユエル様の口調は平淡なものだったけれど表情は少し険しかった。「み、見たことあるんですか、ユエル様?」

声を上ずらせながら“消える”その瞬間を見たことがあるのか尋ねてみた。それは確認に近かった。答えは予想通り、「ある」だった。

た。

塵となって消える、その例えの通りだったという。

一瞬にして体が細かな粒子となり、それが八方に広がったかと思うと渦を描くようにして急速に収縮し、その中心の空間がひずんで裂ける。その歪んだ割れ目に粒子が吸いこまれるようにして、一瞬のうちに“消える”のだという。

「消える”直前の状況にもよるとは思うが、だいたいそのような感じで消えてなくなるようだ。私も、多くを目撃してきたわけではないから必ずしもそうだとは言えないが」

言ってから、ユエル様は少しばかり後悔したような顔をしていた。「私が見たその瞬間は、人間に狩られての結果ではなかったよ、ミズカ。あれは、事故のようなものだった」

わたしはきつと不安と恐怖を露わにし、顔面蒼白になっていたんだろう。わたしの心緒を気遣ってユエル様は言葉を足した。怖がらせてしまったかな、と悪戯っぽく笑って。

ユエル様は、面倒くさがりで気まぐれなところも多分にあるけれど、そうした気遣いをさりげなくできる、優しい方だ。

からかうようなことを言ったり強引に話をそらせたりごまかしたりするのは、そういった気遣いからくる言動なのだと、最近になってようやく分かり始めた。もちろん、わたしをからかって反応を楽しんでいるだけの時もあるけれど。

* * *

ぼんやりと“吸血鬼”の致命傷について思いを巡らせていたわたしに、ユエル様はやや間を置いてから尋ねてきた。

「ところでミズカ、今時分、こんなところで……テーブルの下に潜り込んで、いったい何を？」

「……あ」

失せ物を探しているのだと即答できず、声を詰まらせてしまった。何も悪いことをしていたわけでもないのに、奇妙に後ろめたかった。

「あの、え、と……、実は」

けれど、ごまかしたり隠したりするのは良くない。というより、すべきじゃない。すぐにそう思い至って、床に落としていた視線をあげてユエル様を見た。

この時になって、わたしはようやく白緑色の夜着の上に黒サテンのガウンを羽織っているユエル様の姿を見、そして銀の長髪がしつとりと濡れていることに気がついた。

「ユエル様、また！」

「ん？」

「また髪を乾かさないままで！」

「……ああ」

ユエル様は髪をつまみ、「そのうち乾かさ」と、面倒くさがりらしいことを言う。

髪はちゃんと乾かしてから寝んでくださいと、いつも口を酸っぱくして言っているのに！

「せっかくのきれいな髪が傷んだらどうするんですか」

と、容姿端麗を誇るユエル様の心理について窺ってみたのだけど、ユエル様は「大丈夫」と笑って応え、そして本当に「大丈夫」なのだ。

特別な手入れをしている風でもないのに、ユエル様の銀髪はいつでもツヤツヤサラサラで、美しい。

たまにはわたしが美髪を保たせるオイル等を用いてブラッシングをしてさしあげるのだけど、そんな必要を感じないくらいに、ユエル様の銀髪は常に美しく、枝毛も見つけたことがない。

ユエル様の髪は形状記憶の機能が備わっているに違いない。髪にまで「人外的要素」が含まれてるんだ、きっと！

だから傷むこともなくて、濡れたまま寝たせいでついた寝癖だっ

て、ちょっと手櫛で撫でつけければ直ってしまうんだ。

おさまりが悪いくせつ毛のわたしとしては、羨ましくて堪らないでも、だからこそ、ユエル様の髪はいつまでも美しくあってほしいと思う。

わたしはめげずに訴えた。

「髪が傷まないにしても、ちゃんと乾かさないままではシーツや枕も濡れてしまいます。風邪をひくかもしれないじゃないですか！

風邪は万病の元なんですよ、美容にもよくありません」

ユエル様は苦笑して応える。

「大丈夫、風邪などひかないよ」と。

……それもまた事実だった。

* * *

いわゆる人外的存在のわたし達は、病気に罹ることはないらしい。風邪もひかないし肺炎にも罹らない。インフルエンザウイルスに侵されることもない。胃潰瘍や胃下垂に悩まされることもなく、虫垂炎の痛みを知ることもない。

ただし「具合が悪くなる」感覚に陥る事はあるし、稀には発熱し頭痛を患うことはある。この発熱や頭痛のおもな原因は精神的な疲労であるらしい。

「存外デリケートなんだよ、私達の精神構造は。肉体が頑健なだけに、そうなるのかもしれないね」

ユエル様は心なしか皮肉っぽい笑みを作り、ため息をついて先を続けた。

「だからね、ありがたいことに風邪をひく心配はないんだよ」

「でもですね！」

ちよつと強気な態度に出て、言い返してみた。

「もしかしたら、ユエル様が初の風邪つびき吸血鬼になるかもしれ

ないじゃないですか！ 第一号っていうのは、聞こえはいいかもしれませんが、風邪つびきっていうのはいただけないです！」

ユエル様はなにやらくすぐったそうな表情をしてわたしの小言を聞いている。

「いざ風邪をひいてしまったらどう治せばいいのかわかりませんし、お薬も飲めませんよね、丸薬とか粉薬とかは。あ、シロップ状のものなら大丈夫かな……？ でも肉体の構造が人間と違うなら、薬もやっぱり効かないのかな？ 病院には連れていけないし……」

最後のあたりはもう、わたしの独り言になっていた。

足を挫いた時は患部に湿布をはった。切り傷には傷薬を塗って絆創膏を貼った。このあたりの対処は人間と同じだ。

けど、もしも風邪をひいたら？ 発熱したなら額を冷やすとか、とにかく身体を温めるとか、そんな程度の処置しかできない。

「風邪はひかないから、それらは無用の心配だよ、ミズカ」

ユエル様はさも可笑しそうに笑って、ぐるぐる巡ってるわたしの思考を止めてくれた。

「それに、具合が悪い時はおおよそ渴いている時だからね。飲めば、すぐにはいかなくとも治るよ」

「……………」
人間の生気を飲めば、治る。

そのことについても、ユエル様は語ってくれた。

「生きる力、エネルギーとでも言うのかな？ それ自体を、私達は私達自身の体内では作れない。人間の生気を飲むというのは、つまり“生きようとする力”、それを無理無体に奪うということだ」

ユエル様は“吸血鬼”の存在に対して、どちらかといえば嘲笑的だ。全否定とまではいかないけれど、蔑み、自嘲めいたことを時々口にする。

「人間に寄生し、人間のまねごとをして存在をごまかしてしか生きていけない、弱き存在だよ」

そんな風に言われる度、わたしは大抵押し黙ってしまう。ユエル

様の思いが痛ましくて切なくなってしまうから。

けれど時には控えめに反駁してみたりもする。うまく言い表せないのだけだ。

「でも、ユエル様。人間だって動植物を食べて、その命を繋いでます。奪っているのではなく、分けてもらってるって言うてはいけませんか？」

存在のありようは違ってても、やっぱりわたし達だって、今こうして生きているのだもの。人間とは別種の存在だからといって、わたし達がいまこうして存在しているそのこと全てを否定してしまうなんて……悲しすぎる。

そんな思いはもうしたくなかったし、ユエル様にそんな思いを抱えたままでいて欲しくなかった。

ユエル様には、不遜に、艶やかに、たおやかに、優しく穏やかに笑っていてほしい。

「それに、一方的に寄生しているとは限らないです、きっと。ユエル様の美貌を眺めては眼福だったため息ついてる女性達も大勢いるわけですし……。美しい物を観賞するのは心の栄養になるって、ユエル様、以前仰っていたじゃないですか」

我ながら無茶を言ってるなと思う。理屈も何もないし、説得力のかけらもない。

けれどユエル様はわたしの戯言を小馬鹿にしたり呆れかえったりもしない。

「……なるほど」

ユエル様はふっと相好を崩し、やわらかいまなざしでわたしを見つめて言った。

「たしかに、そうした得点はあると言えるかもしれないね。ミズカの記憶力の良さと純朴とも言える解釈の仕方には脱帽するよ」

「そんな……」

我知らず、頬が赤くなってしまう。

目も眩むような美麗な微笑は、多くの女性達（女性に限らないか

もだけど）にとっては眼福といえるものだろうけど、……わたしにとっては目の毒だったりもするんです、ユエル様。

ユエル様が、吸血鬼史上初の「風邪つびき吸血鬼」になる心配はないにしても、濡れ髪のユエル様をそのまま放っておくわけにもい

かない。
「やっぱりそのままじゃだめです、ユエル様」

わたしはユエル様のガウンの袖口を掴み、歩き出した。

「ミズカ、どこへ？」

ユエル様は無抵抗だ。やれやれと嘆息しつつ、わたしの後をついてくる。

「洗面所へ！ わたしが乾かして差し上げますから」

「ワインを取りに来ただけだね、ミズカ」

「わたしが後で寝室にお届けします。髪を乾かす方が先です」

「はいはい」

ユエル様はこういう時、妙に聞き訳がいい。なすがままに洗面所に連れて行かれ、竹材の椅子に座らされている。

わたしは、少しだけ俯きかげんになっているユエル様の背後に立ち、肩に流れる銀髪を掬い取った。

緩やかなウェーブのある銀髪は、ふんわりやわらかくて、触り心地がいい。ずっと触れていたいと思ってしまうくらいに。それにとってもよい香りがする。

ローズオイルを少量手にとり、ユエル様の髪にしみ込ませてから、ドライヤーをかけた。

普段これといって特別な手入れをしていないにも関わらず、さすが形状記憶美髪。肩先にかかる銀髪に、枝毛一つもありはしない。ブラシでとけばとくほど、銀の髪はつやを増し、しなやかになる。

ユエル様は黙ったままじっと座っている。

頭皮を引っ張らないよう気をつけながらブラッシングをし、ドラ

イヤーの風を当てすぎないようによう注意を払って髪を乾かし整えていく。ユエル様の髪を乾かすのは、……実は、昔からひそかな楽しみだった。

でもそんなことを口にしたら、ユエル様はにっこり笑って、「それじゃあ、これからは毎晩、ミズカに髪を乾かしてもらおうかな」

と言うに違いない。

それは困る。とても困る。

嫌というのではない。むしろ髪くらいなら毎晩整えて差し上げてもいいかなと思う。それでユエル様が喜んでくださるのなら。

けれどやっぱり遠慮したかった。

だってこんな風に密着時間が長いのは、心が落ち着かなくて困ってしまうもの。

こうして傍に居たいのに、傍に居ると苦しいなんて……。

もやもやとして、疼くようなこの気持ちの正体を、敏いユエル様はきつと見抜いて、悟ってしまう。

それも、できれば遠慮したかった。

31 指先の熱

髪もちょうどいい具合に乾いてきたから、ドライヤーのスイッチを切り、脇の棚にドライヤーを戻した。一度は手を離れたけれど、ブラッシングは再開させた。

ドライヤーの音が消え、代わりにしんとした黙もくが落ちてくる。呼吸の音、髪を梳く微かな音すら耳に着くほどの静けさだ。

何か話さなきゃ。

そう思って顔をあげた。その途端、鏡越しにわたしを見やっていたユエル様と目が合ってしまった。

「ミズカ」

「ユエル様」

声まで、重なった。

わたしは肩を竦ませ、ユエル様は眉を下げる。

「す、すみません。なんでしょう、ユエル様」

「いや。ミズカ……、何？」

「いえ、あの、ユエル様からどうぞ」

「……そう？」

ユエル様はふっとため息をつき、それから肩越しに振り返ってわたしを仰ぎ見た。

「ミズカ、さっきはキッチンで何を？」

テーブルの下にもぐりこんで、地震があつたわけでもあるまいにと、ユエル様はからかうような笑みを浮かべた。

その笑顔のおかげで、少しだけ気が楽になった。

ああ、いつものユエル様の笑顔だって、ホツとした。

だけど、なんだろう……？ ひっかかるものがあつた。

いつものユエル様らしい笑顔ではあつたけど、なんとなく違和感を覚えた。

照明のせいだろうか？

深緑色の双眸は薄暗く曇り、白皙の美貌に翳りが落ちて蒼ざめて見える。儂げなガラスの彫像のようだ。

「ミズカ？」

ユエル様は鏡の方に向けていた体をずらし、首を傾げてわたしの顔を覗き込んできた。

「あ、ええつと、実は……ですね」

ほとんど無意識に、わたしの左手は、左の耳たぶにあるイヤリングを確認していた。

よかった。まだこっちのイヤリングはちゃんとある。

「失せ物を探してたんです」

「失せ物？」

「はい」

わたしは持っていたブラシをドライヤーの置かれているのと同じ棚に置いた。

ユエル様も椅子をひいて立ち上がった。ためらって一歩足をひいてしまったほど、ユエル様との距離が近い。

バスルームに繋がる洗面所は、他の部屋に比べたら何分の一かの狭さで、その分どうしてもユエル様との距離は狭まってしまふ。背後はもう洗面所のドアだ。あと一歩身を引けば背中がぶつかる。

「失せ物って、もしかしてこれかな、ミズカ？」

「え？」

ユエル様のでのひらに、水色のそれが乗っていた。わたしが探し回っていた失せ物だ。

ハートの形をした、けれどまるでため息を模ったかのような、ガラスのイヤリング。

光を受けて、ちらちらと色を変えていた。

ユエル様はそれを、ここ……つまりバスルームで拾ったのだと言った。

たぶん、お風呂の支度を整えようとしていた時に落としたんだろう。思い至らなかつた自分の迂闊さが情けなくなつた。

「すぐに返そうと思つていたのだが、すっかり忘れていた。不安にさせてすまなかつたね」

「……っ」

ユエル様がわたしに詫びてきた。

な、なんですか、ユエル様！？ そんな風に優しいのは、神妙なのは、ちよつとズルイですっ！

それにユエル様が謝るようなことじゃないのに！ 落としたのはわたしで、ユエル様のせいなんかじゃないのに！

赤くなつた頬を隠したいということもあつて、わたしは肩をすばませて頭を下げた。

「とんでもないです！ 拾つてくださつてありがとうございます、ユエル様」

とてもじゃないけれど真正面からユエル様の顔を見ていられなくて、落ち着かなく瞬くをして、ユエル様の手の上にあるイヤリングに視線を固定した。それを受け取ることもできずにいた。

「見つかつてよかつた。それに割れても欠けてもないみたいだし……。あ、もうこつちの方もはずしておこうかな。また落としたりしちゃつたらタイヘンだから……」

左の耳に、再び手をかけようとしたその時だった。

「これは、アリアが選んだのかな？」

ユエル様に尋ねられ、わたしは顔を上げた。

どくんと、鼓動が跳ねた。

憂いの含まれたユエル様の嫣然とした微笑が見上げたそこにあり、じつとわたしを見つめ返してくる。

「は、はい、そうです。今日、服とかアクセサリーとか色々を買つてくださつて」

「そう。さすがアリアだね。いい見立てだ」

「ええつと、その……」

なんと応じればいいのか。わたしは曖昧に言葉を濁した。

どきどきと心臓が痛いくらいに鳴って、体中が熱くなってくる。

こんな静かな空間だ。鼓動がユエル様に聞こえてしまうじゃないだろうか。そう思ったならさらに恥ずかしくて、息が詰まりそうだった。

ユエル様はそんなわたしの動揺に気づいているのかいないのか、すっと手を伸ばしてイヤリングのない方の右耳に触れてきた。

「ミズカに、よく似合ってる」

「……………」

ひゃっ、と、声にならない声があがった。思わず眉間に力がこもって目を瞑ってしまった。

身体ががちがちに強ばって、恥ずかしくて居たたまれないのに、身を退くこともできなかった。

うつすらと瞼をあげると、ユエル様の優艶なまなざしとぶつかった。ユエル様はわたしの耳たぶを指先で抓む。そして囁くような声音で話を続けた。

「イヤリングは落としてしまいやすいからね。いっそ、ピアスホールを開けてしまおうか」

「は、……………え、あの、ピ、ピア、ス、ですか？」

平常心ではとてもいられず、声も上擦ってしまう。

手を離してくださいと訴えることもできない。

「開ける時は少し痛むけれどね。その方が楽でいい。このイヤリングもピアス用の金具に付け替えればいい」

「はあ……………」

「私が開けてあげよう。ファーストピアスも私が用意するから……………」

ユエル様の声は耳に届く。鼓膜を叩いているのはわかるけれど、何を言ってるかはちっとも頭に入ってこなかった。それよりも、自分の心音の方がうるさくて、こめかみが痛んでくるほどだったから。だって、ユエル様の顔が近づいてきてて！ ユエル様の深緑色の

双眸がわたしを間近に映してて！ ユエル様の両手が、いつの間にかわたしの頬を挟んでて！ ユエル様の熱い息が、額にかかって……っ！

心臓を殴られているみたいだ。鼓動は速まり、胸が痛くて堪らない。

この状況は、いったい何……っ？

いったい何が起こってるの？ ユエル様は、何をしようとしてるの……？

「ユ、ユエル……ル、さ……っ」

空間が圧縮されるように狭まってくる。 空気が違う。 ユエル

様がまとう空気が、いつもと違う。

わたしは一步、ユエル様から退いた。

だけどそれ以上はもう後ろ下がれなかった。戸に肩がぶつかった。ガタツと戸が音をたてた。背が冷たい。背の傷が鼓動のせいで疼

きだした。

「あ、の……っ、ユ、ユエ……ッ」

「……………」

ユエル様の手は、まるで火そのものだ。焦げつくほどに熱い。その両手がわたしの頬を挟んで離さない。

わたしの頬も熱いどころではなくなっていた。炎に炙られてるみたいだ。

わたしは硬直し、ユエル様から目を逸らすこともできない。

ユエル様はまじろぎもせずわたしを見つめている。ひそめられた柳眉の下、切なげな緑のまなざしがわたしを縛る。

「ユエル様……っ、あ、のっ」

わたしはもうすっかりパニックに陥っていて、どうしたらいいのかわからなかった。

ユエル様と呼ぶ声もみつともなく震えて、他の言葉も出てこない。ユエル様の様子がおかしいと、ここに至ってようやくやくはつきりと分かった。目の焦点も合っていない。わたしを見つめているように

見ていない。熱っぽく、それでいてひどく虚ろだ。

「ユエル様……」

震えだした手をどうにか上げて、ユエル様の腕を掴もうとした、その時だった。

「……ミズカ……」

熱い息とくぐもった低い声が耳朶に、甘い香りを含んだ銀髪が頬に、わたしの戸惑いを煽るように落ちかかってくる。

「ミズカ……カ……」

低くかすれた声がわたしの名を繰り返す。その声もやはり虚ろに響く。

「……ユエル様？」

ユエル様の上体がぐらつき、傾いた。

「ユエル様……っ」

途端、糸の切れたマリオネットのように、ユエル様の身体が前のめりに倒れ、足元から崩れた。

倒れ掛かってきたユエル様の身体を支えきれず、わたしは戸に肩や頭をぶつけ、ずるずると崩れ折れる。そしてそのまま横倒しに倒れてしまった。わたしの体の上に、ユエル様の体がかかってくる。

「ユエル様……っ!？」

突然昏倒したユエル様は、苦しげに眉根を寄せていた。目はきつく閉じられ、息も荒い。

「ユエル様？ ユエル様っ!？」

ユエル様は応えない。

血の気の引いた唇は動いてくれなかった。わたしの名を呼んではくれなかった。

「ユエル様っ！」

わたしの左耳から落ちたそれと、ユエル様の手から転げ落ちたそれが、冷たい床の上で僅かに触れ合い、光を弾いた。

「ユエル様っ!!」

わたしの震える呼び声は、夜の帳に空しく閉ざされた。

32・救い手

あの雨の日と、……あの雨の港で出逢った時と同じだ。

明け方だったか、日暮れ時だったか、季節も何も憶えていない。

ただ、雨の冷たさだけは、記憶に留まっている。

苦しげに眉をひそめ、地べたに行き倒れている銀髪の青年の姿も

……

今、あの雨の日と同じように、ユエル様は意識を失い、倒れている。

柳眉をしかめ、その下では長い睫が僅かに震えている。血の気を失った唇の隙間から零れ出る絶え絶えな吐息は、いかにも苦しげなものだった。

握られたこぶしに力はなく、けれど、青い血管が手の甲に濃く浮き上がっていた。

ユエル様の下でもがきつつ、ユエル様の肩や背を叩いた。

「ユエル様！ ユエル様っ！！」

苦しげに寄せられた柳眉や瞼は時折ぴくりと動くのに、目が開く気配はなかった。美しい湖水色をした緑の瞳を見せてはくれなかった。

ユエル様の白い面に薄い氷が張ったようだった。息は熱いのに、ユエル様の肌はどんどん冷たく蒼くなっていく。

「ユエル様、目を……目を開けてくださいっ！ ユエル様っ！」

どんなに体を揺すっても呼びかけても、ユエル様は目を開けてくれず、何の反応も示してくれない。

ユエル様の肩を掴む手が震えだして、力が入らない。背筋が冷た

くなつていくのは床が冷たいからだけじゃない。

怖くて堪らない……！ ユエル様がこのまま目を覚まさなかったらって、そう考えただけで背筋が凍る。そんなことにはならないって否定しても不安は募って、それに押し潰されそうだった。

どうしよう……！ いったいどうしたらいいの……っ！？

成す術もなく床の上に共に倒れこんで、わたしはユエル様を助け起こすことすらできない。

あの日も、そうだった。

あの日、あの遠い日…… ユエル様と出逢ったあの雨の日のことは、はつきりとは憶えてない。だけど、港を行き交っていた見知らぬ人達に助けを求めたことはなんとなく憶えている。必死になって周りに助けを求めた。何人かの親切な方々が足を止めて、救いの手を差し伸べたくれた。そうして、奉公先の屋敷まで運んでもらった。

わたし一人ではユエル様を助けられなかった。他人の手を借りねば屋敷に運ぶこともできなかった。助けて下さいと声を張り上げるしかことしかできなかった。

今もまた、わたしはユエル様を助けられないでいる。ユエル様に何が起こったのか、それすら知らずにいる。

なんて……なんて無力なんだろう、わたしは……！

昔も、今も……！

「……………っ」

己の非力さが情けなくて空しくて、泣きそうになった。けれど口の端をきゅつと結んで、涙を堪えた。

泣いている場合じゃない！ こんな時に泣いたってどうしようもないもの！

今は周りに誰もいなくて、わたししかいないのだから！

己の非力さを嘆くより先に、今はユエル様を、なんとかしなくちや……！

このままユエル様が気づくのを待っているなんて悠長なことではできない。

でも、どうしよう!? ユエル様の下敷きになったままじゃ、
なんとか「しようにも」、「なにも」できない。

ユエル様は、わたしの左肩に額を乗せている。やわらかな銀の髪
が、わたしの頬に、鼻先に、唇にかかっていた。

さっきまでドライヤーの熱を残して温かった銀の髪は、霧雨の
ように冷たくなっている。

このままじゃどんどん体温を奪われていってしまう。

「んっ、ん……っ、くううっ」

腕に力を入れて、ユエル様の肩を押し上げてみた。

ユエル様は目覚めない。肩はなんとか持ちあがったけれど、それ
だけではどうしようもない。

ユエル様の体をどかすだけなら、きつとできる。手足に力をこめ
て思いきり伸ばせば、ユエル様の下から這い出ることはできるだろ
う。

だけどそんなことをしてしまったら、ユエル様は床に叩きつけら
れてしまう。冷たい床にうつ伏せになってしまう。強引に押しつけ
てひっくり返せば、仰向けになった拍子に頭を床に打ちつけてしま
う。……そんなこと、できない。

せめて、床にタオルを敷いて、そこに仰臥させられたらいいのに。
そうすれば介抱のしようがあるのに。

ああ、でも! 「介抱」って、いったい何をどうすればいい
んだろう?

生気を飲ませればいいのかもしれないけど、昏倒しているユエル
様にどう飲ませればいいのか? わたしの生気なんていくらでも飲んで
もらって構わないのに。その方法が分からないなんて!

「……………」

……不意に気がついた。

ユエル様はわたしの生気を今まで一度たりとも飲んだことがない。
その必要がなかったからとはいえ……もしかして、主たるユエル様
は、眷族であるわたしの生気は飲めないの?

だとしたら、わたしはいつたい何のための眷族なの？ 何のためにユエル様の傍にいるの？

こんなにも役に立たないのに……！ 今もこうして、ユエル様を助け起こすことすらできないでいるのに！

「ユエル様っ！」

半泣きになりながら、わたしはユエル様の身体を起そうと、再び全身に力を込めた。

やっぱり、まずはユエル様の下から這い出て、それからユエル様を仰向けさせた方がいい。

「……っ、ユエル……様っ」

肘や肩甲骨や腰骨が硬い床にあたって痛かった。けれど、そんな痛みよりもユエル様を助け起せないもどかしさのほうが辛かった。

ふと、思い出した。

そうだ、イレクくん！

イレクくんがいる。

アリアさんとイスラさんは出かけてしまったけれど、イレクくんは今この屋敷に残ってる。大声を出せば、二階の北端の部屋にいるイレクくんの耳に届くかもしれない。とても離れていて声が届く可能性は低いけれど、それでももしかしたら気づいてくれるかもしれない。

そんなことを頭の片隅で思いついたその時だった。

こちらへ近づいてくる足音に気がついた。もしかしてイレクくん？ そう思っただけで、違った。

「あゝああ、やれやれだぜ。アリアのやつ、こき使いやがって」という暢気な声が洗面所の戸の向こうから聞こえ、直後、引き戸が勢いよく開けられた。

「しかもたいして美味くもない生気ばっかだったし……って、……あ」

洗面所の戸を開けたのはイスラさんだった。

イスラさんは重なり合って床に倒れているわたしとユエル様を見

るや絶句し、一瞬硬直した。その後すぐバツの悪そうな顔をして目を泳がせ、そのまま後退って、そうっと戸を閉めようとした。

「イツ、イスラさんっ！ 待ってっ！」

わたしは声を絞り出し、イスラさん呼び止めた。

「イスラさん、待って、行かないでっ！ 助けて……助けてください！ ユエル様を助けて！」

わたしの必死の叫びに、イスラさんは非常事態であることを察しにくれたようだ。

「あ、ああ、ごめん。つい勘違いしちゃって」

「い、え、……あの、か、勘違いって……どんな勘違いを……っ」

ユエル様の身体の下でもがきつつ、イスラさんに訊き返した。悠長なことを言ってる場合じゃないのに、暢気顔のイスラさんにつられてしまった。

「こんなところで大胆な、というか、せつかちなとか、まあ、そんな具合に」

眉尻をさげて笑いながら、イスラさんはユエル様の様子を覗き見る。そして、おそらくはユエル様に、「それどころじゃないらしいな？」と声をかけた。

「なっ、何のことですか？ いえ、それよりユエル様を……っ」

「あ、そうだね。このままじゃ話しづらいし。……はいよつと。ミズカちゃん、ほら、出られる？」

イスラさんはわたしの訴えを聞き入れ、面倒くさげにはあったけれど、ユエル様の襟首を掴んで持ち上げた。

「苦しかったでしょ？ 大丈夫、ミズカちゃん？」

「わたしは大丈夫です。それよりもユエル様が」

ユエル様の下から這い出たわたしは立ち上がることもできず、ユエル様のバスローブを掴んだ。イスラさんに襟首を引っ張りあげられたせいで胸元がはだけてしまっていた。

イスラさんに体を持ち上げられ、そのまま床に転がされても、ユエル様は意識を取り戻さない。低い呻き声が漏れ、蒼ざめた顔が僅

かに歪んだ。

「ユエル様、突然倒れて……呼んでも返事をしてくれなくて、目を覚ましてくれなくて、わたし……わたしっ、どうしたらいいか……」

ユエル様の腕を掴む手が、わなわなと震える。

「うーん、まあ渴いてはいるみたいだけど。……そんな心配そうな顔しないで、ミズカちゃん」

「でもっ」

イスラさんはその場に片膝をついてユエル様の様子を窺った。ユエル様の額に片手を当てて、それから軽くペチペチと叩く。そうしてからわたしの方に顔を向け、笑った。

「たぶん、まだ大丈夫だよ。頻繁にあることじゃないけど、生殖者にはつきものの発作だからね、これ」

「え……」

「まあ、こんなところに放っておくのもなんだし。仕方ないから寝室まで運んでやっか」

やれやれと呟いてからイスラさんは腰を伸ばし、立ち上がった。

イスラさんは指を鳴らし、旋風を起こした。狭い所だったから、その風の影響で洗面台の上や棚に置かれたブラシや小瓶などがカタカタと音をたてて揺らいだ。

風はユエル様の身体を浮き上がらせた。ユエル様の両腕がだらりと下がる。それでも目を覚まさず、ただ少しだけ身じろいだのが窺えた。

わたしもふらつきながらもなんとか立ち上がり、それからイスラさんに頭を下げた。

「お願いします、イスラさん」

風がユエル様の体を冷やしてしまわないか心配だったけれど、ともかくユエル様を床に横たわらせたままであらねずにすんだことにホッとした。

「どういたしまして。ミズカちゃんのお願いならなんだってきくか

ら。遠慮なく言って？」

「……………」

どう返答してよいものやら分からず、口ごもってしまった。

イスラさんはユエル様の容態を案ずる様子もなく（もちろん、内心では心配してくれてるのかもしれないけど）、にこやかな顔を崩さない。

イスラさんはそうやって、わたしを不安がらせないよう気遣ってくれているのかもしれない。

「それに、こいつに貸しを作っておくのも、悪くない」

冗談めかして、イスラさんはにやりと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1721u/>

薔薇のまねごと

2011年12月11日22時50分発行